「譚綴」

与力伊藤銀之助

『伊銀捕物帖』

（一）家光拉致　（二）
（二）峰打ち　（三六）
（三）博打　（六五）
（四）白川夜船　（九八）

九谷　六口

（一）家光拉致

南町奉行所与力伊藤銀之助は、五谷弘兵衛から、将軍お傅役竹林三太夫の書状を受け取った。

三代将軍家光が拉致されたのだ。事は、家光と弘兵衛、それに元御殿医の娘、綾が愛宕山への散策中に起こった。

世の中に戦はなくなったとはいえ、家光は、侍とは武士にありと武芸を奨励し、自身も鷹狩りや剣道を好んだ。また、自由闊達な家光は、府内を見回るのも好きであった。だが、大勢のお供を引き連れた巡行には飽き飽きしていた。

「三太夫、何とかならんか」

「委細承知仕りました。徳山竹弥殿」

「竹弥……　余の名前か」

「如何にも。お忍びでござりますので」

三太夫の粋な計らいで散策は実現したが、それが裏目に出てしまった。まさに前代未聞の一大事である。知っているのは弘兵衛と三太夫のみ。老中たちに知れてはならないし、ましてや大名連中が知れば、どのような事態が発生するか判ったものではない。総て極秘裏に捜査を進めなければならない。三太夫は、伊藤銀之助に捜査を命じた。

伊藤銀之助は、背が高くズングリとした体格。眉は太く、口や鼻はでかい。それらに比べ、目は極端に細く、いつも眠っているような感じである。顔の造作や体付きから動作の鈍い男との印象を受ける。だが、銀之助は武芸百般、剣術、槍術、棒術、柔術、さらに役人には珍しく鎖鎌まで会得している。捕物に関してはジックリと話を聞き、証拠となる品を徹底的に調べ沈思黙考。糸口を見つけた途端、風貌には似合わぬ素早い動きをとる。まるで鎌で稲を刈る如く犯人を一瞬のうちにバッサリと逮捕する。鎖鎌の腕前も関係し、付いたあだ名は、鎌伊銀。皆は、伊銀と呼ぶ。

五谷弘兵衛、歳は家光より一つ下。家光が竹千代と呼ばれていた時代に近習と

Copyright© H.Mitani

して幼い日を送った。元服後、紀州家に剣道指南として出向いていたが、家光の身辺警護を担う徒侍として呼び戻されていた。三太夫の指示であった。
「殿が府内をお忍びで散策したいという。警護できるのはおぬししかおらん」

弘兵衛も鎌伊銀の噂は耳にしていた。二人は、ほぼ同年代である。
「かまいぎ……、いや失礼、伊藤殿」
「拙者の事をご存知のようでござるな。初めてお会いいたすが、拙者も五谷殿が六弦流の遣い手と存じております」
「伊藤殿……」
「五谷殿、お互いに堅苦しいことは止めましょう。伊銀で構わんし、拙者も弘兵衛殿と呼ばせていただく。如何か」
「宜しいな。そういたそう。ところで伊銀殿、書状の内容は如何であったか」
「三太夫殿のお考えは判り申した。家光公お気に入りの綾殿が、徳山竹弥殿、弘兵衛殿と散策中に拉致された。元御展医の娘とは言え、一介の町娘を心配されるとは、将軍の権威にも関わる事。そこで拙者に命じられた。綾殿と徳山殿の捜査は極秘裏に……。弘兵衛殿、さらに詳しく状況を話してくださらんか」

弘兵衛は、綾が住む二葉長屋を出立してから増上寺、愛宕山を回った事、愛宕山からの帰路、夕立に遭い番傘を借りに行った事、雨宿りの場所に戻るまでの経緯（いきさつ）、併せて自分の考えを話した。
「金目当ての犯行と思われる」
「拙者も同じように考えますな」
二人の間に沈黙が流れた。
「して伊銀殿、如何いたすおつもりか」
「……」
「伊銀殿っ！」
伊銀は、プイッと弘兵衛に背を向け、部屋を出て行った。
取り残された弘兵衛、付き合い難い男と顔をしかめた。

待つこと小半時、伊銀は一人の老人を連れてきた。小柄で痩せている。かなり

Copyright© H.Mitani

の年恰好と見えるが、目付きだけは鋭く、異様に輝いている。見据えられている感じである。

「弘兵衛殿、目明しの卯吉です。巷では、丶(ちょん)の字と呼ばれておるが……　拙者と組んで五年ほどになる。この男、初対面の相手には、いつも今のような目付きをいたすが、気を悪くせんでください。戻る途中、詳細は話しております」

「卯吉か。弘兵衛と申す。ひとつ宜しく頼む」

卯吉は、軽く頭を下げただけであった。

「事件が起きた山王付近には、種種雑多な職人、商人(あきんど)が住んでおります。また浪人も多く、犯罪が絶えません。この卯吉、あの界隈には顔の利く男、役に立ちます。卯吉も弘兵衛殿の推察通り、金目当ての事件と睨んでいます。ところで、卯吉。手下を一人、二葉長屋の隠居の所に付けてくれ。連中は、必ず何かを仕掛けてくるはずだ。すでに我々が動きにも気付いているはず。隠居に手出しすることはあるまい。手下は隠れる必要はない。良いなっ」

「判りました。仙吉を廻しましょう」

卯吉が、初めて口を開いた。体に似合わず野太い声である。

「伊銀殿。卯吉たちに二人の人相を教えたい。誰か絵を描ける者を知りませんか」

「拙者も弘兵衛殿に人相を聞こうと思っていたところ。卯吉の手下、松造がそろそろ絵師を連れてくるはず。何しろ手掛かりがない状態では動きが取れん」

「犯人の動きを待つ以外にないのであろうか」

卯吉が話す。

「五谷様、お気が急くのはごもっともでございますが、闇雲に動き回るのはむしろ危険。手馴れた連中であれば良いのですが、俄(にわ)かの場合、何を仕出かすか判りません。待つことも捕物のうち。ご辛抱を」

控えめな話し振りではあるが、妙に説得力がある。

卯吉は、十五年ほど前から十手を預かっているが、元々は一匹狼の博徒。丁半博打で名を馳せた過去を持つ。

「伊藤様！　連れて参いりやしたっ！」

「弘兵衛殿、絵師の荒川北東斎だ」

「いや参った参った。この暑い中、この岡っ引の足の早いこと。汗だくでござる」

Copyright© H.Mitani

柔和な顔付きの北東斎、作務衣の胸を開き手拭いで汗を拭いている。
「北東斎、そう言うな。人の命が掛かっていることだ。ま、ひとつ手助けを頼む」
「伊銀の頼み。何を差し置いても手伝わせていただきます。して、どなたが人相をご存知で」
北東斎は、丸めた半紙を畳に広げ、腰に下げた筆入れから筆を取り出した。
「五谷弘兵衛と申す。この度はご面倒をお掛けする。忝い」
「ワッハハー、いつも伊銀にこき使われています。さー、始めましょうか。綾さんの方からいきましょう。何でも構いません。綾さんを思い浮かべ、弘兵衛さんが感じるままを喋ってください」
「そうでござるな……」
綾の顔や姿は目に焼きついているが、弘兵衛、どのように話せば良いか判らない。
「弘兵衛さん、難しいようですね。無理もない。顔は思い出せても、どう話して良いか判らないものです。では……、綾さんは綺麗な方ですか？」
「も、勿論、綺麗な方でござる」
綺麗かと聞かれた途端、弘兵衛はスラスラと語り始めた。
「背格好は五尺位であろうか、トンボ模様の浴衣を着ていた。天真爛漫なお方。しかし、どことなく寂しげな様子を見せる時がござる。瓜実顔。目は大きくハッキリとしている。涼しげな……　澄んだ本当に綺麗な目でござる。見つめられると吸い込まれるような思いがいたす。鼻は高く、鼻筋は細くスッキリと通っている。唇は……」
「どうされました。唇はどのような印象ですか」
「綾殿は無事なのであろうか。拙者は気掛かりでござる。こうしている間にも、もしもの事が起こっていたらと思うと居ても立ってもおられん。伊銀、何とかならんのかっ！」
「弘兵衛さん、お気持ちは判ります。しかし、今は綾さんのためにも似顔絵を描き上げることが大事。さっ、続けてくだされ」
「判り申した。取り乱してしまった。伊銀殿、先ほどは伊銀などと失礼した」
「弘兵衛殿、気にしてはおりません。続けてください」
「唇は小さめで上唇と下唇は同じほどの厚さ。綺麗に整っておる。髪の毛でござ

Copyright© H.Mitani

るが、髷を結ってはおらず、まっすぐで肩までの長さ。風が吹くと優しくなびきまする。おう、そうであった。右の耳の後ろに黒子がござる。可愛い小さな黒子でござる……」

ここまで話すと、弘兵衛はフーと息をついた。小さな黒子まで……。北東斎だけでなく周りの者は、弘兵衛が綾に惚れていることを知った。

北東斎は、しばらくの間、目を閉じ腕を組んでいたが、傍らに置いた筆をサッと取るとサラサラと筆を動かし始めた。皆、黙って見つめている。似顔絵が描き上がった。

北東斎は浮世絵師。風景だけでなく美人画も多く描いている。伊銀や卯吉は北東斎の美人画を見ているが、ここに描かれている女は今まで見た絵とは違った雰囲気を持っている。

卯吉がボソボソと話し出した。

「このような……このような美しい女が居りますのか。弘兵衛殿」

卯吉は、既に六十歳。初めて見る面持ちの女。死ぬ前に一度、このような女に会ってみたものだと思うほどの良い女。なあに、助け出せば良いのだ。

伊銀もこのような女は初めて。しかも浮世絵で見る女とは異なる描き方である。

「北東斎、妙に生々しく感ずる絵じゃな。それに、こんなに美しい女など居るとは思えん。絵空事と言うが、この絵は現実離れしておるのではないか」

「どのように思われようとおぬしらの勝手。この北東斎、弘兵衛殿の話を聞き、思い描いた女を絵にしただけの事。私は綾さんを知らんし、このような女かどうかも判りません。似ているかどうかは、弘兵衛殿に聞いてくだされ。のう、弘兵衛殿、どうじゃっ！」

今にも語りかけてきそうな綾の顔である。息を呑む思い。

「綾殿にござる」

皆、半信半疑な面持ちでいる。しかし、弘兵衛が似ていると言う以上、信じる以外にない。冷静なのは北東斎だけ。

「まだ仕事が残っておりますぞ。竹弥殿を描かなくてはなりません。弘兵衛殿、次は竹弥殿について話して欲しいのじゃが……」

弘兵衛はハッと我に返ったように目を見開いた。いかん家光公を忘れていた。

Copyright© H.Mitani

「竹弥殿じゃが、背は五尺五寸ほど。拙者と似かよった背格好でござる。細身の体。丸に九枚笹の紋所。着古した着流し姿であった。細面の顔付き。目は切れ長で二重。眉もそれほど太くはない。やや端の方が上がっている。鼻筋は男にしては細く、小鼻も大きくはない。唇は長めで厚くはない。一つ一つの造作は華奢なようだが、意思の強そうな整った顔。聡明な感じを与える」

「なかなか見栄えのする男前のようですな。何か特徴のようなものはありませんか。これでは役者絵になってしまいます」

「拙者は、それ程良い男とは思わんが……。そうであるな、額は富士額。あっ！拙者としたことが……。額には、薄っすらと三日月型の刀傷が残っておりまする。子供の頃、拙者と刀を抜いての喧嘩になり傷つけたことがある。大きな問題になりかけたのだが、子供同士とのことで咎は受け申さずに済んだ」

「ほほー、額に薄っすらと刀傷ですか。描いてみましょう。ただ綾さんの時と違い何回か手直しが必要でしょう」

伊銀は、弘兵衛が話すのを聞いていたが、ふと、この竹弥と申す男、どことなく家光公に似ているなと思った。特に額の刀傷は家光のお印ともいえるもの。竹千代であった頃、お側付きの子供との喧嘩で付いたものと聞いたことがある。世の中には似たような事があるのだなと一人ごちした。

似顔絵は、卯吉の手下に配られた。綾の似顔絵を見た手下は大事そうに懐にしまう。仙吉を除いた手下たちは、卯吉の指示で取りあえず山王界隈の聞き込みを始めた。綾のような目立つ女であれば見た者は忘れまい。連れ去られた時に、見ている者がいるかも知れない。

しかし、見かけた者はいなかった。

事件から三日後のこと、隠居のところに訪ねるものがあった。綾は隠居の長屋に同居している。

「大工の八五郎さんは居ますか」

部屋にいた隠居と仙吉は顔を見合わせた。

「八五郎っ？。妙ですな。近ごろ、わしを八五郎などと呼ぶ者は居りませんぞ

Copyright© H.Mitani

っ！」
仙吉は色めき出す。隠居は、
「へぇへぇ、居りますよ。今、参りますから……」
表をみて驚いた。まだ頑是無い子供である。
「私が八五郎だが、坊は何の用事じゃ」
「おっちゃんが八五郎さんかい。おいら、おっちゃんに届けてくれって手紙を預かったんだっ！　はい、これっ！」
子供は手渡すと、じゃーねと言って帰ろうとした。
「坊っ！　ちょっと待ってくれぬかっ！」
仙吉も表に飛び出してきた。
「おっちゃん、何か用事かいっ。おいらの方は手紙を渡せば、もう用は済んだんだけど」
「坊、暑いのに偉いな。冷たい麦茶と白玉があるけど、どうする。喰っていかないかい」
「白玉か。おいら大好きだ。でも滅多に喰えないから……　良いのかい」
「さあ部屋に入りな。美味しいぞ」
子供は部屋にあがった。大好きな白玉にワクワクしている。
「坊、おっちゃんたちは、もう喰っちゃったからな。ここにある白玉、全部食べても良いぞ」
子供は、目を輝かせて白玉を食べている。頃合を見計り、それとなく訊いた。
「坊、この手紙は坊のとっちゃんが渡すように言ったのかい？」
「何言ってんだよ、おいらにとっちゃんは居いねぇよ。死んじまったって、かあちゃんが言ってたよ。この手紙は知らないおじちゃんから駄賃遣るから、二葉長屋の八五郎って人に渡してくれって頼まれたんだよ。この白玉、うめぇな。おっちゃんが作ったのかい」
「そ、そうだよ。そうか、うめぇか。よかったな。なんだ、坊が知ってる人じゃないんだ」
「うん。遊んでたら、おじちゃんが来たんだ」
「坊、おっちゃんも駄賃を遣ろうか」
「えっ、本当かい。今日は、おいら付いてるなぁ。で、何を頼みたいんだいっ」

Copyright© H.Mitani

「うん、そうだな。教えてくれるかい。どんなおじちゃんだった」
「痩せたおじちゃんだったよ。おいらの事、睨むんだよ。最初、怖かったけど駄賃くれるって聞いたら怖くなくなったよ。何だか体がちょっと右に傾いていたな。ちょっとだよ」
「侍かい」
「違うと思うな。懐手してたよ。侍は懐手しないからね」
二人は感心した。良く観察している。しかし、侍崩れか浪人者やも知れない。
「手紙を渡された場所は、坊の家の近所かい」
「そうだよ。おいらの長屋の近くだよ」
「そうかそうか。じゃあ、坊の帰り道だ」
仙吉は隠居の考えていることが判った。目付きの悪い自分が話すより年寄りの方が、子供は怖がらないと思い黙って聞いている。
「ご隠居、あっしら二人は面が割れている」
「そうじゃ。この手紙を読みたいが大切な手掛かり。仙吉つぁん、これを伊銀の所へ届けてくれ。ついでに大工の佐吉に来るように伝えてくれ。佐吉は面が割れていない。わしは、この坊を引き止めておく」

佐吉も幼友達である綾を心配していたが、師匠である隠居から連絡がない。自分からでしゃばる訳にはいかなかった。仙吉の話を聞き飛んできた。
「ご隠居、詳しい事は仙吉つぁんから聞いた。後は任せてくれっ。坊、このおっちゃんは用事があるから、おいらと一緒に行こう」
「佐吉、場所を確認したら、その足で伊銀の所に行ってくれ」

子供の長屋は日枝神社の傍にあった。佐吉は辺りをそれとなく調べたが、手掛かりになりそうなものはない。伊銀の所に向かった。

伊銀は、三太夫から極秘捜査と言われているため、自宅を奉行所替わりにしていた。それに同心達を使うことも出来ない。弘兵衛、卯吉それに卯吉の手下達は伊銀の家で寝泊りしている。
佐吉が訪れると例の手紙を囲み、皆が話し合っていた。

Copyright© H.Mitani

「佐吉か、ご苦労だったな。この手紙、お前も読んでみるか」
佐吉は手紙を受け取った。
手紙は、普通の半紙より心持ち厚いように思えた。どのような内容なのか読むのが怖い。
『二人。三百両。百両巾着。油紙に包む。二十日までに山王氷川神社、楠(くすのき)根元、三箇所に埋めろ。目印、榊(さかき)の枝。見張る。付けるな。殺す』
弘兵衛も手紙を読んだが、微かに安堵した。三百両といえば決して少ない金額ではない。この時代、町人であれば四人家族が二十年は暮らせる金額。侍と町娘の身代金として考えれば、むしろ高いと言えるかも知れぬが、身元は割れていないと思った。
「佐吉、どう思う」
伊銀は、どんな意見でも聞く耳を持つ。
「……下手な字ですね。二十日と言えば、後、三日しかありません。しかし、何故三個所に分けて埋めるのでしょう」
「今、我々も話し合っているところだ。何故、百両づつなのか……。それに余りにも下手な字だ」
それまで黙っていた卯吉が口を開く。
「手紙を届けたのは子供。目立たないように子供を使うのではないでしょうか。子供にとって三百両は重い。三つの巾着に分ければ子供にも持てます。取りに来るのは昼間でしょう。昼間の方が怪しむ者はいない。それに我々を見張るにしても、なまじ夜中よりは昼間の方が容易(たやす)いものです。同じ日に子供三人に運ばせるのか、二日か三日に分けて運ばせるのか……」
「なるほど。神社であれば人は多い。奴らは我々を知っている。だが、誰が見張りなのか我々には判断がつかない。参拝客が楠の根元を掘っている子供を見ても、ただ遊んでいるだけだと思うだろう」
これだけ言うと、伊銀は腕を組んだまま黙ってしまった。
弘兵衛は、気が気ではなかった。
「このような下手な字を書くにしては、かなり頭の良い連中のようだな。ところで佐吉、場所は判ったか」

Copyright© H.Mitani

「へぇ、子供の家は日枝神社の裏手でした。念の為、辺りを調べてみましたが別段変わった様子はありませんでした」
「そうか。ところで卯吉、連中は日枝神社近辺にいると思うか」
「弘兵衛さんの話では、人ごみの中で財布を出したのは増上寺だけとの事でしたね。増上寺、愛宕神社、氷川神社。これらはほぼ一列に並んでいます。愛宕神社、日枝神社、氷川神社を結ぶと三角になります。雨宿りした場所、つまり、事が起きた場所は、この三角に囲まれた真中付近です。奴らが増上寺に行った理由ですが、拉致する相手を捜すためと考えられます。増上寺であれば連中を知っている者も少ないでしょう。それに徳川様の菩提寺です。ご神君の出世にあやかり、金持ちの参拝者も多い。仕事の遣り易さを考えれば、この三角の中に連中が居るのではないでしょうか」
伊銀が、つぶっていた目を開く。
「なるほど。まだ確証が得られた訳ではないが、その付近に当りを付けよう。しかし奴らの目星が付かん。手掛かりはこの手紙だけ。松蔵、済まぬが今一度、北東斎を呼んで来てはくれぬか」

松蔵に伴われ北東斎が来た。
「私も伊銀宅に泊まった方が良いようじゃな。行ったり来たりで、暑くて適わん」
手拭いは汗で濡れている。余程の汗かきと見える。北東斎が手拭いを絞ると汗が滴り落ちた。絞った手拭いで、手、腕を拭く。
「これですか。拝見いたそう。松蔵は、字が読めぬくせに下手な字と言っていたが……。ここに居る連中の目は節穴か！　これを書いた者は、かなり筆を使える者じゃ。達筆じゃ！　しかも学問もある。お宅たちは、これだけの漢字をお使いになれるか！　この字はな、わざと汚く下手に書いた字じゃ。だが、達筆な者がいくら字形を崩し、下手に書こうとしても体が覚えているのじゃ。体がな。筆先を置く位置、筆先の返し。これらをごまかすことは出来ん。これら総てが筆上手だと申しておる。しかも、文字の書き出し部分の力強さから見ると、この者、武術の心得もあるようでござるな。侍であろう。いや侍だったのかも知れん」
伊銀は、子供の話を思い出した。手紙を預けた男は右に傾いていた。正面から見て右と言ったのだろう。左肩を下げ気味にしている。北東斎の見立てと合わせ

Copyright© H.Mitani

て考えれば、この男、侍だったに違いない。いや、この男もと言うべきかも知れぬ。この男が手紙を書いた証拠はない。別の者が書いたのかも知れぬ。
いくら屈強な侍であっても、永く左の腰に大小を帯びていると、体は左に傾き加減になっていく。履物も左の方が早く磨り減っていく。大小とは重いものである。
「北東斎、卯吉たちにこの紙の出所を調べさせようと思っているが、紙についても何か気付いた点はないか。普通の半紙よりも多少厚いように思うが」
伊銀の捜査に何度も付き合わされている北東斎、自分の役割は心得ている。この日も懐に天眼鏡を収めていた。
「手掛かりはこの手紙だけでしたな。先ほどから気になる事がありましてな。天眼鏡で詳しく調べようと思っていたところ」
伊銀たちは、当然手紙の表から調べ始めるだろうと思っていた。
しかし、北東斎は手紙の裏から調べ始めた。
北東斎は裏の四隅を調べただけで、
「やはり、そうであったか……」
とつぶやき、天眼鏡を置いた。
「何も天眼鏡を使うまでもなかったのだが……。ほれっ！　ここをご覧なさい。細いぶっちがいの線が描かれている。一箇所だけだが」
確かに四隅の一箇所に、やっと見えるくらいの細い線が二本、十字の形で描かれている。しかも紙の裏にである。
「この手紙を書いたのは刷り師じゃ。この十字の線はな、見当と言って版画を刷る時に使う線じゃ。本来、見当は版木の隅にカギ型、脇に一文字の溝を彫って使う。滅多にないことだが綴じ本の色表紙などを刷る時に紙の方に付けることがある。これはその時の紙じゃな。近頃浮世絵が流行り出したのは各々方もご存知であろう。世の中が落ち着いてきたからな。家光公のお陰じゃ。たまには浮世絵の話なども良いであろう。まあ、聞きなさい」
北東斎の講釈が始まってしまった。聞く以外にない。
「浮世絵は、まず私のような絵師が絵を描く。そして彫り師が版木を彫る。一つの浮世絵に何枚もの版木を使う。たった一枚の浮世絵に十数枚もの版木を使うこともある。色が多いからな。彫り師は絵を見て色の組み合わせを考える。一枚の

Copyright© H.Mitani

版木に色が重ならないようにな。まず墨版だ。輪郭や髪の毛などの墨刷りの版木を彫る。色版用に墨版を何枚か刷り、この墨絵に色をおく。これを使い色版を彫る。なるべく少ない版木に仕立てるのが技じゃ。一色ごとに版木を使ったのでは金が掛かるし、後を引き受ける刷り師が堪ったものではないからな」

知っているつもりであっても改めて話を聞くのも面白いもの。

「版木が出来上がれば刷り師に渡される。刷り師は元絵を見て色の重ね具合を考え刷る順を決める。版木に筆、刷毛、タンポを使い色を置き馬簾（バレン）で刷る。一色であれば簡単だが何枚もの版木を使い重ね刷り、つまり多色刷りをする。色がずれては絵にならぬからな。そこで見当が必要なのじゃ。しかし今話したのは浮世絵の場合。紙の方に見当を付けるなど極稀（ごくまれ）にしか遣らない。その紙を使ったとはな……。しくじりおったな連中はっ！　ワッハッハー」

北東斎の高笑いが次第にか細くなっていった。

「……しかし、私の仕事仲間に思い当たる刷り師はいないが。いずれにしても大江戸とは言え、刷り師はそれほど大勢いる訳ではない。殆どの彫り師、刷り師は知っているつもりじゃ。危な絵や春画を隠れて作っている連中かも知れんな」

多色刷りは、年季を掛けなければ出来るものではない。学問もあり達筆。しかも武術のたしなみがある侍だった者。多分、歳は喰っているであろう。とすると手紙を書いたのは懐手をした若い男ではない。何人もの人間が関わっている。懐手をした男も侍であったようだ。連中は侍崩れ、浪人の集団か。

「各々方、動く時が来たようじゃ！」

伊銀は、三百両の算段は三太夫に頼むつもりでいる。

「北東斎、拙者は版元を調べてみたい。手広く版画を商っている版元を教えてくれ。卯吉らは例の三角地域を再度当たってみてくれ。北東斎が推察したような刷り師の聞き込みだ。佐吉は隠居のところに居てくれ。また何か仕掛けてくるかも知れぬ。弘兵衛殿は拙者と行動を共にして欲しい。どうやら二十日までに連中を見つけ出す事は難しいかも知れぬ。そこで二十日の行動だが……　これは明日にでも話す。各々方も策を考えて欲しい」

北東斎が口を開いた。

Copyright© H.Mitani

「手広く商っている版元ですなっ。そうですな阿波屋ですな。主人の佐平は版元仲間にも顔が広い。しっかりとした仕事をする男だが阿波屋は大きくなり過ぎた。この前佐平に会ったが、総ての扱い物に目を通すのは無理になったとこぼしておった。間口が広くなるのも考えものですな。危な絵のような裏物は扱ってはいないと思うが……番頭、手代たちが佐平に隠れて……。いや勝手な憶測は危険じゃな」

「阿波屋か。弘兵衛殿、阿波屋に行く前に三太夫殿に会いに行こう。では動くとするか。皆は暮五ツ、ここに集まって欲しい」

事件から既に三日が経っている。三太夫は見るからに憔悴しきった様子でいた。弘兵衛には理由が判っているが伊銀には判っていない。

伊銀には、家光が懇意としている綾が、幼友達の竹弥と共に拉致された。家光は心配しているが、天下の将軍が小娘の行方に腐心しているなどと公にはできないと言ってあるだけだ。

「おぉおー、来てくれたか。して調べの方は如何じゃ」

伊銀が状況を説明した。

「綾殿は無事であろうかのう。殿も心配しておる。竹弥とか申す侍も無事であろうな」

「金目当てでございます。人質には手を出さないはず。三太夫殿、身代金でござるが、こ度の件、奉行所には報告しておりませぬ。三太夫殿に手立てして頂く以外に策がございません。いずれは取り戻しまするが何とかなりませぬか」

「安心せよ。おぬしたちが帰るまでに用意しておこう。伊銀、済まぬが弘兵衛と二人で話がしたいのじゃが……」

「いや失礼仕った。拙者は控えで待っておりますゆえ、弘兵衛殿、話が終わりましたら声を掛けてくだされ」

伊銀は部屋を出て行った。

「弘兵衛、老中どもは殿が寝込んでいると信じておる。それは良いのじゃが、いろいろと判断せねばならぬ事が多い。殿が決めたようにしなければならぬからな。難しい事もあってな。殿であれば即断するであろうが……。殿や綾殿の事が気掛かりで頭も良く動かん」

Copyright© H.Mitani

「三太夫殿、目星も付きました故ご安心召されよ。伊銀も卯吉も切れ者でござる。今しばらく踏ん張ってくださらぬか。三太夫殿が寝込みなどしたらお城は大変でござる。今しばらく……」

綾は、変わった娘だ。数年前までは御典医柏原典膳を手伝っていたが、今は大工を引退したご隠居、八五郎の長屋に同居している。御展医とはいえ当時は堅苦しいものではなく町医者が城に行くこともあった。典膳は、そのような医者の一人だった。

家光と綾の出会いは、典膳が綾を伴い城に出向いた時であった。綾は、医術の心得があるためか将軍とはいえ物怖じせずに接した。家光はそのような綾を気に入った。何度か城で話す事はあったが所詮、町娘と将軍である。弘兵衛も含め、奇妙な友情のようなものが出来上がっていた。

典膳は、弟子を持たなかった。典膳が死んだ後、綾が継いでも良かったのだが、女手一つで医者を切り盛りするのは無理であった。途方に暮れていると、典膳の知り合いの八五郎が綾を引き受けることになった。何故、綾が典膳を手伝うようになったのか、親たちについては誰も知らなかった。

綾は、長く患者に接していたためか、はっきりと物を言う。ややもすれば、ぶっきら棒で男言葉のようであった。

三太夫が用意した金を懐に、二人は阿波屋に向かった。

「佐平か。詳しい事は申せぬが侍上がりの刷り師を捜しておる。年寄りであろうと思っておる。北東斎は思い当たるような刷り師は知らんと言っている。裏物を刷っているはずじゃが、心当たりはないか」

「へぇ、お捜しの刷り師たちかは定かではありませんが……、心当たりがございます。実は、お恥ずかしい話ですが、以前、そうですねぇ一年半ほど前でしょうか、あるお武家様に、佐平また例の絵を捜しておいてくれと申されまして……。へぇ、ようございますと応えておきましたが、さっぱり事情が判りません。店の者に聞くのも何ですので、気掛かりでしたがほっておきました。ある日、手代の喜造が話すのをたまたま耳にいたしました」

佐平は顔をしかめた。

Copyright© H.Mitani

「何と危な絵が手に入ったので例のお武家のところに持っていくとの内容でした。阿波屋ではその手の絵は扱いません。喜造を部屋に呼び問い詰めますと、愛宕神社の北側にそのような絵を作る連中が居るとのことでした。出来上がると喜造に渡していたそうです。直接渡せば良いのにと喜造が聞きますと、事情があり武家たちには顔を見られたくないと申していたそうです。喜造には閑を出しました。如何ですか、何かの手掛かりにはなりましたでしょうか」

「良く思い出してくれた。礼を言うぞ」

「お礼などと勿体ない。お役に立てただけで嬉しゅうございます」

「ところで、喜造はその者たちの名前を言ってはいなかったか」

「何とも……。喜造も名前は聞いてなかったようでございます。余程、世間様から隠れていたい事情があるのではないでしょうか」

二人は佐平に礼を言い阿波屋を後にした。

弘兵衛は、喜造が気になった。だが、伊銀は、魔が差しただけで小遣い銭欲しさのためだけであり、一味との関係は深くはないと言う。また、武家の方も危な絵は別にご禁制でもなく、喜造に仲立ちさせており連中との繋がりはないだろうと言った。

夕刻、伊銀、弘兵衛、卯吉、手下二人それに佐吉が加わり、総勢六名が伊銀宅に集まった。

「阿波屋の情報では愛宕神社の北側に該当しそうな連中がいるらしい。卯吉、その付近に詳しいか」

「へぇ、あの辺には甚平長屋、ボロ長屋、裏手長屋があります。松蔵、行ってみたか」

「今日、三長屋とも見てきやしたが静まり返っているだけで……。何軒かに声を掛けようかとも思いましたが、調べが入っている事が知れてはと思い、止めました」

「そうか、それで良い。佐吉、明日その長屋に行ってくれ。大工であれば怪しまれる事もあるまい。大工道具を担いで参れ。修理を頼まれたが、お宅ですかとでも言って覗いてみろ」

Copyright© H.Mitani

翌日、佐吉は三つの長屋に行った。
甚平長屋とボロ長屋の住民は皆物売りだった。裏手長屋には唐傘貼りの浪人、着物の繕い女、棒手振りなどが住んでいた。その一軒は空家であった。中を覗くと、版木や紙、絵皿、バレンなどが散らかっていた。刷りかけの紙には女が盥で淫らな格好で行水をしているものがあった。危な絵だ。
唐傘貼りの浪人に聞くと、五人ほどの男が出入りしていたが、四、五日前から静かなままだと言う。犯人たちであろう。佐吉は、連中が何処に行ったか知っているかと浪人に訊いたが、せせら笑われただけであった。
佐吉の報告を聞いた伊銀は、何か手掛かりが無いか卯吉と共に裏手長屋に行ってみることにした。
部屋は、余程慌てて出て行ったものと見え、酷い散らかりようであった。手分けして茶箪笥、押し入れの中まで調べて見たが手掛かりになりそうなものは何もない。卯吉が畳を上げた。書状が見つかった。伊銀が受け取り、開いた。
「証文の写し、借金の証文だ。利子を加え七十五両を寛永二年長月五日までに生駒屋源兵衛宛返却……。来月の五日か。生駒屋と言えば……」
「旦那、胴元ですよ。やつら、博打で負けたようです。借りた日付からみると……日歩五分ですな。金を貸すなど、源兵衛にしては珍しい。連中は、かなり腕が立ちそうですな。普通、金がなければ腕の一本もへし折られ、翌日にでも返さなければ簀巻きです。多分、源兵衛を脅したのでしょう」
「名前が書いてあるな。五人か。佐伯三郎衛門、鏑木主人、松岡小十郎、原源太、石塚隼人……。藩にいた時に博打にでも手を出したか、何かしくじりでも遣ったのであろう。それが原因で藩を追われたな。北東斎も腕が立つ者との見立てだった」
「あっしは、ちょっと源兵衛のところに行ってきましょう」

卯吉は、数奇な人生を送っていた。
生まれた時から誰が親なのか判らない孤児(みなしご)。農家の納屋で、オギャーオギャーと泣いているのを見つけられたが、この農家も極貧。子供を育てる余裕などはなく、女房は乳など出ない。可哀想とは思いつつも、そのままにしておくしかない。しかし、世の中とは面白いもの。納屋に紛れ込んできた野兎が赤子の卯吉に乳を

Copyright© H.Mitani

与えた。夫婦にとって、野兎は格好の食料。夫婦は捕まえようとするが野兎の方が素早い。夫婦がいなくなると、また戻ってくる。そのうちに夫婦は捕えるのを諦めてしまった。卯吉の名はこの夫婦が付けた。夫婦も卯吉に情を持ち、なけなしの雑炊を与えるようになった。

だが邪魔者である事には変わりなかった。六、七歳の頃、卯吉はこの農家から出て行った。物乞い、盗みなど何でも遣った。仕事を捜したが、いくら頼んでも雇ってくれる所などなかった。

十五、六歳の頃、ある商人の帳場から金を盗んだ。生きていくには、盗みを続けるか、盗んだ金を増やす手立てを考える以外に道はなかった。しかし、盗みを続ければいずれ捕まるに決まっている。手立ては博打しかない。賭場に潜り込むようになった。

賭場では長い時間、片隅でただジーッと見ているだけ。しかし、見ているだけでは胴元から締め出されてしまう。一日に賭ける金額は微々たるもの。その状態を幾月も続けた。盗んだ金が半分ほどになったある日、卯吉は不思議な事に流れを読むことができた。次の目は半。有り金総てを半に置いた。壷が上げられた。目は半。この日、卯吉は二十両を稼いだ。次の日、全く流れを読むことが出来ない。次の日もその次の日も。流れが見えない時は無理をしない。小銭しか賭けない。

数日が経った。読めた。十五両を稼いだ。流れが判る日の間隔が短くなっていった。賭場では卯吉の名前が囁かれるようになっていた。それに伴い、胴元の目が厳しくなっていった。卯吉に気を付けろ。

ある日、卯吉が大金を賭けた場で壷振りがイカサマを遣った。他の者は気が付かなかったが卯吉は違った。声を上げず、ただジーッと壷振りを睨んだ。胴元は、卯吉が睨んでいる姿を見た。卯吉は賭場を荒らすような真似は一切しない。卯吉の博打は、静かで落ち着いたものだ。博徒連中からの受けも良い。

卯吉は見破っている。何も言わず壷振りを睨む卯吉に胴元は恐ろしさを感じた。卯吉がイカサマだと一言いうだけで、博徒連中は胴元を襲うだろう。イカサマを遣る賭場。胴元連中からも、どのような仕打ちを受けるか判ったものではない。壷振りは蛇に睨まれた蛙のようにすくんでいる。このままでは他の連中に気付かれてしまう。胴元、生駒屋源兵衛は、卯吉を別の部屋に呼んだ。

Copyright© H.Mitani

二人きりになると、源兵衛は土下座して詫びた。今後一切イカサマは遣らない。卯吉は頷いただけで賭場に戻った。賭場が閉まる八ツ半。最後の場で卯吉は丁に五十両を賭けた。目は丁。珍しく卯吉が大声を上げた。

「チョーンッ！」

この日から卯吉は、丶（ちょん）の字と呼ばれるようになった。

卯吉は、四十歳になると博打を止めた。遊びは好きではないし酒も遣らない。女房も居ない。一生、食うには困らないほどの金が貯まっていた。金目当てに下賤な連中が寄り付くようになっていたが、卯吉は相手にしなかった。中には卯吉を襲う者もいた。だが生半可な連中が適うものではなかった。一匹狼とも言える博徒は、身を守る術（すべ）を我流で身に付けている。卯吉は常に匕首を晒に忍ばせていた。素早く相手の懐に飛び込み腹をえぐる。

卯吉は字が読めなかった。閑潰しではないが、四十過ぎの大人が子供に混じり寺子屋に通い始めた。体が鈍ってはいけないと柔術も習い出した。

同じ道場に通う伊銀の父、鉄之助に出会ったのは、この頃であった。伊銀、この時まだ三つ。鉄之助は、丶の字の鋭い洞察力を見抜いていた。柔術も四十過ぎで始めたとは思えないほどの上達振りである。知り合って五年ほど経ったであろうか、鉄之助は卯吉に十手持ちを勧めた。伊銀が家督を継ぎ、与力になったのは十八の時であった。卯吉はこの頃、二人の手下を持つ、丶の字の親分と呼ばれるようになっていた。捕物については、丶の字が伊銀の師匠であった。

「源兵衛は居るか」

「な、何だ！　ジジー。ここは、てめぇのような老いぼれが来る所じゃねぇよ。さあ帰った、帰ったっ！」

卯吉が賭場を離れてから十五年近くが経っている。若造は卯吉を知らない。

「若いのっ、源兵衛に卯吉が来たと伝えてくれ」

若造は、源兵衛から滅多やたらと人を入れるなと言われている。動こうとしない。

「俺の言う通りにした方が良い。取り次がねぇと、後で源兵衛にこっ酷い目に遭わされるぜ！」

小さい体に似合わず凄みのある目付き風体。渋々、中に入り伝えた。源兵衛が

Copyright© H.Mitani

飛んで来た。
「おぉ、おぉ。どうした、どうした。久しぶり、久しぶりだなあ。さあさあ、そんな所に、そんな所に立ってねぇで、入ってくれ、入ってくれっ！」
源兵衛は下にも置かない歓待よう。若造は、このような源兵衛を見るのは初めてである。何が何だか判らない。
「サブ、ぼさっと、ぼさっとしてネぇで。何だ、何だ、その顔はっ！　鳩、鳩が豆鉄砲くらったような顔してるんじゃねぇ。オメぇも、丶の字、丶の字って聞いたことがあるだろう。このお方だ。このお方が丶の字様だ。お顔を良おく拝んでおくんだな」
サブは、ビックリ。あの伝説の丶の字がこの人か！　こんな小さい人だったのか。
部屋に入るなり源兵衛が喋りだした。
「丶の字、丶の字よお、オメぇ、オメぇ老けたなあ。目付きだけだ、目付きだけは変わってねぇが」
「源兵衛、人の事を老けたなんて言うんじゃねぇ。おメぇもたっぷりと老けてるぜ。それに変わってねぇな二度烏（にどからす）」
源兵衛の渾名は二度烏。興奮して話す時は同じ言葉を必ず二度言う。聞いてる方は堪らない。
賭場で負けた連中は、「烏カァカァ、源兵衛ブーツブッツ。烏カァカァ、源兵衛ベーチャベッチャ」と歌いながら帰っていく。

「なんでぇ、老けたけど変わってねぇか。妙な言い回しだなあ」
二人は大声で笑った。卯吉が、このような大声で笑うのは何年振りであろうか。キリキリしていた若い頃の遣り取りが思い出されてくる。二人が顔を見合わせた。目が潤んでいる。
卯吉が一人ごちした。足はとっくに洗ったが、この空気にはシックリ来る所がある。てやんでぇ、体はまだ覚えてやがるのか。阿漕なもんだぜ。
「今日は、今日はヨオ、どう言う風の吹き回しだい。十手、十手を預かっていると聞いたが、その筋かっ？　えっ、その筋か？」

Copyright© H.Mitani

「源兵衛、五人組の侍崩れの件だがな」
「あぁ、あの連中か。丶の字、その筋だなっ。カッカしやがって。気が付きゃ、気が付きゃよぉ、五人で五十両。ふざけやがって、金がネぇと来やがる。明日までに耳を揃えて持って来い、さもネぇと簀巻きだと言ったらよ、凄みやがった。連中、腕が立つ。腰の物はこっちで預かるが、出戻られた日にゃあ堪らねぇ。仕方ねぇから証文、取ったまでよ。戻さねぇ時は他の胴元に声掛けて、そん時ゃあ簀巻きよ。やつら裏手長屋に居らあ。行ってみな」
「ところがショバー変えやがったっ」
「なにぃ、ショバ変えたっ！　そりゃあ、こっちにとっても、こっちにとってもよお、面白くねぇ話だ。何処行ったか判ってんのかっ！」
「馬鹿言ってんじゃねぇよ。それが判ってりゃ、ここに来る訳ねぇだろうがっ！」
卯吉も以前の言葉遣いに戻ってしまう。
二度烏、腕を組んで考える。連中、何か遣ったな。こっちが先に見つけても金が工面できたかどうかは判らねぇ。そうなりゃ簀巻きだ。金も取れねぇし、丶の字の抱えてるヤマも解決しねぇだろう。誰の得にもならねぇ。これじゃあ面白くねぇな。お上がお縄にすれば七十五両は戻って来ねぇ。これも面白くねぇ。しかし、丶の字が俺んとこに来るぐれぇだ。結構でけぇヤマだな。あの頃、丶の字にはしこたま持っていかれたが、丶の字の博打見たくていろんな奴が賭場に来た。来りゃあ打つわな。あん時は、丶の字のお陰でがっぽり儲けさせて貰った。
「丶の字。どんなヤマなのかは興味がねぇし、お上の仕事を手伝う気もねぇが、こっちにも事情があらぁな。こっちはこっちで捜させて貰うぜ。安心しろ。丶の字の邪魔はしねぇ。俺たちゃあ、やつらのツラー知ってるからな。何か判ったら教えるぜ」
「済まねぇな。二度烏」
「馬鹿野郎。こういう時はな、済まねぇ源兵衛様って言うだよ」
またまた二人は大声を上げて笑った。

翌日、伊銀の家の前でチンピラ風の若い者がウロウロしていた。玄関から離れたところでしきりに声を掛けている。
「ごめんよ、誰かいねぇか。ごめんよーっ！」

Copyright© H.Mitani

例のサブである。余程、与力の家が苦手な様子。卯吉が顔を出した。
「丶の字っ！　いやあ助かった。与力が出て来たら、どうしようかと思ってやした。源兵衛からの伝言です」
「サブ、おもてでは何だ。中に入れ」
「……」
「中に入れって言ってんだ。さあ入れっ！　誰かに聞かれたらどうするっ！」
「へぇ、どうしても入らなきゃ駄目ですか」
「当たりメぇだ！」
可哀想にサブ、足をガタガタ震わせながら入って来た。伊銀たちの前に来ると、まるでお白州での取り調べのような様相。
「サブと言うのか。本名は何と申す」
「へっ、三郎兵衛と申しやす」
「ほお、なんとも爺むさい名前だな」
サブが、急に形相を変えた。
「てやんでぇ、親が付けてくれたありがてぇ名前だっ！　与力か何だか知らねぇが、ケチー付けると只じゃあ置かねぇ！」
尻捲くって胡座かく。
「いや悪かった。お前は親思いだな。感心じゃ。ところで源兵衛の伝言を聞かせてくれ」
サブ、座りなおして話しだした。
「昨日ですが、うちの連中が例の奴らを見掛けやした。三人は左衛門町で二人は角谷町。キョロキョロ辺りを見張っている様子で時刻は、ほぼ同じ時刻だったそうです。源兵衛は、気付かれては拙いので後は付けさせなかったと言ってやした」
「サブ、源兵衛に礼を言ってくれ。お前、時間があるのか。今少し此処に居たらどうだ。口は堅そうだな」
サブは、オドオドした態度もなくなり目を輝かせている。
「しかし妙だな。同じ時刻に五人が外に出ていた……」
弘兵衛が形相を変えて怒鳴った。
「五人以外にも仲間が居るのかっ！　さもなければ、既に……」
「いや流石の連中も、そこまではすまい。卯吉、どう思う」

Copyright© H.Mitani

「そうですね、今までの動きを見ますと利口な連中です。人を殺(あや)めれば死罪は免れない事くらい、奴らにも判ります。分け前などを考えればこれ以上新しい仲間を増やすとも思えません。つまり五人のみ」

「左衛門町と角谷町に分かれて、外を見張っていた……」

弘兵衛が声を上げた。

「伊銀殿っ！　二人は、別々に囚(とら)われているのではっ！　居場所は左衛門町、角谷町。卯吉っ、二つの町に大きな建物はあるのかっ」

「あの辺には寺や神社などはありません。町家、長屋だけのはずですが。しかし、何故大きな建物が絡むので……」

「町家、長屋であれば所詮狭い部屋。周りの者の目や耳も多い。つまり、縄や猿轡などを掛ければ目立つはず。それに声を上げて脅す事も出来ぬ。周りのものが番所にでも知らせるからな」

弘兵衛は、しばしの間を置いて言った。

「二人は、自由……。で、ありながら何故、逃げ出せないのか……。何か巧妙に二人が逃げ出さない方法を考えた……　判らん。だが、救い出すのは容易い。金を受け取れば二人をそのままにして逃げる算段……」

伊銀も卯吉も二人が自由などと常識では考えられないと思ったが、否定する事も出来ないでいる。しばし沈黙が続いた。

沈黙の後、弘兵衛が話し出した。

「卯吉は、同じ日に子供三人に運ばせるのか、二日か三日に分けて運ばせるのかと申しておったな。二人が別々の所に居るとすると、掘り出した金は、それぞれの所に運ばれるはず」

伊銀は、弘兵衛の話に賭けることにした。

「奴らに感づかれないよう、無闇に左衛門町、角谷町の探索はしない。居場所は、金を取りに来た者を付けることとする。良いな。さて二十日までに金を埋める件だが、これは弘兵衛殿と隠居に遣ってもらう。十九日の夜に埋めて欲しい。昼間に大人が根元を掘っている姿は不信をかう。問題は二十日か、それ以降の動き。卯吉、物売りに変装し境内で楠を見張ってくれ。現場では卯吉を中心に物事を進める。根元を掘る者がいたら仙吉に合図しろ。サブ、おぬしは賭場で連中の顔を見ている。卯吉と共に物売りに変装し手伝ってくれぬか。源兵衛には伝えておく」

Copyright© H.Mitani

サブはその気になっている。面白れぇや、一丁やって遣ろうじゃねぇか。丶の字と一緒に事を進められるなんて滅多にねぇぜ。

「佐吉は、夜を受け持ってくれ。三人が掘りに来たとしても行き先は二箇所だ。仙吉と松蔵は、巾着を持ち帰る者を付けてくれ。多分、子供だと思うが、脇目も振らずに歩いていくだろう。付けるのは容易だが問題はやつらが見張っていることだ。どこで見張っているかは判らん。余程、注意しないといかん。難しいが出来るか」

「判りやした。任せて貰いやしょう。松蔵、神社から左衛門町、角谷町への道筋を、いま一度確かめておこう」

葉月十九日の夜。

山王氷川神社境内にある楠の大木。この神社の周りを沢山の木々が取り囲んでいる。その中でも一際（ひときわ）大きな楠の根元に、弘兵衛と隠居が巾着を埋めている。

「ご隠居、感じませぬか」

「何をじゃ」

「やはり見張られてますな。殺気はないが目線を感じます。しかも複数ですな」

六弦流の遣い手。神経は研ぎ澄まされている。三つを埋め榊の小枝をその上に挿す。

葉月二十日。

卯吉、サブは小体（こてい）な屋台を設（しつら）えて朝から饅頭を売る。着流しに前掛け姿。二人ともこのような格好は初めてのこと。こそばゆく思いながらも辺りに気を配る。

仙吉は旅姿で煙管を燻らせ、地方から江戸詣でのつもり。松蔵は、物乞いに扮装した。汚れた手拭いで頬っ被りをしている。着物は本物の物乞いから買ったもの。臭くて堪らない。

境内では、大人、子供、大勢が賽銭を投げたり拝んだり、遊んだりしている。

午の九ツ頃、子供二人が辺りをキョロキョロしながら楠に向かった。

「丶の字。あの二人の子供、変ですぜ」

「来たな。あの二人だ。二人一緒に来たか。帰りは二手に分かれるな。ま、仙吉、

Copyright© H.Mitani

松蔵のことだ。上手く遣るだろう」
卯吉は二人に合図を二つ送った。一つは子供が来た合図。いま一つは連中の姿はないようだとの合図。子供は、脇目も振らずに楠の根元に行き必死で掘り出す。どう見ても遊んでいるようには見えない。しかし、そんな二人に目を向ける者はいない。二人は巾着を掘り出すと、目を合わせ頷き合った。案の定、一人は神社の表から、もう一人は、裏から出て行った。
仙吉は裏から出て行く子供を、松蔵は表から出て行く方を付けることにした。
仙吉、煙管（きせる）の雁首を傍の石にコンコンと打ち付けて煙管入れにしまう。さて、との雰囲気で立ち上がり、背伸びをしながらゆっくりと歩き出す。松蔵は、ヨロヨロと動き出す。
仙吉の方の子供は、どうも左衛門町の方角に向かい歩いていくようだ。多分、左衛門町へは寄り道せずに行くはず。道は判る。当たりを付けながら先回りし、子供の姿を見付けるとまた先回り。坊ず、シッカリ歩け。仙吉は心の中で呟きながら追跡を続ける。左衛門町付近に来た。此処からは、先回りは出来ない。仙吉の腕の見せ所。道の曲がり角に来ると周りに注意しながら追いかける。道を歩く時は家々の屋根の上、窓に気を配る。見張っている者はいないようだ。
子供が、汚い長屋に入った。仙吉は、身を隠して見張ることにした。
随分と汚ねぇ長屋だな。奴ら急いで空き部屋を捜したようだ。この長屋なら空き部屋の一つや二つあっただろうな。俺も知らねぇ長屋だ。
見ると子供が出てきた。ニコニコしている。駄賃でも貰って喜んでいるのだろう、少し離れて後を追う。

「オイオイ、坊や」
「何だいおっちゃん、何か用かいっ」
「嬉しそうだな」
「余計なお世話だいっ！」
「おう、そうだったな。おっちゃん、旅の途中なんだが、氷川神社はどっちだい」
「この道を真っ直ぐ行きゃあ、人ごみが多くならぁ。その向こうだぜ」
「そうかい。ところで、あの長屋は坊やの家かいっ」
「なに言ってんだよ。あんな汚ねぇとこに住んじゃいねぇよ。俺の長屋は、もっ

Copyright© H.Mitani

と綺麗だい」
「そうだったのか。おっちゃん勘違いしたようだな。親戚の家だったのか」
「勝手に決めんじゃねぇよ。駄賃、くれるって言うから用を手伝っただけだい」
「何だそうか。しかし、あんな汚いとこにも人が住んでるんだ。あれじゃ年寄りの一人暮らしだな……」
「おっちゃんは何でも勝手に決めんだな。いい加減にした方がいいぜ。年寄りじゃねぇよ。おっちゃん位のが四人居たけどよ」
「そうか、坊やが嬉しそうな顔して出てきたから、ちょっと声を掛けたんだ」
「そうかい。おっちゃんよ。人に道を聞く時はな、駄賃ぐれぇ呉れるもんだぜ。今度から気をつけた方がいぃぜっ」
仙吉は、先ほどから腹の中が煮え繰り返っている。可愛くない餓鬼だ。
「旅の途中だ。路銀も少なくなってな。今度から気をつけるよ」
「そうよ、そうした方がいい。じゃ、俺はダチと待ち合わせてるから行くぜ。気い付けて旅しなよ。じゃあな」
もう、ぶっ飛ばしたい位の思い。男四人と言うことは、竹弥は此処にいる。
一方、松蔵の方。歩く方向は角谷町。先回りしながら後を付ける。ある角を曲がった所で松蔵、ぎょっとする。男が往来の真中で子供を待ってる。角谷町には、まだ距離がある。一瞬の差で身を隠せず、男と目が合ってしまった。引き返したりすると勘ぐられる。松蔵、度胸を決め、そのままヨロヨロ歩いていく。男が子供に何かを渡している。駄賃であろう。子供は走り去った。松蔵は男に近づいていった。
「ダンナー、旦那。飯でも喰わしてくれませんか。おらぁ、何日も喰ってねぇだ。このままじゃ死んじゃうよう。何か喰わしてくれ」
この男、臭くて堪らない。
「あっち行け、あっちに！　あっちに行かねぇと、ぶった斬るぞ！」
「旦那ー、旦那ー」
こんな所で騒がれたら堪らない。ましてや昼間の事、ぶった斬ったりすれば騒ぎが起こりかねない。
「五月蝿い奴だな。金を遣るからあっちに行けっ！」
「旦那、金じゃ駄目だ。何処行っても臭せぇからって、何も売っちゃくれねぇ。

Copyright© H.Mitani

金じゃなくて何か喰うものが欲しいんで」
「判った。判ったから黙って付いて来い」
松蔵、ヨロヨロと付いて行く。臭いけど本物のボロ着で良かった。
長屋に付くと、男は、ちょっと待ってろっ！　と言って部屋に入った。中でボソボソ声がしている。バカヤローの声も聞こえる。先ほどの男が握り飯を持って出てきた。松蔵、飛びつかんばかりの様子で握り飯を奪った。
「おありがとうございます。おありがとう……」
「うるせぇんだよ！　喰うものを手に入れたんだ、さっさと行けっ！」
松蔵は、またヨロヨロと去って行く。
長屋は判った。この握り飯は、女手のもの。綾は、此処にいる。

佐吉を除き、皆が伊銀宅に集まっていた。
「皆、よく遣った。ところで松蔵、まだ臭いが何とかならんか」
「何をおっしゃいます。一番臭くて堪らんのは、この私です。仕事ですから遣りましたが、もう御免です」
皆が笑った。
「卯吉、二人の子供の後には誰も来なかったようだな」
「へぇ、誰も来ません」
「弘兵衛殿が言ったように、後百両が残っている間は逃げはせんだろう。場所も判った。楠は一応、仙吉に見張らせている。二人を助け出し、奴らをふんじばるのは明日だ。手筈を決める」

その頃、仙吉は楠から少し離れた木の上にいた。
「夏で良かったぜ。冬だったら凍えてらあ。蚊も此処までは来ないが、羽虫が煩くて堪らねぇな。俺は蛾が大嫌いだ。来ねぇでくれよっ。綾さんは大丈夫だろうな。仙吉や松蔵は上手くやったかな」
などと思いながら見張っている。
「いけねぇ、小便がしたくなったぜ。下には降りれねぇし、ここで遣ったらジャージャー音がする。我慢は、体に良くねぇし。おっ、俺は頭が良いぜ。木の幹に沿って小便をすりゃー幹をつたって静かに流れていく。俺は頭が良いぜ」

Copyright© H.Mitani

なんて言いながら用を足す。明日、自分の小便が染み込んだ幹を素手で降りることに気付いていない。

「まず二つの組とする。一つは拙者の組。もう一つは、弘兵衛殿の組。拙者の方には仙吉と佐吉、サブ。佐吉は夜通しの見張りの後だが、まだ若いから大丈夫だろう。弘兵衛殿の方は卯吉と松蔵とする。三太夫殿より内密にと言われておる。取り方は使わず我々だけでやる。松蔵が貰った握り飯は女手。しかも綺麗に握ってあった。弘兵衛殿が言うように縛られたりはしていないようだ。それに、しっかりと握ってあるところを見ると、体力も落ちてはいないと思われる。弘兵衛殿、竹弥殿だが刀の方はどうなのじゃ」

「竹弥殿はご幼少……、いや餓鬼の頃から何でも遣っている。拙者と良い勝負をする。刀を持てば自分を守ることくらいは出来る」

「ところで綾殿の方だが、容姿は判っているが争いの場でどのようなことになるか気になるが」

「綾殿は気丈なお方、憶測でござるが動転するようなことはないと思う。むしろ逆であろう。お気が強い故、奴らに飛び掛っていくのではと心配でござる」

「そうか。お気が強いのか……」

伊銀は、ちょっと顔をしかめた。どうも気が強い女は苦手な様子だ。

「伊銀殿、何じゃ、その顔は！　お気は強いが、それは芯がしっかりとしていると言うこと。淑やかな方だっ」

弘兵衛はむきになったが、伊銀も他の者も苦笑いをした。

「明日の出立だが、奴らが動き出す前、明け七ツ。今夜は飯をたらふく食い、早めに寝てくれ。佐吉には既に伝えてある。明日、事が済んだら此処に集まることとする。良いな」

葉月十一日明け七ツ。

辺りが薄暗い中、全員が得手の物を持って出掛けた。皆、無言。

左衛門町の長屋へは仙吉が導いた。長屋に着いた頃には薄っすらと明るくなっていた。夏の朝とは言え、まだ起きてくる者はいない。辺りは、ヒッソリと静ま

Copyright© H.Mitani

り返っている。賊は三人。救うは竹弥。伊銀は、竹弥に渡そうと刀を一振り持っている。

伊銀が入り口の戸を蹴破った。

ガタッ！　大きな音を立てて戸が外れた。

「中の者、神妙にしろっ！　南町奉行所与力、伊藤銀之助だっ！」

部屋にも薄日が入る。ドタドタッ！ともの凄い物音。声はない。突然、二人が飛び出してきた。素早い動きで、手には抜き身。

「てめぇらっ、何しに来やがったっ！　余計な事しやがると只じゃおかねぇ。相手になろうってかっ！　しゃらくせぇ、掛かって来やがれっ！」

仙吉が前に出た。その隙に伊銀が体に似合わぬ素早さで部屋の中に飛び込んだ。

「竹弥殿っ！　どちらじゃっ！　伊銀でござるっ！」

部屋の奥に男が一人、家光の首に抜き身を突き立てている。

「ガタガタ騒ぐんじゃねぇ。何が竹弥殿だっ！　馬鹿言ってんじゃねぇよ。それ以上近づくと、この男の命はねぇぜっ！　ほれっ、そこを退くんだよっ！」

不適な薄笑いを浮かべ、男は家光に刀を突きつけたまま、入り口の方に歩き出した。その時、ビューンと音がした途端、男は自分の額を押さえた。その瞬間を逃さずに家光は男の手を振り解いた。

「殿っ！　刀でござるっ！」

伊銀は、家光に刀を放り投げた。

「伊銀ッ！　確かに受け取ったっ！」

数日前より伊銀は竹弥とは家光のことと気が付いていた。

男の額に当たった物は、伊銀の鎖鎌の分銅だった。普通であれば額を割って即死だが、家光を気にしてか、伊銀は手加減していた。

男が立ち上がった。

「拙者を斬れるとでも思っているのか。面白い。痩せても枯れても、この佐伯省吾、腕は鈍っておらん。お前らの一人や二人、ものの数ではないわっ！　冥土の土産にしてやろう。表に出ろっ！」

表では仙吉とサブ、佐吉が二人の男にてこずっていた。明らかに二人の方が腕

Copyright© H.Mitani

は上。二人は、この場から逃げたい一心で走り出そうとするが三人が執拗に取り巻き、手当たり次第に物を投げつけたりしている。仙吉は十手を振り回し、佐吉はどう言う訳か天秤棒。サブは、へっぴり腰ながら長ドスを突き出している。そこに省吾が加わった。

近所の連中が、起きだしたばかりの乱れた格好で遠巻きにしている。

こうなると、いくら身を崩したとはいえ元は侍である。

「良いだろう。この二人は兎も角、拙者はオメオメと捕まるつもりはない。伊藤銀之助、鎌伊銀か。余程、この男、重要な人物と見えるな。先ほどの分銅、この男に当たってはいかんと手加減をしたな。一瞬だが気を失いかけた。拙者、元井筒藩の家臣。詰まらん賭事に現(うつつ)をぬかし、この者たちと共に国払いになってしまった。ま、身から出た錆じゃがな。どうじゃ、潔くおぬしと勝負がしてみたいが」

「良かろう。佐吉、竹弥殿は腕も立つが大切な方。もしもの事があってはいかん。頼むぞ」

「判りました。先ほど、殿とかおっしゃいましたが……」

「その話は後じゃ。頼んだぞ」

佐伯省吾は、既に抜き身。伊銀が、ゆっくりと刀を抜いた。

刹那、省吾は上段に構えたが、ピタッと動きを止めた。上段に構えた途端、伊銀が下段に構えたのを見たためであった。

省吾は勝負を急いだ。上段より一気に袈裟懸けのつもりであったが、伊銀の下段の構えは余りにも素早く、しかも寸分の隙もなく決まっていた。振り下ろせば、確実に刀を跳ね上げられていた。

出来るっ！　こやつは出来るっ！

同じように伊銀も思った。かなりの腕だっ！　凄いっ！

二人は対峙したまま微動だにしない。たまに、ウォリャー！　トリャー！　との掛け声を掛けるだけ。この掛け声がもの凄い。正に腹の底から搾り出すような響き。周りは静まり返り、咳払い一つ聞えない。陽も上がり、木々からは蝉の声が聞えてくるだけ。

四半時程が経ったであろうか、省吾の額からは脂汗が流れ出ていた。

Copyright© H.Mitani

いかん！　このままではいかん！　省吾は焦り出していた。
上段の構えは、瞬時に相手を斬り倒すには適しているが、長びく勝負には不利である。竹刀などの試合であれば未だしも、鋼で出来た刀は重い。振り上げたまま の腕からは血の気が失せ、腕が痺れてくる。この痺れが体へと広がっていく。省吾は、上段を止めた瞬間に正眼、下段に構えを移せば良かった。だが、それは出来なかった。伊銀に隙を与えることになるからだ。
ターッ！　もの凄い掛け声と共に省吾は前に踏み込み刀を振り下ろした。刹那、伊銀は腰を低くし右下に構えていた切っ先を、左上へと斬り上げた。四半時も対峙していた二人の勝負は、一瞬のうちに決まった。刀を合わせる間もなかった。
伊銀の右袖がパックリと口を開けた。そこから血が流れ出した。
フーッ！　伊銀は大きく息を吐いた。
誰も口を開かない。静かな時間が流れていく。
その時、例の二人が佐伯殿と小さく呟き、ヘナヘナと座り込んだ。すでに戦意をなくしている。
家光が伊銀の肩に手を置き、静かに語りかけた。
「伊銀、大儀じゃった。嬉しく思うぞ。礼を言う。おぬしのお陰で助かった」
「は、はー。嬉しくもありがたきお言葉。お怪我もなく、伊銀、安心いたしましてございます」
「さっ、早く手当てをいたせ」
伊銀の二の腕は、省吾の切っ先により五寸ほど斬られていた。サブが晒を引き裂き右腕の付け根を固く縛った。

一方、こちらは弘兵衛たち。
多少臭いが残っている松造が、皆を角谷町の長屋へと連れて行った。
ぼろぼろの長屋。そこいら中に茸でも生えていそうな長屋である。弘兵衛は、綾の身を案じている。綾殿は気持ち悪がっているであろうな。
辺りは、まだ眠っているのか、物音一つ……　と思った途端、女の声が聞こえた。
「何、遣ってるのよっ！　駄目でしょう、そんな遣り方じゃ！　ご飯も碌に炊けないのっ！　だらしないったらありゃしないっ！　そんな事だから国から追い

Copyright© H.Mitani

出されたのよっ！」
弘兵衛以下、全員の目が点になってしまった。
「ど、どうなっているのでしょう」
松造が卯吉に訊いた。
「どうなっているのかって訊かれても、どうなっているのか……。弘兵衛殿、どうなっているのでしょうか」
弘兵衛も、よく判らない。
「と、兎に角、お救いしなければ……。しかし、どうなっているのであろうかのう」
今までの緊迫感が、一気に緩んでしまう雰囲気である。何とも、如何ともし難い三人であった。中からの声は、まだ続いた。
「お米はねっ、そんな風にネチャネチャ洗うんじゃないの。研ぐって言うでしょ！　シャッシャッシャッと男らしく研ぐの。小十郎、　あんた遣ってごらん。源太、ボケーッとしてないで、ちゃんと見てるのよ」
男どもの声は聞えない。中からシャッシャッと音が聞えてきた。
外の三人は成り行きを見守る以外にない状態である。
「弘兵衛殿、普通、人質は大人しく、しかもしおらしくしているものでありますが、ちと様子が違いますな」
「卯吉、拙者を睨むものではない。それに松造、口を閉めなさい。拙者とて訳が全く判らん状態でござる。どうすれば良いのかのう」
そんなこんなで三人は緩みきってしまった。その時、入り口の戸がサッと開いた。現われたのは綾。
「あれぇっ、弘兵衛さんっ！　やだぁ、こんな所で何してるのっ！」
三人は、口をアングリ開けてしまった。
「あっ、あ、綾殿。ご無事でっ！　何をなさっているのですか」
何とも間の抜けた応対。流石に卯吉は、
「さっ、綾殿。この松造と逃げてください」
「あら、初めまして。弘兵衛さん、この人たちは誰」
中から一人が顔を出した。
「てめぇらっ！」

Copyright© H.Mitani

言うなり戸をビシャッと閉じた。卯吉が、すぐさま戸を蹴破り中に飛び込んでいった。中からドタバタともの凄い音が聞えてきた。
「松造、綾殿を頼むっ！」
弘兵衛も飛び込び込んでいった。
ドタッ！　コノヤロー！　ガシッ！　ゴツン！　ウルセー！　ゴン！　イテーッ！　グシャッ！　……
もの凄い音が聞えてくる。

「あんた松造さんて言うのね。ところで竹弥さんは無事」
「今、別の連中が助けに行ってます。南町奉行所与力、伊藤銀之助様が行ってますので、まず問題はありません」
「良かった。本当に良かった。あらッ、あんた、ちょっと臭うわよ。お風呂に入らないと女の子にもてないわよ」
松造、俺はあんたたちのために臭いのを我慢して、と言いたいところだが、そんな事を言っている事態ではない。
そんな二人の前に刀を持った二人が飛び出てきた。見るとタンコブだらけ。ゼーゼー言っている。後から弘兵衛と卯吉が出てきた。
これを見た綾。傍に立てかけてあった物干し竿を掴むと二人目掛けて打ち下ろした。ウヘーッ、二人は地べたに転がってしまった。そこに弘兵衛、卯吉が馬乗りになる。二人は、あえなくお縄に。
これでは折角の六弦流も見せる閑がない。弘兵衛、ちょっと残念がったが仕方ない。

伊銀宅に全員が揃っていた。いや三太夫もご隠居もいる。
綾と家光、両手を握って互いの無事を確認し合った。
「あの人たち、私たちに同じことを言ってたのね。はめられたわ」

綾は、伊銀の傷口を見た。サブの縛ばり方が良かったのか血は止まっている。しかも程よく縛ったためか、腕の先は壊疽にもなっていない。わずかづつ血が通っている。腕に沿った五寸ほどの傷。深くはないが傷口が長いため縫合した方が

Copyright© H.Mitani

良い。
傷口を焼酎で消毒。経験のない者には判らないだろうが、傷口に焼酎とは信じられないような直接的な痛みである。伊銀は目を見開き口を開ける。綾の手前、叫び声は上げられない。
「ムッ、ムムムーッ！　ムムーッ！」
顔は蒼白。しかし、この痛みが縫合の際の針の痛みを感じさせないでくれる。
綾は針を火に炙り消毒した。絹糸を使う。
「ちょっと痛いわよっ。じゃあ、縫うわよ。……どう痛くない」
「なんの、此れしきの痛み。先ほどの焼酎に比べれば……」
気が付けば、伊銀は綾の顔ばかり見ている。油紙で覆いサラシを巻いた。長めの布で右腕を吊るす。伊銀、綾の顔から一時も目を逸らさない。

「皆の者、大儀じゃった。綾殿も無事。誠にご苦労であった。余の事は申すまでもないと思うが今は竹弥じゃ。宜しいな。この事、しかと頼むぞ。余は竹弥、徳山竹弥じゃ」
ちと、しつこい。
「三太夫、ご隠居、それに皆に心配を掛けてしまった。許せ。すべて余が、いや拙者が至らなかったためじゃ。何とも情けないことでござった」
家光と綾が経過を話し始めた。

愛宕山の帰りに物凄い夕立にあった。三人は大木で雨宿り。弘兵衛が傘を借りに大木を離れたが、程なくして二人の男が大木に駆け込んできた。
「いや、スゲー土砂降りだっ！　おう、先客がいるぜ」
「お二人さん、ご一緒させて貰うぜっ」
四人で雨宿りをしていると、一人がヨロヨロッと倒れかけた。綾は、反射的に手を貸そうとした。途端、腕を掴まれる。男の手には短刀。
家光は、しまったと思ったが既に遅い。何処にいたのか、もう二人の男が駆け寄って来て家光の耳元で囁いた。
「静かにしねぇと、あの姐ちゃんの命はねぇぜ！」
二人は、別々の方角に連れて行かれた。家光は、気が気ではなかったが何も出

Copyright© H.Mitani

来ないでいた。着いた先は例の二つの長屋。二人の話を聞いて判った事だが、奴らからこう言われた。

「別に縛ったりしねぇよ。逃げたければ逃げてもいいぜ。その代わり、もう一人の命はねぇと思いな！」

二人は別々である。縛られているのか、何処にいるのか、どのような状態か判らない。自由ではあるが身動きは出来ない。二人とも大人しくしていなければと思ったと言う。人間の心理を衝いた実に巧妙な監禁手段。奴らも一日中、見張っている必要はない。

つまり全員が自由に動き回ることが出来る。長屋の連中も急に引っ越してきたとは言え、別に怪しむこともない。綾は明るい性格である。連中と一緒にいるうちに気心が知り合え、なんやかんやと世話をやくようになった。連中も生い立ちや藩を追われたことなどを話し出す始末。妙な形の友だち関係が出来上がってしまった。

弘兵衛は、飯の炊き方を教えている時の雰囲気を思い出し、苦笑せざるを得なかった。やはり、この人は変わっている。

ご隠居は、ただただ嬉しそうに笑いながら涙をしきりに拭いている。伊銀は先ほどの手際の良い手当てや綾の話を聞き、顔付きが変わってきていた。確かに気の強い女性だ。だが裏打ちされた何かがある。自分は、子供の頃、いつも女にいじめられていた。この人は自分が知っているいじめっ子のような女性ではない。似顔絵のままの綺麗な女性だ。

卯吉は思った。居るんだな、こう言う女が。嫁を貰わなかったが、こう言うチャキチャキ江戸っ子女は俺の好みだ。惚れ々々すらあ。

助けて良かった……。ハテ俺っちは、あれで助けた事になったのか？

三太夫は家光が無事であることだけで大満足である。伊銀から渡された金を勘定しようとも思わない。伊銀も二人を助け、犯人を捕らえれば仕事は終わる。金のことなど既に感心がない。

Copyright© H.Mitani

と言うことは、残りの百両は、そのまま楠の根元に……
ところで、山王氷川神社は何処にあるのだろうか。
場所が判れば……、今も百両が……

（二）峰打ち

伊銀は頭を抱えていた。どうにも理解の出来ない事件を抱えてしまった。それに上司である南町奉行近藤叉佐衛門が同心は使うなと言った。定廻りはともかく、臨時廻りを使うくらいは良いではないか。自分は、歴とした旗本であり与力である。奉行とは馬が合わないが遣り切れない気持ちでいた。

事件そのものは、辻斬りなのだが被害者は斬られていない。首筋に出来た痣は、明らかに峰打ちであることを物語っている。襲われた者は大店（おおだな）の旦那連中五人だが、皆二日ほどで回復している。犯人は遣い手であるに違いない。取られた金も大した額ではない。懐に入れ持ち歩ける額である。被害者は、金よりも峰打ちにあったことを訴えているようだ。

普通、辻斬りの目的は切羽詰まった末の金目当て、または、人を斬る事に快感を覚える異常者の一種の遊びである。

大店の旦那連中だけを狙っているところをみると、連中に対する何かの恨みを晴らすためとも考えられる。または警告か。恨み、警告であれば、むしろ斬り捨てた方が効果はある。計ったように加えられた峰打ちの痣。伊銀にも経験があるが、寸止めは難しい。余程、刀の鍛錬をしなければ出来るものではない。どんな奴なんだ、犯人は……。腕に受けた傷は、サブの応急手当、綾の治療により完治している。残った刀傷は痛みよりも、甲斐々々しく手当てしてくれた綾を思い出させる。ほのかな恋心にも似た甘酸っぱいものがこみ上げてくる。自分には親しい女性はいない。一生、このままなのだろうか……。伊銀は、腕組みをしながら大川の土手を歩いていた。柳が静かに風に揺れ、物思いに耽る伊銀に、何か優しい言葉をかけているようだ。

弘兵衛は自信を失っていた。二人を助け出せたとは言え、自らが警護をしてい

Copyright© H.Mitani

る最中に拉致されてしまったのだ。傘を借りにいったほんのちょっとした隙であった。目を離したのがいけなかった。何のために紀州から呼び戻されたのか。本来であれば咎を受けるべきところである。家光に、もしもの事が起こっていれば大変な事態を招いていた。幕府内で知っている者は当事者である家光、三太夫、そして弘兵衛の三人だけである。老中たちに話が漏れる事はないだろう。

しかし、徒侍として警護すべき相手から、一瞬であれ離れた自分が許せなかった。三太夫に謹慎を申し出たが逆に酷く叱責されてしまった。

老中たちに謹慎理由を問われた場合、おぬしは何と答えるつもりなのだっ！

家光は、伊銀の屋敷から弘兵衛、伊銀を伴い城に戻ったが家臣に感ずかれないように裃を身に付け、貧乏藩主のような姿に変装しなければならなかった。待ち構えていた三太夫は、家光が部屋に入るなりひれ伏した。殿、今回ばかりは三太夫の失態。あのように目立つ財布を。お許しください。

家光は、そっと三太夫の肩に手を置いて言った。三太夫、済んだ事だ。余も軽率であった。皆に迷惑を掛けた。そちから慰労の言葉を掛けてやってくれ。三太夫は声を上げ男泣きに泣いた。二人とも無言のまま。夕暮れの中で静かに時が流れていった。

綾も悩みを抱えていた。自分には女友だちがいない。拉致事件では伊銀や卯吉たちとも知り合いになれた。個性の強い彼らに魅力も感じている。大勢の友だちができた。家光、弘兵衛、三太夫、佐吉……。だが、皆、男である。医術ばかりを考え、近所の女友だちと遊ぶこともなかった。今、長屋住まいになり、おかみさん連中とは親しく付き合っているが友だちとはちょっと言い難い。もう女友だちはできないのか。

皆、物思いに耽っている。悩み多き季節なのか。まだ薄の穂は出ていないというのに。

綾は、長屋を出て当てもなくブラブラと歩いていた。気付くと大川の河原に座り川面を眺めていた。なぜ女友だちが居ないんだろう。

伊銀は腕を組み俯き加減で、トボトボと力ない足取りで歩いていた。ふと目を遣ると柳の下に娘がうずくまり、川面を眺めている。綾さんだっ。急に胸にツク

Copyright© H.Mitani

ンときた。何をしているのだろう。女性との会話に慣れていない伊銀。声を掛けることができない。綾が振り向いた。
「あら、伊銀さん。お久しぶり。傷の方は大丈夫」
「いやあ、あの時はお世話になりました。お陰さまで、この通り痛くも痒くもございらん。して、綾殿は此処で何をなさっているのですか。ご隠居が心配されますぞ」
「別に、これという事はないんだけど、ただ何となく……。私のことよりも伊銀さん、ちょっと元気がないわよ。事件のことが頭を離れないんでしょう。伊銀さんて真面目だから」
「確かに今度の事件は理解に苦しむところがございる。ま、それだけではないのだが」
どことなく二人の会話はスッキリしない。しばし無言の状態が続いた。
「伊銀さん、私、女の友だちがいないの。男の方の友だちは多いし、皆、良い人。綾、嬉しいんだけど、伊銀さんの知り合いの方に若い女の人がいれば、誰か紹介……」
綾は急に口を噤んでしまった。いけない伊銀さんは、女の方に弱いと聞いたことがある。
「いやー、女の友だちですか。ア、ハハー。綾さんには参ったな。実は拙者も綾殿と同じでござる。拙者には女友だちがおらん」
こちらも急に口を噤んでしまった。二人して川面を眺めるだけ。
伊銀は、このように黙って女性と座っているなど今までにはなかった。綾と一緒だと不思議と心が落ち着く。伊銀は思い付いた。
「綾殿、今度、拙者と一緒に道場に行きませぬか。弘兵衛殿と通っている道場がござる。思いっきり汗を流すと、実に気持ちが晴れ晴れといたします。如何か」
「そうね、いい考えね。思いっきり竹刀を振り回したいわ！　絶対に行く！　でも剣道なんて初めて……」
此処は松井道場。弘兵衛と伊銀が汗を流している。
「なにっ、綾殿を道場に誘ったのかっ！　伊銀！」
既に伊銀、弘兵衛と呼び合うまでに親しくなっている。
「おう、そうじゃ。大川の流れを二人で眺めておってな。つい話し込むうちに誘

Copyright© H.Mitani

ってしまった。おぬしに相談もせずに。不満か」
「不満もクソもない。何故、二人きりで大川を眺める事になったのか、何を話し合ったのか、伊銀、隠し事なく総てを白状いたせっ！」
「弘兵衛、何をいきり立っておるのじゃ。行き掛かり上そうなっただけじゃ。話の内容は話す訳にはいかんがな。拙者は口が堅いので有名じゃ」
弘兵衛は綾に心を奪われている。居ても立ってもいられない気持ちでいる。伊銀にとっても親しい女性がいないなどと話す訳にはいかない。話せば、弘兵衛は笑い出すに決まっている。口を閉ざせば閉ざすほど相手は気になるもの。弘兵衛の顔色は良くない。
普段、この二人は五分に五分の腕前。二人が申し合いを始めると門弟たちは壁側に座り見学するのが常となっている。二人は竹刀ではなく木刀、しかも面も篭手も付けない凄まじいもの。
しかしこの日、弘兵衛は伊銀に遣られっぱなしであった。

松井道場の道場主は、松井五二郎と言った。石川藩の家老の家に生まれながら宮仕えは好かんと道場主になった男だ。子供の頃から巨漢。前髪をつけた若衆の試合では、皆恐れをなし戦わずして優勝した経験もある。つまり敬遠されたことになる。侍の子弟が試合を拒むなど、通常では考えられない事だが、五二郎では仕方がないと、藩主からもお許しが出る始末。
五二郎とは妙な名前だが、父親が五十二歳の時に生まれた恥かきっ子。ついでだからと五二郎の名前。父親も変わっている。
五二郎には娘が一人いるが、今は他の道場で修業中である。妻は産後の肥立ちが悪く娘を産んですぐに亡くなった。娘は、家事万端、総てをこなすしっかりとした娘に育ったが、家事や稽古事に飽き足らず剣道にも夢中になった。この道場を離れ、既に三年程が経っていた。娘が居ないのは寂しいが、そんな娘を五二郎は可愛くて仕方がなかった。
数日後、弘兵衛と伊銀は、綾を誘い道場へ行った。五二郎への挨拶もそこそこに道場へ。キリリと締めた鉢巻き、白い稽古着姿の綾は、皆の注目を集めた。伊銀は、自分の友人として綾を紹介した。伊銀は始終ニコニコしているが、弘兵衛はなんとなく暗い表情のままである。伊銀は何も話してはくれない。綾に聞けば

Copyright© H.Mitani

良いが、そんな女々しい真似はできない。結局、何も判らずじまいであった。可哀相に悶々としている。

綾は小さな子供たちの中に入り、師範代から挨拶の仕方、すり足、竹刀の振り方など、基礎から教えてもらっている。運動神経は悪くないし呑み込みも早い。綾にとっても久しぶりの汗であり気持ちが良い。

弘兵衛と伊銀の申し合いが始まった。皆、壁際へと移った。

綾は驚いてしまった。これが剣術か！　御展医典膳の周りにはこの様な世界はなかった。掛け声、木刀のぶつかり合う音、身のこなしの素早さ、気迫、真剣な目付き。単なる練習ではない。綾は二人を惚れ惚れとした目で見た。

『二人とも、素敵！　これが男なんだ。足の運びなどは舞を舞っているような感じ。でも体や腕や木刀は激しくぶつかり合っている。弘兵衛さんもこんな顔をするんだ。伊銀さんも普段は細い目なのに今は違う。あんな澄んだ目をしてたんだ』

事実、今日の弘兵衛の気迫は違っていた。ややもすると一方的な喧嘩にも近いものであった。

「勝負、止めっ！」

五二郎の声が道場に響き渡った。

「弘兵衛、後で私の部屋に来るように」

これだけ言うと五二郎は道場を後にした。

綾は面や篭手をとり汗を拭っている。伊銀も弘兵衛の激しさに困惑していた。

「弘兵衛、入ります」

「おう。ま、座れ。如何いたした。乱れておったぞ」

「申し訳ございませんでした。些細な事が頭から離れず、あのような稽古になってしまいました」

「些細な事か。では理由は判っておるのだな」

「はい」

「そうか、では明日からは気持ちを切り替えられるな」

「はい、大丈夫……」

その時、部屋の外に人影が動いた。

Copyright© H.Mitani

「誰じゃ。構わん入って良いぞ」
きりっとした姿の女性。
「おお、帰ったか！」
「ただ今帰りました。父上様もご健常なご様子。嬉しゅうございます」
「元気じゃ元気じゃ。帰るなら連絡ぐらい寄越したらどうじゃ」
「我が家に戻りますに、いちいち連絡が必要でございますか。父上様」
「いやはや相変わらずじゃな。ところで剣の方はどうじゃ」
「はい、これからはお父上に稽古を頂くようにと申されました」
「そうかそうか。上達したようじゃな。奈美、手を見せてごらん。柔らかい手じゃ。余程、稽古をしたとみえるな。無駄な力は不要になったようじゃ。おお忘れておった。奈美、こちらは伊銀の友じゃ」
「五谷弘兵衛と申す。数ヶ月前より通わせていただいております」
「松井奈美でございます」
「奈美殿のお陰で助かりました。今、先生に叱られていたところでござる」
「奈美、五谷殿は六弦流の遣い手じゃ」
「六弦流でございますか。話には聞いておりましたが、遣われる方が少ないそうでございますね。拝見しとうございます」
「いやぁ、まだまだ未熟者でござる」
先程まで引きつっていた顔は緩みっぱなし。いつもの弘兵衛に戻っている。
「奈美、伊銀も来ておるぞ。今、道場に居る」
「えッ！　銀之助様がいらっしゃるのですか」
奈美の態度が急に変わった。
「弘兵衛様、今後とも宜しゅうお願いいたします」
と言うなり席を立ってしまった。二人は呆気にとられていた。
「何じゃ、あのウキウキした態度は。子供の頃から伊銀を苛めておったくせに。伊銀が女嫌いになったのは、奈美のせいだともっぱらの噂じゃ。親として恥ずかしい限り。まさか、また苛めに行った訳ではなかろうな」
弘兵衛は伊銀の名前を聞いた途端、奈美の顔付きが変化したことに気付いていた。

Copyright© H.Mitani

道場では綾と伊銀が座って話をしていた。
そこに奈美が近づいた。奈美の姿を見た途端、伊銀は細い目を見開き、後退りを始めた。まるで蛇に睨まれた蛙の有様である。その恐怖に満ちた顔は、綾も驚くほどのもの。脂汗をかき顔面蒼白。あの稽古中の男らしい伊銀は何処にいってしまったのか。伊銀は後退りをし、玄関に近づくと一目散に走り去ってしまった。
後には綾と奈美が残った。奈美の顔も蒼白である。綾は大川での伊銀の話を思い出した。拙者、女子が苦手でしてな。ひょとしてこの人が原因では。
奈美は、綾に近づき丁寧な挨拶をした。
「松井五二郎の娘、奈美でございます」
「あ、綾です。今日、初めてこの道場に来た者です。剣道も初めてです。宜しく」
正座した二人は、しばし無言のまま見詰め合っていた。
綺麗な人だわ。松井先生の娘とは思えない。
この人は誰なんだろう。髪も結ってない。綺麗な人……。銀之助様と親しげに話していた。まさか……
「初めてお会いする方に不躾な事をお訊きいたしますが、宜しいでしょうか」
奈美が口を開いた。
「えぇ、構いませんよ。何ですか？」
奈美は躊躇している。
「……銀之助様の奥様でいらっしゃいますか」
綾はビックリ仰天。伊銀さんの奥さん！　私が？
「ち、違います！　伊銀さんとはお友だち。弘兵衛さんもお友だちです。今日は、お二人に誘われ道場に来ただけ。奥さんだなんて驚いちゃったわ！」
「良かった！　御免なさい。変な質問をしちゃったようですね」
二人は笑い出した。

翌日、綾は一人で道場に行った。道場では奈美が若い門弟たちと床に雑巾掛けをしていた。鉢巻、紺色の剣道着。色白な顔に良く似合っている。横に一列に並び一斉に雑巾掛けを始めた。奈美が綾に気付いた。
「稽古をするのでしたら早く着替えてください。一緒に雑巾掛けです。急いでください」

Copyright© H.Mitani

キビキビした態度と言葉遣い。綾は、急かされるように稽古着に着替えたが、このような雑巾掛けはしたことがない。一列に並び雑巾掛けを始めたが上手く進まない。力を入れた途端、頭からでんぐり返ってしまった。

奈美は笑わなかったが子供たちは大笑い。力と要領が必要なのだ。稽古の前と終わった後の体こなしとも言える。

「綾さん、私はこの道場の師範代の一人として稽古をいたします。綾さんは私が受け持ちます。稽古中は言葉遣いや返事に気を付けてください。総ての動作をキビキビと緩みなくするように。良いですね」

「はい」

稽古は、摺り足と竹刀振り。昨日と同じであった。たまに奈美が綾に目をやる。

稽古後の雑巾掛け。何とか進む事はできるが、いつもしんがりであり一列に進む事は出来ない。雑巾掛けはとにかく疲れる。

長屋に戻ると、もうクタクタであった。しかし、気持ちの良い疲労感である。夜中はグースカ鼾をかいて寝た。そんな綾の寝姿を見ながらご隠居は思った。松井道場か。五二郎は良い奴じゃ。奈美の伊銀苛めは有名じゃが根は優しい娘。綾にも女友だちができたかのう。

綾は、次の日も道場に行った。弘兵衛と伊銀は今日も来ていない。仕事が忙しいのだろうか。稽古が終わった。

「綾さん、良かったら私の部屋でお茶でもどうでしょうか」

奈美は、稽古が終わると言葉遣いが変わる。

「えぇ、喜んで」

五二郎の部屋は道場の隣にあるが、その前の廊下を通った。廊下はピカピカに磨き上げられている。奈美の部屋は、屋敷の奥まった一角にあった。奈美が座布団を勧めた。

「綾さんは、甘いものがお好きですか。先程、落雁を買ってきましたの。父にと思ったのですが二人で食べちゃいましょう。今、お茶を立てます。少々お待ちください」

六畳間は綺麗に掃き清められている。庭に面した障子の前にはこざっぱりした文机。横にはスッキリとした行灯。

Copyright© H.Mitani

五二郎の趣味であろうか庭には萩や梅の木、枝垂桜などが手入れ良く植え込まれ一面の苔が水々しく光っている。周りに生えている笹も綺麗に手入れされている。静かな面持ちの庭。住む人の人柄が出ているようだ。

奈美が茶を立ててくれた。作法通りのお手並み。落雁も素朴な味で美味しい。
「綾さん。今日も銀之助様は来ませんでしたね。お仕事が忙しいのでしょうか」
「さぁ、どうなんでしょう。ただ面倒な事件を受け持っていると聞きましたが」
「銀之助様は、三年振りにお会いしたと言うのに……　一言も声を掛けてくれませんでした。私を見るなり逃げておしまいになりました。きっと私が居るから道場にはお見えにならないのだと思います。嫌われているんです。私は……」
思わぬ話に綾は面食らってしまった。奈美さんは伊銀さんが好きなんだ。私を奥さんと勘違いしたのもそのせいなんだわ。
「奈美さん、伊銀さんから自分は女性が苦手だって聞いた事があります。何か思い当たることありますか。間違っていたら御免なさい。ひょっとして……」
「綾さん、そうなの。私、小さい頃から銀之助様を苛めてばかりいました。自分でも判らないの。何で好きなのに苛めたのか。私、ガキ大将だったのよ綾さん。女なのに変でしょう。男の子や女の子を引き連れて……。今、思い出すと恥ずかしい事ばかり。私、母親を知らないの。私が生まれてすぐに亡くなったんだって。父は優しかったけど父親は父親。母が欲しかった。いつも寂しかったし皆が羨ましかった。小さい頃、銀之助様は本当に優しくしてくれたわ。嬉しかった。でも、その優しさに逆らいたくなったの。理由は良く判らないけど。みんなで遊んでいた時だったわ、ふざけ半分で銀之助様に石を投げたの。そしたらみんなが一緒になり石を投げだした。石が額にあたり血だらけ。銀之助様はビックリなさって……　泣き出しちゃったわ。本当に驚いたみたい。一度、苛めると……。私、ガキ大将だったでしょう、皆の手前、続けざるを得なかった……」
綾は、口を挟めなかった。
「綾さん、私、小さい時から決めてたの。銀之助様のお嫁さんになるって。でも、もう駄目ね」
綾を見つめる目に涙が溢れてきた。大粒の涙が綺麗な頬を伝っていく。奈美は綾を見つめているが、綾の顔は涙でぼやけているはず。なおも見つめている。綾

Copyright© H.Mitani

は、どのような状況であったとしても好きな人を思い、涙する奈美が羨ましかった。私には、まだそのような人は居ない。

奈美が突っ伏して泣き出した。綾は奈美を抱き、背中を優しく撫ぜた。そして思った。私に女の友だちができた。絶対に二人を結婚させる。

弘兵衛は、久しぶりに伊銀の屋敷を訪れた。卯吉も来ていた。

伊銀は、相変わらず頭を抱えていた。糸口が見つからないのだ。被害者は、八人になっていた。米問屋、両替商など、ややもすると綺麗ではない手段で金を貯めている連中であるが、奉行に圧力でも掛けているだろうか、上からの催促も日に日に厳しくなっていた。

「どうだ、目星はついたか、伊銀」

弘兵衛を見ると奈美を思い出す。伊銀は奈美を心底怖がっていた。優しくしていたのに石を投げつけられた。子供の頃に植え付けられた怖さは、生半可なことでは氷解しない。近頃は綾に対し抱いていたツンとくる思いも、奈美の恐ろしさにより消え去っていた。

「弘兵衛、人の事は良い。おぬしも自分の仕事に励め。目星がついておれば、こんな顔をしておらん。襲われた奴らは付き人を含め賊の顔も見ておらん。覆面をしていたどうかも覚えていないとの事だ。どうなっているのだ」

「手掛かりがないのか。聞けば腕の立つ者の仕業と言う。待てよ伊銀。変ではないか。いくら何でも十数人の人間が犯人に接していながら何も見ていないとは。見なかったのではなく、見えなかったのではないか」

「見えなかった」

「そうよ。気が動転していたことは確かだろうが、見えなかったのだと思うな。例えば新月の夜であれば、全く何も見えん」

「伊藤様、私が被害者から事情を聴取しましたところでは、ヒューと音がした途端、下げていた提灯が消えたとのことでございます」

卯吉が口を挟んだ。

「拙者も聞いておる。礫（つぶて）か何かであろう。しかし、これは襲う者の常套手段。余り気にも留めておらなかった」

「そう言えば八件とも新月の夜に当ります。被害者は見えなかったが、犯人には

Copyright© H.Mitani

見えていた……」
「であれば犯人は夜目が利く者になる。伊銀、卯吉、心当たりはあるか」
「夜目か。計ったような峰打ちの痣を考えると、かなり夜目が利く者になる。新月の夜は鼻を抓まれても相手が判らぬものじゃ。特別な訓練をした者かのう」
「考えられます事は、間者、または間者上がりでございますな。彼らは特殊な訓練だけでなく、特別な食事をしていると聞きます」
「間者か。伊銀、面倒な事件になりそうだな。仮に、そうだとすれば裏の世界に住む者たちの仕業。おいそれとは姿を現さないだろう。しかも彼らを使うのは幕府、または各藩の藩主や上級家老の者たち。見つけ出した場合は、これまた厄介なことになる」
「弘兵衛さん、彼らには表の世界もございます。普段は我々と同じような生活をしています。侍であったり町民であったり……　両面から考える必要がありますね」
伊銀が話を進めた。
「仮に間者、または間者上がりと想定しておこう。次に何故、米問屋や両替商を襲うのかだが、何か考えはあるか」
「そうだな、米問屋に絡む人間と言えば、小売商と大口顧客、それに我々のように扶持米を貰っている侍になる。小売商は問屋に逆らったりしないだろ。我々侍は、扶持米が少ないと言う悩みはあるが米相場は安定している。恨みを持つ可能性があるのは大口の客だな。問屋から大量に仕入れ、何か作ってでもいる連中ではないか。商売を続けるには米が必要。そこに付け込まれ、古くなった米を高く売りつけられたとか……」
卯吉は腕組みをしながら話す。
「待ってください。その話を両替商に結びつければ、こうなりますね。大量の米を買う必要はあるが資金がない。そこで両替商から金を借りる。ここでも高い利息を吹っ掛けれられる」
「なるほど。米で何かを作り商売をしている。菓子屋などではないな。問屋から買うほどだ、大量の米を使う。大量の米を使う……。酒か！　酒を造っているのではないか！　造り酒屋！」
伊銀が大声を上げた。小さい目を見開いている。弘兵衛が続けた。

Copyright© H.Mitani

「恨みを持ちながら峰打ちに止めている。心根は優しい。多分、客には安く売っているのであろう。儲けは少ないが、買っていく者の喜ぶ顔が見たいがために無理をしている。だが、この様な人間だとすると間者とは結びつかないようだが」
「弘兵衛さん、それは違います。裏の世界を知っているからこそ、表では喜ぶ顔を見たい。これが人間ではないでしょうか」
自分も裏街道を歩いた男。いつもは犯人に対し厳しい見方をする卯吉だが、今回は奇妙にも犯人の人間像を飾る。

広い江戸とはいえ、主だった米問屋、両替商の件数はそれほど多くはない。造り酒屋の件数もしれている。
「奉行所より米問屋、両替商に触れを出す。新月の夜、月が出ていない夜には外出を控えろとな。殺される事はあるまいが、これ以上被害者が出ては拙者も堪らん。奉行が、やいのやいのと五月蝿い。卯吉、まだ襲われていない店は十五、六件であろう。気を付けるように触れてくれ。造り酒屋の方だが、大店は事件には関係ないだろう。小さな店になるが総ては掴んではおらんな」
「伊銀、造り酒屋を一軒々々聞き込むのも良いが、囮を使った方が早いのではないか」
「囮か。拙者は余り好かんがな。卯吉、米問屋、両替商で囮を引き受けるような店はあるか」
「そうですねぇ、皆、脛に傷を持つ連中ばかり。叩けばいくらでも埃が出てきます。手助けを頼むのではなく、埃をネタに遣らせた方が簡単ですが」
「なんだ今度は脅しか。まるで無頼漢(やくざ)だな。好かんが、ま、良い。遣ってみるか」
伊銀は、正攻法での捜査を信条としている。拷問での自白強要も遣らない。普段であれば造り酒屋を一軒々々聞き込むはずであるが、今回の伊銀は違った。

綾と奈美は親しくなった。綾の筋が良い為かも知れぬが稽古中の奈美は徹底して厳しい。他の門弟たちが気遣うほどである。五二郎は一切口を挟まないが、綾の上達の速さには驚いている。体の柔らかさ平衡感覚の良さ、身のこなしなど持って生まれたものであるようだ。稽古が終わると二人は奈美の部屋で話し込むことが多い。そんな二人を五二郎は嬉しそうに見ている。

Copyright© H.Mitani

『しかし、伊銀は来んなあ。勤めが忙しいのだろうか。いや、今までは、どんなに忙しくても汗を流しに来ていた。やはり奈美か……。困ったものだ』

弘兵衛は、伊銀を道場に誘った。

「弘兵衛、拙者、今日は体調が悪くてな。道場にはちょっと……」

「何を言うか。顔色も良い。普段と同じように顔の肉が目を押しつぶしているではないか！　何処が調子悪いのじゃ、言ってみよっ！」

「いや、何となく気分が優れん。どうも働きすぎではないかと思っておる。勤め一途も問題じゃな。わ、ハッハハー」

「もう良い！　その笑い方など、まさに気分爽快と言っているようなものだろうが。拙者には判っておる。奈美殿が怖いのじゃろう。情けないものじゃ。あんな素敵な女子（おなご）は滅多に居らん。拙者が付き合いたいものじゃ」

伊銀は、奈美と聞いただけで下を向いてしまった。弘兵衛が何を言っても上の空。

なんでそんなに怖いのか。弘兵衛には理解できなかった。

弘兵衛は、一人で道場に行った。道場では綾や奈美が稽古に夢中になっていた。正座して皆の稽古を見る。気迫ある稽古である。ややもすると、道場には手の付けられない歌舞（かぶ）いた連中が巣食うことがあるが、この道場には居ない。五二郎がそのような連中を締め出しているのであろう。

綾と奈美を見る。あれはお嬢様のお稽古ではない。さすが奈美殿は師範代を勤めるだけのことはある。素晴らしい打ち筋だ。綾殿の上達は思っていた以上だ。これは楽しくなったぞ。

奈美が近づいてきた。

「弘兵衛様、一手お手合わせを」

「喜んで。五本で参ろう」

門弟連中が脇へと動いた。

二人は、道場の真中に中腰になり挨拶。竹刀を持ち対峙した。二人とも面、篭手、胴衣を着けていない。

二人が正眼に構えた。動いたのは奈美。右足を半歩下げ上段に構え直おした途

Copyright© H.Mitani

端、さっと踏み込み竹刀を打ち下ろした。素早い動作。
刹那、弘兵衛は微かに身を屈め胴払い。竹刀は奈美の胴の一寸前で止まる。一本である。奈美は、その後も上段、正眼、下段と構えを変え挑むが、面、胴、篭手と払われてしまう。弘兵衛の竹刀が水平に動いた時に一本を取られる。これが六弦流。何故、竹刀があのように動くのか奈美には見えなかった。

六弦流とは身を屈めた低い位置から、スックと立ち上がった高い位置まで六段階の構えを持ち、基本的に刀を水平に繰り出す剣法。一般的に刀の構え方には上段、正眼つまり中段、下段があるが、これらをさらに細分化したもので、繰り出す刀の動きが六本の弦のように見える事から六弦流の名が付いている。
人間の体は縦長であるため、水平に繰り出される刀は敵の体を最も効率良く両断することが出来る。刀は左右を問わず繰り出されるため、相手は刀の動きに幻惑される。この剣法は体力、腕の力、流れるような身のこなしが要求されるため使い手は少ない。

五谷弘兵衛の先祖は三河五谷に在し、元々は農民であったらしい。五谷一族には、音曲（おんぎょく）に優れた者が多く、本業の傍ら祭りなどの時に皆を楽しませていたようだ。三河漫才、狂言のようなものと考えられる。
家康もこの五谷一族の音曲が好きであり、事ある毎に呼びつけ楽しんだと「徳川史誌」に記述がある。家康は秀吉により関東に封じられたが一族は家康に伴い江戸に出てきたらしい。大阪方との戦さには五谷季八郎が陣中での音曲を担うため同道した。音曲に優れる者は当然、耳が利く。陣中深く押し入った敵の間者に気付いた事が認められ、帯刀を許されたのが侍に取り立てられたきっかけであった。
二人は竹刀を脇に中腰になり挨拶。
「ありがとうございました。六弦流、初めてでした。一本も取れませんでしたが、これからもお稽古宜しくお願いいたします」
「既（すんで）のところであった。手合わせの間、奈美殿が女である事を忘れてしまった。手前こそ宜しく願いたい」
綾は嬉しかった。奈美は、竹刀を持っている時は総てを忘れて剣道に打ち込ん

Copyright© H.Mitani

でいる。伊銀のことは頭にないのであろうか。
この日、綾は弘兵衛と共に長屋に戻った。道すがら伊銀のことを聞いてみた。
「綾殿、伊銀の恐怖は本物ですな。家人によれば夜中もうなされていると言う。あの茫洋とした伊銀がですぞ。綾殿、拙者の見立てでは奈美殿は伊銀を好いておるように思うが」
「あら、弘兵衛さんは、そう言うことには勘が働くのね」
「綾殿、真剣に話しているのでござる。茶化さないでくだされ」
「ごめん。でも、そんなに怖がっているなんて……」
「女子をあれほど恐れるなど、拙者には理解できない。そこで、三太夫殿に聞いてみたのだが、子供の頃に受けた心の傷は容易には消えないそうでござる。ややもすると死ぬまでそのままとか……。何やら、このような人間は、気付かぬ内に他の人を苛めることがあるそうでござる。伊銀は、まだ良い方だと申しておった」
「そうね、原因が判っているしね……」
綾は、何とかなるだろうと思った。

伊銀は、手際よく米問屋や両替商に触れをだした。囮は卯吉と相談の上、米問屋堺屋伊助を選んだ。
「伊助、米の横流しについては目を瞑ろう。次の新月の夜じゃ。良いな」
「伊藤様、そんな殺生な。いくら峰打ちとはいえ、当たり所が悪ければ命を落とします。私には妻も子もおります。それに使用人も。もしもの事があれば、皆、路頭に迷います。どうかご勘弁を」
「そうか。では他の者にするか」
「いやあ、伊藤様は話がお判りになる。少々、お待ちくだされ。これっ、例のものを伊藤様に。伊藤様、詰まらぬ菓子でございますが、どうぞお持ち帰りくださいませ」
　略である。
「拙者は菓子は喰わぬ。それに菓子折りの底に敷き詰めた菓子も喰わぬ。伊助、囮にならない場合、横流しが表沙汰になるぞ。それにその菓子折り。罪は軽くても八丈島送り。二十年も経てばこの堺屋がどうなっていることか。ま、好きにいたせ」

Copyright© H.Mitani

「い、伊藤様……」
結論は出た。当日の段取りを決め、二人は表に出た。

「好かんな。どうも好かん。あのような遣り取りは好かん」
「伊藤様。なかなか堂にいったものでしたよ。恐喝もお出来になる」
「卯吉っ！　止めてくれ。背筋が寒くなるわ」
卯吉の手下たちは、堺屋が料亭梓で宴を持つことを見回りの際、それとなく言い触らして歩いた。
裏の世界といえば賭場である。卯吉は生駒屋源兵衛にも伝える事にした。伊銀も同行したいと言う。最近の伊銀は尻が軽くなったというか、どうも落ち着きがなくなっている。今までは賭場や一杯呑み屋などは卯吉に任せっきりであり足を運ぶ事などなかった。
「よおよお、よおよお。来たか来たか丶の字。まあまあ、上がれ上がれ。良く来た、良く来た」
相変わらずの二度烏である。卯吉が伊銀を紹介した。
「伊藤銀之助でござる。卯吉がいろいろと世話になっておるとの事、それに先般の拉致事件では手数を取らせた。礼を言う」
「生駒屋源兵衛にございます。南町奉行所与力伊藤様こと鎌伊銀様がお越しとは、この源兵衛、恐縮の至り。何とぞ宜しゅうお願いいたします。ところで御用の筋でございますか」
掻い摘んで話をした。
「良うございます。簡単な事。峰打ち事件には、皆も興味を持っております。堺屋が宴を持つと言えば、話はすぐに伝わっていきます。しかし、伊銀様は噂にたがわぬお方とお見受けいたします。成る程、成る程」
真面目な話の時は一度烏。くだけてくると二度烏になる。
「源兵衛、一人で納得しておるが、何が成る程なのじゃ。本人を前にしてのしたり顔。あまり気分の良いものではない。申せ」
源兵衛ほどの古狸になると、お縄になるような事を遣っていなければ、奉行所与力など怖くも何ともない。
卯吉は側でニヤニヤしている。伊銀は卯吉のニヤニヤにも気分が悪い。

Copyright© H.Mitani

「いや失礼、失礼。いや何、体格も、体格も良く優れた方との噂。優れた方ですぞ。誉め言葉、誉め言葉。しかし……」
この後がいけなかった。
「与力……、与力としては抜群だが、目の小ささと同じで女に対しては蚊ほどの、蚊ほどですぞ。蚊ほどの小さな肝っ玉しか持っていない。源兵衛、まさかそんな事はあるまいにと思っておりましたが、噂どおりのようですな。体から滲み出る色気のようなものが感じられませんな。色気です。男の色気。どうも女と付き合った経験が少ないようですな。これではいけません。いけませんなあ」
好き放題なことを言い出した。男の色気とは顔や容姿の良し悪しなどには関係なく、身に付いていくもの。それは、やはり経験がものを言う。
伊銀は怒り出すどころか下を向いてしまった。卯吉は道場での奈美との一件を聞いている。こりゃ、間が悪かったなとは思うが、すでに遅い。源兵衛も半分冗談のつもりだったが、打ちひしがれた伊銀の姿を見て困ってしまった。話の切り穂が見つからない。バツの悪い雰囲気が流れだした。
正に運良く、この場にひょこっと顔をだしたのが例のサブである。
「わあ、伊銀さんに丶の字。また事件ですか。俺にも手伝わせてくださいよ。ねぇ、良いでしょう」
「馬鹿やろう！　気安く、気安く喋るんじゃねぇ。お二人は世の中を良くしようとなさる方々だ。てめぇのようにチャカチャカした野郎がでしゃばるんじゃねぇ！」
「まぁまぁ、源兵衛。そう叱るものではない。サブ、また手伝ってもらう時は声を掛ける。元気を出せ」
元気を出してもらいたいのは伊銀の方。伊銀、人の事になるとしっかりする。
帰りしな、伊銀は下を向きっぱなしであった。卯吉もトボトボと付き合う以外にない。
「卯吉、拙者は女が苦手なんじゃ。どうしようもないのじゃ」
伊銀が卯吉にこんな弱音を吐いた事はない。奈美の影響は大きいようだ。
綾は、絶対に二人を一緒にさせると心に決めていた。二人とも良い人。素敵な

Copyright© H.Mitani

夫婦(めおと)になると思う。しかし伊銀のことを知れば知るほど難しさを感じてしまう。どうすれば良いのか、いくら考えても判らない。

そうか、じっちゃまと三太夫だ。昔、女を泣かせたイナセな八五郎と、何でも知ってる三太夫。二人なら何か考えを出してくれるかも知れない。良く言うじゃない、年の功より亀の甲。あれっ？　ちょっと違ったかな。

三太夫が遊びに来る頃を見計らって、二人に相談することにした。

堺屋伊助は、お供を連れて料亭梓を出た。全くの暗闇である。お供が持つ提灯の光だけが頼り。お供は番頭の……　いや、番頭の茂吉に扮装した弘兵衛。腰を低く曲げ、膝を落とし前屈み。しかも出掛けにうどん粉を頭に振りかけ、白髪に見立てる気の使いようである。右手に提灯、左手には杖。実は、この杖は仕込み杖。歩く姿は年寄りそのもの。さすが五谷一族の血を受け継いでいる。芝居が上手い。

伊助は気が気ではない。いつ賊が襲ってくるやも知れぬのだ。死にたくはないし島流しもご免だ。私は運が悪いなどとブツブツ言いながら歩く。

新月とは言え、曇りでない限り星は出ている。ほんの微かな星明りはある。角を

三つほど曲がった辺りにくると、ヒューッという音とともに提灯の光が消えた。礫が蝋燭の火先(ほさき)に当たったのだ。弘兵衛は感心した。凄い腕だ。いや、感心している場合ではない。

ヒャーッ！　年寄りそのものの叫び声を上げ、まるで腰を抜かしたように尻餅をついた。堂にいった演技だ。伊助は、側の塀に両手両足を広げ背中からへばり付いてしまった。そして、目と口をおっぴろげ、アワワ、アワワと震えている。これは演技ではない。

ササッと人が近づく気配がした。徒侍も暗闇での戦いの訓練はしているが、何とか暗闇に慣れた目に何も映らない。黒装束か。シャッと刀を抜く音。伊助の前に人の気配。微かな星明りにキラッと刀が光った。刃は、伊助に向いている。

弘兵衛は伊助の足を払った。伊助は背中を塀に付けたままストンと尻餅を付いた。

刹那、弘兵衛はサッと立ち上がり、仕込み杖を抜き呼子(よびこ)を吹いた。賊が初めて

Copyright© H.Mitani

口を開いた。
「計ったな！」
対峙した途端、賊は刀を逆に持ち替えた。短刀の持ち方である。弘兵衛は咄嗟に悟った。こやつ忍びの心得がある。弘兵衛は刀を右横水平に構えた。賊が逃げようとすれば、刀を投げるつもりだ。賊もそれに気付いたようだ。後ろを向いて逃げ出すことはできない。向かい合う以外にない。賊は、弘兵衛の腕を見抜く。弘兵衛は塀を背にした。塀を乗り越え、逃げるのを防ぐためだ。賊は身動きができない。しかし、呼子を吹かれている。早く動かないと捕り方が来てしまう。右肩を前に持っていき、弘兵衛に向かって刀を右上に振り上げた。
シャキーン！　弘兵衛は、鋭い刃を受け流した。
遅い。伊銀たちは何をしているのだ。弘兵衛は、この男を斬りたくない。人は斬っていないのだ。
「おぬし、観念した方が良い。ここで命を失っては、おぬしが造る酒を楽しむ者たちが悲しむ。観念せよっ！」
「何っ。何と申した」
「酒じゃ。おぬし、造り酒屋を営んでおろうが」
「そ、そこまで調べがついておるのか……」
弘兵衛、ちょっと驚いた。あれ当たっちゃった。俺たちの推理も満更ではない。
男は刀を投げ出し、腕組みをして地べたに胡座をかいた。
伊助を見ると塀を背に手をダランと下げ、足を広げて小便をチビっている。何と、口を半開きにして泡を吹いて気絶していた。
伊銀たちが来た。捕り手は手に龕灯提灯（がんどうちょうちん）。やっと辺りが明るくなった。
綾の話を聞いた三太夫とご隠居、顔を見合わせ何やらうなずき合っている。
「何よ、二人でニヤニヤして。気色悪い！　何とか言ってよっ」
「ひとつお節介を焼きますか、ご隠居」
「そうですな。久しぶりに男と女のもつれ合い。付き合いますか」
二人の話は、こうだった。
伊銀は、放っておく。奈美の気持ちを確かめた上で五二郎に話す。五二郎は伊

Copyright© H.Mitani

銀のことも大好きであり、剣の腕、仕事も認めている。身分に関しても五二郎は元々家老の家系であり問題はない。伊銀ではなく父親の鉄之助に登場してもらう。ついでに家光に一、二行の言葉を貰う。伊銀の幸せであれば喜ぶはず。伊銀だけを蚊帳の外に放り出して事を進める。弘兵衛にも一応話し、伊銀の様子を探ってもらう。

「お忙しい中、我が娘の為に、お二人が起こしになるとは恭悦至極。さっ、粗茶でも如何か」

奈美が茶を立てる。美味しい。

「ご隠居。このような茶を出す時に粗茶ですがと言うもの。心した方が良いぞ」

三太夫は、閑ができると隠居の長屋に遊びに行っていた。隠居は、粗茶ですがと茶を出すが、正に粗茶。辟易としていた。

「何を言うか、この皺くちゃ腹がっ！　拙宅には粗茶しかない。粗茶を粗茶と言って何処が悪い。奈美殿、結構なお手前で。たまには綾に茶を立てて貰うかな」

「綾さんも良いお手前でございますよ。二人で良く茶を立てます」

「で、五二郎殿。如何か。奈美殿のご意向は今更ご本人に聞かずとも綾より聞いております」

五二郎、ささっと席を移し、両手を前にして二人に深々と頭を下げた。

奈美はビックリした。このような父親の姿を見るのは初めて。

「宜しく、何とぞ宜しくお願い申し上げまする。母親がいない娘ゆえ不憫と思い、本人の好き勝手にさせておりました。躾もままならず、このようなガサツな娘に育ててしまいました。伊銀殿には誠に申し訳ないと思っておりましたが、この奈美、何としたことか伊銀殿が好きだと申します。父親とは弱いもの、娘が好きなお方と添い遂げられるのであれば、何でもいたすつもりでございます。宜しく。何とぞ宜しくお願いいたします」

皆、涙。奈美は声を上げて泣いている。

「お父様……」

後は声にならない。

二人の年寄りの顔は見られたものではない。大粒の涙が、一本一本の皺を伝い流れ落ちている。しかも四方八方に。

Copyright© H.Mitani

「三太夫殿、紙入れくらい持っていないのか。手放しで泣くものではない」
「この粗茶め。何を言うか。おぬしも手放しではないか。手拭いくらい持って歩け」
三太夫は、早速、鉄之助宛の文を認めた。もちろん家光宛ての書状も忘れてはいない。善は急げ。飛脚を立てた。

伊藤鉄之助は、銀之助に家督を継いだ後、若い頃から望んでいた百姓を遣るために練馬に在を置いた。妻は既に死去している。たった一人で石神井川の側に田んぼを持った。粗末な家だが一人住まいには持ってこいの広さである。
春には桜が咲き乱れ、蓮華草が田んぼを覆う。川では鯉や鮒などが釣れる。鯉の洗い、鯉コク、鮒の甘露煮。一人で好きなように料理して舌鼓を打っている。
与力時代には、余りにも多くの人間の醜さ弱さを見てしまった。人間は欲を出してはいけない。在るがままに生きるべきだ。無理をすればいろいろな所に綻びが出る。それが犯罪となって現われる。晴耕雨読。自然と共に生きる今の生活に満足していた。
この日、小雨が降っている。鉄之助は、部屋で物書きをすることにした。余り上手くはないが俳句に凝っている。日々、自然と接し、感ずるところを十七文字に凝縮する。難しいものだ。
「伊藤鉄之助様ですか。江戸からの書状です」
家の前に、雨に濡れた飛脚が立っていた。はて、何かな。飛脚は、肩に担いだ文箱から書状を取りだし、鉄之助に渡した。きちんと油紙に包んである。雨を予測し飛脚が包んだのであろう。このような気遣いは好きだ。
嬉しい気持ちから飛脚に駄賃を渡した。飛脚は断わったが、そうはいかない。ここは自分の気持ちを受けて貰わなくては。頭を掻きながら飛脚は受け取ってくれた。

書状は二通あった。
一通は三太夫から。懐かしい文字。もう一通は…… なんと家光公から！ 鉄之助は姿勢を正した。江戸で何が起こったのか。胸騒ぎがした。家光の書状を読むのは何となく怖い。まず、三太夫の書状を開いた。

Copyright© H.Mitani

『……鉄之助殿におかれましては、日々、ご健勝にお過ごしの事と存じ候。当方も老骨に鞭打ち、日々、公務に勤しんでおり候。突然の書状、さぞや驚かれた事と存じ候。さてこの度、江戸にて貴殿のご子息の縁談がまとまり候故、是非とも江戸にお戻り下さりたくお願い仕り候。ご縁談のお相手は、貴殿も良くご存知の松井五二郎ご息女、奈美殿に候。江戸にお戻りの際は、まず拙宅にお越し頂きたくお願い仕る所存に候……』

なんと銀之助に縁談！　しかも松井奈美殿！　これはおかしい。銀之助が奈美殿と夫婦になるなど考えられぬ事。鉄之助は家光からの書状を手にとった。

『……鉄之助、銀之助は、未だ奈美を怖がっておるようだ。情けないことじゃ。奈美は、心底銀之助を好いておる。子供の頃の事はいざ知らず、いずれにせよ、このままではいかん。二人を夫婦にするつもりじゃ。そちにも異存はないはず。江戸に戻り三太夫宅に行く事……』

なんと華押（かおう）まで認（したた）めてある。何と言う事だ。銀之助は何をしておるのじゃ。家光公にこのような手数をお掛けするとは……。既に二十五歳になるというのに。

鉄之助は身支度を整え、出立した。

このような動きが進んでいるとは露知らず、伊銀たちは賊の取り調べを進めようとしていた。

「伊銀、やはり造り酒屋であったぞ。我々の推理も捨てたものではない」

弘兵衛は自慢げに話す。伊銀は顔を暗くした。

「弘兵衛、だとすると、賊は優しい心根の持ち主になるぞ。そのような者を裁くのか。如何いたせば良いのだ」

弘兵衛は、ハッとした表情で語る。

「そうであったな。なんとも複雑じゃな。気が重いのう」

弘兵衛は口を閉じたが、すぐに話した。

「拙者は、奉行所には関係のない人間。そろそろ手を引いた方が良いとは思っておった」

「何を言うか。今更、目を瞑ろうなどと卑怯なことを言うのではない。トコトン付き合ってもらう」

Copyright© H.Mitani

番所の土間には、縛られた賊が座らされていた。
「これ、総て有体に申せ。偽りは許さん」
「……」
「観念いたせ。現場にて取り押さえられたのだ、罪を犯したことは明白。もう良いであろう。総てを話せ。良いな。名は何と申す」
「お、お待ちください。造り酒屋である事までお調べが済んでいるはず。ま、ましてや名前など、とっくに……」
「いや、我々は何も知ってはおらん。造り酒屋の件は推測でしかない」
「ありゃあ……」
この男、素っ頓狂な声を上げ、急に笑い出した。
「推測でござったのか。ま、いずれにせよ、あの状況では捕らえられることは必至。判り申した。総てをお話いたそう」
男の話は、こうであった。

名は、大村佐衛門。元々は、ある大藩の間者であった。根は優しい男であったが、持つ能力により訓練を受け間者になった。
関が原以降、徳川の世になったとは言え、まだ隅々まで統一されてはいない。どのような姿勢で幕府に従うか各藩は決めかねていた。佐衛門は、各藩の動向を探索するのが勤めであった。同じように他の藩も間者を動かしていた。佐衛門のもたらす情報は的確であり、藩主にも認められていた。そのため間者としては破格の扱いを受けていた。しかし、四十歳になったのを機に閑を申し出た。間者同士の殺し合いにも嫌気がさしていたのだ。藩主自身、これからは、徳川の世が進むはず。藩が小賢しい画策をするのは得策ではないと考えていた矢先でもあり、申し出を受けてくれた。
藩主は、余程別れが残念だったと見え、佐衛門を呼び出して二人だけの宴を持ってくれた。佐衛門は、かねてからの夢、自分が造った酒を旨いと言って呑む人々の顔が見たい、そのような酒を造りたいと語った。藩主は一言、羨ましいぞと言ってくれた。帰り際には何かの足しにせよと金子まで贈ってくれた。その後、事件を起こすまでの過程は伊銀たちの推測通りであった。
別に殺すつもりも金が目的でもなかった。ただ、旨い酒をと地道に日々を送る

Copyright© H.Mitani

者に対する阿漕な遣り方が許せなかった。確かに商売は下手だった。丹精こめて造った酒だが、金のない連中が喜ぶ顔が見たく、高い値段は付けられなかったと言う。

伊銀は決めていた。大方、峰打ちにあった連中は堺屋と同類の汚い連中であろう。いずれにしろ、これ以上被害は起きない。賊は、江戸近辺から地方に逃げたことにしよう。ここに居るのは犯人ではない。静かに考え込む伊銀に、弘兵衛が声を掛けた。

「伊銀。物事は、はっきりせねばならぬと思うが如何か」

この男、何を言いたいのか……。

「どう言う事じゃ」

「おぬしが、この事件をどのように奉行に報告しようとも構わん。しかし、少なくとも佐衛門の話の裏を取る必要はある。さもないと我々は寝覚めが悪くなる」

「弘兵衛、廻りくどい言い方などせず、率直に申せ。話の裏づけとは何じゃ」

「酒じゃ。本当に呑んだ者が喜ぶ酒かどうか、佐衛門の話だけでは信用できん。これはいかん」

「では、どうするのじゃ」

「簡単な事。佐衛門が造った酒を証拠として持って来るのじゃ。当然、皆で吟味しなければならないはず。これも勤めじゃ」

この男の屁理屈には負ける。早速、佐衛門に酒を売る店を聞き松造を走らせた。

清酒泉大（せんおう）。左衛門は、酒の名前など付ける気はなかった。この名前は、誰言うともなく付いたもの。泉の如く旨さが沸き出ずる大村左衛門造りし酒。

「伊銀、これも勤めじゃ。辛いのう」

何が辛いじゃ。嬉しそうな顔をしおって。

皆が口にふくむ。旨い。辛（から）さと甘さの絶妙な割り合い。口の中で静かに騒ぐ旨さ。喉を通すと五臓六腑に染み渡るような陽気な味わい。

「旨いなあ」

皆の顔が綻んでいく。佐衛門は、ただニコニコと見ていた。気付けば佐衛門の縄は、すでに解かれていた。

「弘兵衛。勤めじゃ。もっといくか」

Copyright© H.Mitani

「おう、勤めであれば仕方ないのう。何じゃ、もっと注げ。なみなみとな」
急に、伊銀が肩を落として下を向いてしまった。
「どうした。なみなみと注げ」
卯吉が、弘兵衛を突付く。
「弘兵衛様、駄目でございますよ」
「何が駄目じゃ」
「伊銀様に、ナミと言う言葉を使ってはいけません。しかも、ナミナミなどと連続して……」
「な、何じゃ。なみなみと言っただけで、奈美殿を思い出すと言うのか！　どうしようもない男じゃな」
佐衛門は今まで通り酒を造ることになった。賊は、既に江戸には居ない。

鉄之助は、三太夫宅で仔細を聞いた。息子の事を考えると嬉しいやら情けないやら複雑な心境であった。三太夫が言った。
「家光公まで申しておる。異存はなかろう」
「勿論でござる。奈美殿が娘になるなど思いも寄らぬ事。松井殿、奈美殿に早くお会いしたい」

松井道場に三太夫、ご隠居、綾、そして鉄之助が集っていた。五二郎を前に鉄之助が頭を下げた。
「ご息女、奈美殿を我が息子、銀之助の嫁にいただきたい」
奈美は真っ赤な顔で俯いている。

伊銀は、事件も片付きスッキリした顔で帰宅した。はて、誰ぞやが参っておるのか。見慣れぬ草履が……。
「戻ったのか。銀之助」
「父上っ！　何時お越しで……。お元気そうで何よりでございます。銀之助もご覧のように元気で遣っております。して、何か……」
鉄之助の掌が銀之助の顔に飛んだ。ピシッ！
「ち、父上っ！　このような仕打ちは初めてでございます。如何、致しました。

Copyright© H.Mitani

お話くだされ」
「家光公のご意志でもある。そなたの友人や知人も、皆、賛成しておる。当然、拙者も喜んでおる。銀之助、奈美殿を妻に娶れ！」
「ゲーッ！」
言うなり、伊銀はへたり込んでしまった。
「情けない男じゃ。おぬしの頭の中には、奈美殿の事しかないのであろうが。小さき頃、苛めに合ったのは事実じゃ。おぬしは泣いて帰ってきおった。それは良い。子供であったからな。しかし、何故、いつまでも怖がっておるのじゃ。好きだったのであろうが。己の気持ちと違ったことをされた。その驚きが強かった。その驚きが怖さになり残ってしまった。奈美殿が、それほど怖いのであれば、他の女子を求めれば良かったのじゃ。だがおぬしは違った。死ぬまで独身で居るつもりか。
独身とは、犭（ケモノヘン）に虫の身（からだ）と書く。つまり獣虫（けものむし）じゃ。人間ではない。男は、妻を娶って初めて人間になる。女は夫と契りを結び、初めて人間になる。獣虫のままで死ぬ事は許さん。それに伊藤の家はどうするのじゃ。おぬしは伊藤を終わらせるつもりか。これも許さん。おぬしにとり、女子とは奈美殿だけであろうが。他の女子は頭に入って来ないのであうが。良いな！　明後日、式を挙げる」
「みょ、明後日でござるかっ！　父上、銀之助は、どうすれば良いのでしょうか……」
「簡単じゃ。夫婦になれば良いのじゃ。先日、奈美殿が戻られた時、おぬしは道場にいたそうじゃな。奈美殿は、それを知り、すぐさまおぬしに会いに行ったと言うではないか。可哀想に、奈美殿は言葉も掛けてもらえなかったと泣いたそうじゃ。奈美殿にとっても男とは、おぬしだけ。おぬしごときを好きになった奈美殿を大切にいたせ。銀之助、子供の頃はな、男も女も好きな人には逆の態度を取るものなのじゃ。人間とは面白いのう。さ、済んだ事は気にせず、これからの事を考えよ。良いな」
伊銀は、奈美が己のことを好いていたと聞いた時、不思議な気持ちになっていた。
奈美殿が拙者の事を好いている。あの時の苛めは好きだからこそ取った態度だ

Copyright© H.Mitani

と言う。そうなのだろうか。しかも私の妻になりたいと……。私の妻に……。総ての手筈は自分の意志には関係なく、既に整えられたと言う。家光公のご意思だとも……。逃げ出す事は出来ないだろう。もし逃げ出したりしたら、いくら温厚な家光公でも許しはしない。自分だけでなく父にまで類火が及ぶ。父が諭しは理解できる。しかし、心の底にある奈美に対するこの気持ちをどうすれば良いのか。恐れを抱いたまま夫婦になるのか。そんな事があって良いのだろうか。

伊銀は、フラフラと大川の土手を歩いていた。空ろな目は、川の流れや風に揺れる柳に向けられていた。どこからか華やいだ女の笑い声が聞えてきた。ふと目をやると……　あーっ！　綾と奈美が笑いながら歩いてくる。伊銀は、身動きが出来なかった。二人も伊銀に気が付いた。二人は笑うのを止め顔を見合わせた。

綾が、ポーンと奈美の背中を押した。奈美は、つつっと前にのめったが、そのまま伊銀の方に歩いてきた。

綾は、じゃあねと声を掛け、去って行った。

奈美は、伊銀の二、三歩前で止まり、静かに頭を下げた。顔には笑みを浮かべている。伊銀は、木偶のように突っ立っている。もう逃げる事はできない。この人と夫婦に……。笑みを浮かべる奈美の顔を見てもやはり怖い。

何か、何か話をしなければいけない。伊銀の頭の中は錯乱していた。

「な、奈美殿。お、お元気なご様子。こ、この度は、道場に戻られ、先生も心より、喜んでおられるまする」

これだけ言うと、伊銀は黙ってしまった。

奈美は何も言わない。微笑んでいるだけである。二人は見詰め合っていた。しかし、目付きが違った。奈美は優しい眼差しで、伊銀は、ただ凝視しているだけ。

その時、突風が吹いた。目に塵でも飛び込んだのだろうか、奈美が顔を手で覆いよろめいた。途端、小石に足を取られつまずいてしまった。風にも煽られ、よろよろっと体を動かしたが、方向が悪かった。そのままの格好で大川に落ちてしまった。

「銀之助様！」

大川の水量は多いし流れも速い。奈美は、瞬く間に流されていった。伊銀は、反射的に体を動かした。何も考えていなかった。奈美を追って走り出した。奈美

Copyright© H.Mitani

の近くに来ると両刀を土手に置き、大川にザンブと飛び込んだ。抜き手を切り、奈美の側に泳ぎ着き手を取った。その手を奈美は、しっかと掴んだ。伊銀は奈美を引き寄せた。奈美は、夢中で伊銀にしがみついた。

伊銀は、無意識であった。

気付くと川の中で奈美を抱きしめていた。奈美は、伊銀の胸に顔をうずめている。

「奈美殿、大丈夫か」

「銀之助様」

二人は、抱き合ったまま見つめ合った。奈美の顔は水に濡れ、濡れた髪が顔に掛かっている。目には溢れんばかりの涙。

「銀之助様。奈美は、奈美は、いつまでもずっと、このまま銀之助様に抱かれていたい……」

伊銀の頭の中に、昔の出来事が甦ってきた。

「奈美っぺ、川の側で遊んじゃ駄目だよ。落ちたら危ないよ」

「大丈夫だもん。だって奈美は泳げるもん。銀兄ちゃんは、いつも奈美の事になると心配ばかりするんだから」

しかし、奈美は泳げなかった。川に落ちた奈美を助けた事があった。あの時も奈美は顔をうずめ、しがみついていた。奈美を見つめる伊銀の目に、昔の優しい眼差しが戻っていた。

「奈美っぺ。奈美っぺ。もう大丈夫だよ。銀兄ちゃんが、いつも側にいてあげるからね」

「銀之助様！」

「奈美！」

三々九度の杯は伊藤家で。

紋付袴姿の伊銀。内掛け姿の奈美は、眩いばかりに輝いている。伊銀の目がもう少し開いていれば、二人はまるで雛人形の内裏様。

列席者は、鉄之助、五二郎、綾、三太夫、ご隠居、弘兵衛、卯吉、松造、仙吉、それに佐吉。どう言う訳か二度烏やサブも顔を揃えている。それにもう一人。徳

Copyright© H.Mitani

山竹弥。例の丸に九枚笹の着古した着流し姿で酒を呑んでいる。酒は勿論、清酒泉大。

宴もたけなわの頃、荒川北東斎が汗だくで駆けつけた。駆けつけ三杯。いや三杯どころではない。呑んだ酒が、すぐに出てきたように汗をダラダラと掻いている。思いついたように筆をとり、サラサラと内裏様や宴の状況を描いている。わしは、酒が入った方が良い絵を描けるのじゃ。傑作が出来るぞ。さっきから一人ごち。

二度鳥が五月蝿い。良かった、良かったを連発している。男の色気がないなどと冗談半分で言ってしまったことを悔やんでいた。伊銀が結婚できて本当に良かった、良かった。今日の源兵衛は、千度鳥。

卯吉は、さっきから唸りっぱなし。伊銀の旦那があんなに嬉しそうな顔をしている。奈美殿は、天女のようだ。夫婦になることとは、それ程に幸せなことなのか。俺も、もう少し若ければ。恋には歳の差なんてとか言うが……

鉄之助、五二郎は、長々しい三太夫の祝辞が終った頃からずっと手を握り合い、涙を流して頷いてばかりいる。妻が生きていれば喜んでくれたのに。二人して同じ事を繰り返し語っては、そうじゃ、そうじゃと頷いている。二匹の米搗きバッタのような有様。

佐吉、松蔵、仙吉、それにサブは料理が美味しい、酒が旨いと、喰うわ呑むわ、新郎新婦などはそっち退け。いずれ恋の悩みに涙する自分たちに気付いていない。

三太夫は、早くもコックリを始めている。それはそうだろう、そもそもを連発し、余りにも長すぎた祝辞に、本人自身が疲れ果てたようだ。さすがの三太夫も歳なのか。まだまだ先は長いのに。

ご隠居は静かに呑んでいる。

婆さん、見てご覧よ。あの初々(ういうい)しい二人を。わしらにもあったよな、あのような時が。婆さんは皺一つなかった。歳と共に一本々々増えていった。婆さんは良く言ってたな。皺の一つ一つが、わしが掛けた苦労の証だと。最初は悪かったと思ったが、婆さん、そういう事は嬉しそうに話しちゃ駄目だよ。すぐに皺を増やすような事を遣ってしまうからな。なに、天国では厳しく遣るってか。まだ行かんよ。もう少し待ってくれ。綾の事が気になっているからな。

竹弥、いや家光は清酒泉大に惚れ込んでいた。日本の文化ぞ、酒は。国が落ち

Copyright© H.Mitani

着けば、さらにいろいろな文化が花開く。戦争はいかん。国を荒らしてはいかん。諸藩が争いを起こさぬよう、多少は厳しく治めた方が良いのじゃ。しかし、伊銀たちは幸せそうじゃな。三太夫め、嫁については何も言わん。ま、良いわ。自分で見つければ良いのじゃ。綾のような女子が好きだが無理じゃろうな。何かが違うのじゃ。何かが……。

弘兵衛は、悲しくて仕方がなかった。伊銀、奈美が並んでいる姿を見れば、こちらも清々しい気分になる。しかし、何故、拙者には奈美殿のように心底惚れてくれる女子が現れないのか。伊銀に比べれば遥かに拙者の方が男前だ。拙者には、何かが欠けているのか。悲しい。

誰かの声がした。弘兵衛さん、時の流れに身を任せていれば貴方にも良い人が現れると思うよ。

伊銀と奈美の宴は、遅くまで続いた。

（三）博　打

弘兵衛に異変が起きた。

弘兵衛は、近頃閑を持て余していた。家光は、幕藩体制に関する種々の制度や規則、いわゆるご法度などの作成に忙しく外出の機会が減っていた。三太夫を訪ねてもねじり鉢巻姿で忙しそうに書類を作っている。何も鉢巻まですることはなかろうにとも思うが、これが三太夫の持ち味。物事に取り組む時、その気になるために身格好を整えるのだ。

「弘兵衛、見ての通りじゃ。殿も懸命じゃ。当分は、外出される事もない。ま、いつも通りノンビリしておれ。何かあれば声を掛ける」

三太夫の話は、普段通りの皮肉の混じったもの。しかし閑を持て余す者にとっては、胸に突き刺さる言葉になる。

まあ良いか。所詮、拙者は徒侍。殿の外出がないのであれば、このような閑な

Copyright© H.Mitani

時間が出来るのも当然。伊銀も伊銀だ。顔を合わせれば、奈美が奈美がと煩くて敵わん。あれほど怖がっていたくせに。まったく近頃は、つまらん、などと呟きながら、江戸の町をブラブラと歩いていた。

ふと見るとサブが気ぜわしく通りを歩いているのが目に入った。声を掛けようかと躊躇っていると、サブが気が付いた。

「弘兵衛さん！　お久しぶりです」

「おう、サブか。忙しそうだな」

「堪りませんよ、あの源兵衛には。何かと言うと用を言いつけますからね。自分は体一つ動かそうとしないんですよ。今日も卯吉さんに、ちょっとした言付けで走り回りました。卯吉さんは動きまわっていますからね」

「そうか、忙しいのか。良いな」

「えっ、今、何て言いました」

「一人言じゃ。気にするな」

「弘兵衛さんは、これからどちらへ」

「うん、どちらと聞かれるほどの事ではないが、ちょっとな」

とは言ったもの、弘兵衛に行く当てがない。思いつきで言ってしまった。

「婚礼の席で二度烏と話したが、会ってみようかと思ってな」

「そうですか。丁度良いですね。一緒に行きましょう」

つい口に出してしまったが、別に源兵衛と話すことなどない。道すがらサブは、いろいろと喋るが、弘兵衛は上の空。そうこうしているうちに生駒屋に着いてしまった。

「おうおう、弘兵衛さん、弘兵衛さん。あの席では失礼しました。失礼しました。しかし良い宴でした。ところで、どんな風の吹き回しで私のところに……」

「いや、たまたまサブにあったのでな。顔を見たくなっただけだ」

源兵衛は、胴元。種々雑多な人間を見ている。この前に会った時と比べ、弘兵衛の空ろな雰囲気に気が付いた。このような時には黙っていた方が良い。弘兵衛が居た堪れなくなって口を開く事は判っている。

「まあ、何と言うか閑でしてな。忙しいのには慣れておるが、閑には慣れておらん。サブは、こき使われて忙しくて堪らんと申しておったがその方が良い。あっ！

Copyright© H.Mitani

いや、こき使われてなどとは申しておらんかったかな」
「わ、はっはー！。言い換える事など不要。こき使っておりますから。閑でしたら道場とか女子の所とか、いろいろあるでしょうに」
「道場にいけば奈美殿の輝くような顔を見てしまう。新妻の美しさを見るのは独り身にとっては、ちと辛い。伊銀に会えば奈美、奈美じゃ。女子と言ってもな……。親身になって拙者の事を気遣ってくれる女子など、居ない」
源兵衛は、弘兵衛がこのような話をする侍とは思っていなかった。しかし、感ずる所はあった。
「源兵衛。何故、拙者には奈美殿のような女子がおらんのかのう。伊銀より拙者の方が、どう見ても見栄えが良い。勤めも手抜きなどはせん。腕も伊銀と五分じゃ」
「弘兵衛さん、付き合っている女子は多いのではないですか」
「少ないとは言えんが……」
「そうですか。しかし、こっちが、こっちがですよ、本気になると、急に居なくなる。本気になれない女は寄って来る。ま、そんな、そんなところでしょう」
「そうじゃな。ま、そんな状態なのかも知れんが……」
「やはり、やはりね。うーん」
源兵衛は、腕組みをして唸っている。弘兵衛は気になってきた。
「源兵衛。唸ってないで何か喋ったらどうだ。勿体振るものではない」
「いえ、勿体振るつもりはありません。ただ……」
さすがの源兵衛も言うのを躊躇っている。
「弘兵衛さん。私が何を言おうが怒りませんね」
「源兵衛、二度鳥の渾名を持つおぬしが何を躊躇っておる。拙者も武士の端くれ。生半可な事では怒ったりせん」
「そうですか。弘兵衛さん、ツツジをご存知ですよね」
「何を言い出すかと思えばツツジか。花のツツジであろう。知らぬ訳はない」
「多分、多分ですよ。女子は弘兵衛さんの事をツツジのような男と思っているのではないでしょうか」
「何っ！　拙者をツツジと思っていると言うのかっ！」
弘兵衛は大きな声を出したが、源兵衛が何を言いたいのか判らなかった。

Copyright© H.Mitani

「弘兵衛さん。ツツジは実に綺麗な花です」
「おう綺麗な花じゃ。源兵衛、拙者は男ぞっ！　綺麗な花に例えるとは、何を言いたいのだっ！」
「ツツジは綺麗に丸く花を付けます。こんもりと花の玉を作ります。しかし、しかしですよ、その花と葉を掻き分け中を見ると……」
「中を見れば茎があろうが。源兵衛、何を当たり前の事を」
「弘兵衛さん」
急に源兵衛は声を落とした。
「弘兵衛さん。掻き分けてみると、そこには細い茎しかありません」
「当たり前だっ！　ツツジとは、そう言う花だ」
「女子は、細い茎が見たいのでしょうか」
「……」
「女子が求めるのは何本もある細い茎や、その茎に咲く花ではなく、図太い一本の太い茎なのではないでしょうか」
「図太い一本の茎……」
二人の間にかなり長い沈黙が続いた。

「源兵衛。図太い一本の茎かっ！」
「はいっ！　図太い一本の茎です」
「……」
弘兵衛は思ってもいなかった源兵衛の言葉に戸惑いを感じていた。図太い茎。何だ、それは。
「弘兵衛さんは見栄えも身のこなしも良い。女子の目を引きます。それに言葉も巧み。女子の扱いにも慣れているはず。そのような男と居れば女子は心地良いもの。しかし、それだけ……」
「何じゃとっ！　拙者は表面（おもてづら）は良いが中身がないとでも言いたいのかっ！」
さすがにムカッと来る。片膝を上げ傍らの刀に手がいく。弘兵衛は、源兵衛を睨みつけるが源兵衛には全く動ずるところはない。そう言われてみれば思い当たらない事はない。好いた女と道を歩いていても艶っぽい女が通れば、目は自然とその女を追っている。弘兵衛は、膝を落とし、ションボリしてしまった。

Copyright© H.Mitani

「弘兵衛さん。ツツジの盆栽をご存知ですよね。小振りながらシッカリとした幹を持ち、その幹に幾つかの綺麗な花を咲かせます。そんなツツジもありますよ」
弘兵衛、気を取り直して懸命に話した。
「源兵衛。おぬし花については詳しくないな。あれは皐月(さつき)じゃ。ツツジではない」
「そうです。皐月です。弘兵衛さん、皐月の正式な名前が、皐月ツツジと言うのをご存じでしたか」
「皐月ツツジ？　源兵衛、本当か」
「こんな事で嘘を言って何になります。皐月はツツジの一種。名前の通り皐月に咲きます。ツツジでありながら何故、盆栽仕立てにすると、あのように小振りながら太い幹を持つようになるのかは存じません。しかし、あのようなツツジもあるのです」
「わ、はっはー！　源兵衛、それで拙者を慰めているつもりかっ」
すでに弘兵衛は自分がツツジである事を認めていた。
「慰めるつもりなどございません。ただ親身になってくれる女子が居ないとおっしゃったものですから、思ったまでを言ったまでで……」

弘兵衛は邪魔したなの一言を残し、部屋を出た。源兵衛は煙管盆をとり刻みタバコをプカプカ吸った。ちょっと弘兵衛さんには、きつい内容だったかな……。ま、これで良いのだろうと独りごち。
弘兵衛が部屋を出ると、サブが居た。
「おお、サブか。拙者、賭場を見たことがない。ちょっと見ても構わんか」
「えぇ、そりゃ構いませんけど……」
サブは弘兵衛の空ろな表情が気になっていた。賭場に案内するかどうか源兵衛に聞こうかとも思ったが、いちいち聞くのもと思い直し賭場に連れて行った。
威勢の良い掛け声が飛び交っていた。長四角の盆を囲んで大勢が座っている。壺振りのシャキッとした姿。壺が上げられるのを食い入るように見つめる連中。
「四、六の丁っ！」
同じ事が繰り返されている。丁だ、半だっ！　勝った、負けた！
「さあ、宜しいですかっ！　いきますっ！　二、五の半っ！」
弘兵衛は、賭場の隅でこの様子を眺めた。

Copyright© H.Mitani

「サブ、ありがとうよ。源兵衛に宜しく伝えてくれ」
弘兵衛は生駒屋を後にしてその足で卯吉を訪ねることにした。

「おやまあ、珍しいですね。弘兵衛さん、何かありましたか」
「これと言った用事ではないのだが、先程、サブに会い、卯吉の名前が出たので顔を出したまで」
「そうですか。弘兵衛さん、浮かない顔をしているようですが」
「そ、そんな事はない。ところで卯吉。賭場を初めて覗いてみたよ」
卯吉は何となく嫌な予感がした。
「で、どのようにお感じになりました」
「要するに丁か半かを当てるもの。丁と半の目が出る回数はトドのつまり同じになるのではないか。つまり、どちらか一方に賭け続ければ、結局、結果はチャラではないか。何が面白いのか拙者には判らん」
そうですね、の一言で卯吉はこの場を終わらせれば良かった。
しかし、自分が命を掛けたこともある博打に対し余りにも無知な発言。
「確かに丁半の目が出る割合は五分と五分。しかし、交互に出るものではありません。場によってどちらかが多く出たり少なかったりします。ある時点からある時点までを見ればチャラになるかも知れません。それが五回目なのか、十回なのか、百回、千回目……。いや、一生なのか……。弘兵衛さん、ひょっとすると一生掛かってもチャラにならない人も居るかも知れません。それは判らない。本来、五分と五分であるはずの出目が偏ったりする。丁に偏ったと思えば急に半にいったりする。その流れを読みながら、次は、どちらに偏るか、次はどっちの目かを予測し賭ける」
卯吉は、ここでちょっと息をついた。
「弘兵衛さん、掛けた金をチャラにするために博打を遣る人間など居ませんよ。儲けるためです。自分の金を倍々に増やすために遣るんです。それに、どちらかに賭け続けてチャラになる保証などありません。自分の読みが当たるか、勝つか儲かるか。いや自分の読みは正しい、自分は勝つんだとの思いが夢中にさせるのです。しかし不思議な事にほとんどの人間は負ける。もう一つ不思議な事は、運と言うかツキを持っている人間と持っていない人間が居ること、ツイている日と

Copyright© H.Mitani

ツイていない日があることです。ツイていない時には何を遣っても駄目です」
弘兵衛は卯吉の話を黙って聞いていた。
「弘兵衛さん、それにもう一つ。金は寂しがり屋なんです。大勢で一緒に居たがる。金を持っている人の所に集まりたがるんです。賭場でも金を沢山持っている者は楽しみながら金を増やしていく。金のない者は、幾ら必死になっても負ける。結局、スッカンピン。博打は本当に怖いものです」
「今日の卯吉は、よう喋るな」
「いや、こんな話を他人にしたことはありません。博打は遣るもんじゃありません」
「なんだ、拙者にお説教をしていたのか」
「いえいえ、そんなんじゃありませんよ。私自身、博打は怖いものと思っていますから、ついつい長く喋ってしまいました」
「ところで、サブは良く来るのか」
「そうですね、源兵衛が掴んだネタなどを伝えに来ますよ。源兵衛はサブを堅気な人間にしたいらしいんです。賭場で働く人間にも堅気はいますから。私は別に構わないとは思いますが……。サブは義理人情に厚いし優しいところがある。それに綺麗な気持ちを持っている。目の色を変えて丁だ半だと騒ぐ連中と一緒にさせておきたくないと源兵衛は考えているようです」
「ほう、源兵衛は、そんなことを考える事があるのか。卯吉、源兵衛は人を見る目を持っていると思うか」
「弘兵衛さん、生半可な人間に胴元は勤まりません。奴の目は、恐ろしいほど確かです。負けた人間は二度烏カーカーなどと囃しますが、皆に好かれていますよ」
「そうか、確かな目を持っているのか……」
弘兵衛は急に肩を落とした。
「弘兵衛さん、何かあったのですか」
「い、いや別に何もない。卯吉、盆栽仕立ての皐月と丸く咲いているツツジと、どちらが良いと思う」
「急に話が飛びますね。まあ、どちらかと言われれば、そうですね、皐月ですかね。小さいながら、シッカリと根を張り意思の強そうな茎に大ぶりの花を幾つかつける。見ていて清々しい。ツツジは、確かに綺麗ですが何となく表面だけ。じ

Copyright© H.Mitani

っくり腰を落ち着けて見たいのは皐月の方ですね。ツツジは、チャカチャカした感じです」
「チャカチャカッ！　卯吉ッ！　そ、それは言い過ぎではないかッ！」
弘兵衛は急に声を荒げた。卯吉には、さっぱり訳が判らず、キョトンとしている。
「いや、大声を上げたりして済まなかった」
言うなり、また肩を落とし俯いてしまった。
「弘兵衛さん、何だか元気がありませんね。どうしたのですか」
「い、いや、本当に何でもない。卯吉、今日はいろいろと世話になったな」
弘兵衛は肩を落としたまま卯吉の家を出た。
卯吉は腕組みをしたまま呟いた。
「空ろだな。何かあったな」

綾の腕は、確実に上がっていた。奈美は家事の合間を見つけ、師範代を勤めている。五二郎は嫁にやったとは言え、奈美が道場に来る日が多いことを喜んでいた。
奈美は、綾の太刀筋が六弦流に似ていると感じていた。言い換えれば弘兵衛の動きを真似ているようだ。当然の事ながら、まだまだ入り口に足を入れた程度でしかない。
綾は新妻となった奈美のほとばしり出るような明るさ、顔の輝きに嫉妬にも近いものを感じていた。夫婦（めおと）になるってそんなにも素晴らしい事なのか。
稽古が終わると奈美の部屋でお茶をとる。女、二人のお喋り。
「奈美さん、剣道って難しいものね。一つ一つの所作に意味があるし、その所作をつなげるにしても意味を持った動きを取らなければ流れるような動きにはならない。意識すると力が入り、ギクシャクしちゃう」
「父がよく言うわ。自然体で刀を扱えるようにならなければ駄目だって。その為には稽古、稽古ってね。一々考えているようでは、まだまだ剣道とは言えないって。雑念を捨て、ひたすら刀と自分を一体化させるんだって。そうすれば心技体、この三つが穏やかな形で一つになっていくってね」
「奈美さんは、その域に達しているように思えるけど」

Copyright© H.Mitani

「まだまだ、これからね。銀兄ちゃんも……。あらっ！　ごめんなさい。銀之助さんも……」
奈美は、つい伊銀と二人でいる時の呼び名を使ってしまった。急に顔を赤くする。
「へえ、銀兄ちゃんて呼んでるんだ。ねえ、伊銀さんは、奈美さんの事を何て呼ぶの。まさか奈美っぺじゃないでしょうね」
奈美は、まだ顔を赤くしている。小声で言った。
「そうなの。そのまさかなの……」
「聞いていられないわっ！　お惚気ね」
「そんなんじゃないわ。つい口に出ちゃっただけ」
「だから余計、感じちゃうわ。羨ましい。幸せなのね」
「もう、止めてよ。ところで六弦流に興味あるの」
「そうね。弘兵衛さんと奈美さんの申し合いを見て感じたの。踊りを踊っているみたいだなって。あんな動きが出来たらいいなと思うの」
「弘兵衛さんにも興味あるの」
「えっ！　弘兵衛さん自身にってこと」
「そう」
「やだあ、あの人は結構真面目だし優しい。それに見栄えも良いし、女の扱いにも慣れている。一緒にいると本当に楽しいわ。でもね」
「そうね。綾さん、弘兵衛さんて、じっと見つめるでしょう。見つめられるとドキッとするわね」
「そう、ドキッとね。でも……」
「ズキンとは来ない」
二人は、同時に同じ事を言った。そして笑い転げてしまった。女二人の会話は男にとって怖いもの。
「そうね、弘兵衛さんて男として悪くないのよ。でも、いつまで友だちで居たいって感じの人ね」
奈美もズケズケ言う。
「あら、じゃあ奈美さんは、伊銀さんにズキンときたんだ」
「そんなの感じたことないわ。だって、小さい時からの知り合いでしょう。それ

Copyright© H.Mitani

にあんな細い目じゃ……」
「見つめられているのかどうか判らない」
これまた異口同音。着物の裾が乱れようがお構いなしで笑い転げている。笑い声は五二郎の部屋まで届く。
「また、あの二人は……。仲が良いのはいいが、あれでは嫁にいけないな。いやいや、奈美は嫁に行ったのだった。伊銀には悪いが、奈美が居てくれると、こっちも楽しくなる。いつ戻って来ても良いのだが……。いかんいかん、何を考えているのだ」
父親も父親である。
「そう言われてみれば、私ってズキンの経験なしに結婚しちゃったのね。何だか損したみたい」
「何いってるのよ。惚気るくせに」
「気が付いたら銀之助さんの事を好きになってたって感じかしら。でも、その時には怖がられていたけど」
「でも、あの怖がりようは凄かったわね。私もビックリしたわ」
「そうなの。気持ちを伝えようにも会ってもくれない。逃げるんだから。それも早いの。普通、お侍様ってお家の大事の時以外は走らないものよね。夕立の時だって悠然と雨の中を歩いている。刀は、濡れないようにするけど……。あの人は顔を見ると走り出すんだから。本当に悲しかったわ」
「手紙なんかは書かなかったの」
「書いたわ。でも返事はなかった。破き捨てたんじゃないかと思っていたわ。この前ね、神棚を掃除してたの。そしたら手紙が置いてあったの。封は閉じたまま。読んでなかったのね。聞いてみたの、これどうしたのって。そしたら差出人を見た途端、震えが起きたんだって。捨てようと思ったけど呪いが掛かっちゃいけないと思って神棚に置いたんだって。毎朝、苛められませんように、神様、奈美を封印してくださいってお願いしてたんだって。酷いと思わない」
「で、二人で読んだの」
「読まないわよ。私は中身知ってるし、今更読まれても恥ずかしいだけ。だって好きです会ってくださいって書いてあるんだもの」
「伊銀さんは、読みたくないのかな」

Copyright© H.Mitani

「当時の自分を思い出すから読みたくないんじゃない。また神棚に置いたわ。でも何時の日か読む時が来るとは思うけど」
「そうね。でも良いわね。そういう物があるって……」
綾は、やはり羨ましかった。
「そう言えば、銀之助さんが近頃弘兵衛さんを見かけないって言ってたけど、綾さん最近会った」
「会ってないわ。道場にも来てないんでしょう。何してるのかしら」
二人は、怪訝そうな顔で見つめ合った。

卯吉は、今抱えている事件に関する情報を整理し、覚書帖に記していた。そこにサブがやって来た。
「丶の字、入っていいですか」
「サブ、何遍言えば判るんだ。その丶の字と呼ぶのは止めろ。親分と呼べ、親分と」
「へぇ、判りやした。丶の字親分」
「こらっ！　ひっぱたくぞ。何だ用事は」
「源兵衛が来てくれって言ってます」
「そうか、今、手を離せないが……。どんな事だ」
「弘兵衛さんですよ。弘兵衛さん。入り浸りです、賭場に」
「エッ！　弘兵衛さんがッ！　そうかー」
卯吉は、悪い予感が当たったような苦々しい気持ちになった。
「判った。近いうちに行くと源兵衛に伝えてくれっ」
まさかとは思っていたが入り浸りか。これは一悶着ありそうだな。卯吉は明日にでも生駒屋に顔を出そうと思った。

賭場は盛況だった。早速、弘兵衛を捜す。居た。真中に陣取っている。見るとかなりの札(ふだ)が積まれている。二十両ほどありそうだ。弘兵衛さん、ツイてるな。しかし顔付きを見て驚いた。酷い形相である。月代は剃ってなく、髭も伸び放題。スッキリしていた顔はどす黒く脂ぎっている。あれだけ積んでいるのに嬉しそうな表情は全くない。見ていると次の勝負に総てを賭けるようだ。賭ける目は半。

Copyright© H.Mitani

卯吉は、とっくに足を洗っているため流れなどは全く読めない。しかし勘が働いた。違うのでは……。

壺が開けられた。二、六の丁。ごっそりと持っていかれる。弘兵衛は、ガックリと肩を落としている。周りの者は、弘兵衛の大負けに関心を示していない。あれだけの負けである。普通であれば残念でしたねぇとか声が掛かりそうなもの。と言うことは……。卯吉は、弘兵衛の賭け方を理解した。いつも、ああなんだ。周りの者は、またか、なのであろう。弘兵衛は肩を落とし一点を見つめているだけである。場は進んでいる。卯吉は源兵衛の部屋に行った。

「何だ何だ、やっと来てくれたか。丶の字。ところで見てきたか」

「見た。何日も、ああなのか」

「そうよ。何日も、あーだ。今までシコシコ貯め込んだ金を使い果たしたんじゃないか。こっちは、てら銭で儲けるんだから関係ないが、流石の俺も見ていられなくてな。済まんと思ったが来てもらった」

「おう、ありがとよ。まさか金を貸したりはしてねぇだろうな」

「当たりめぇよ。こっちから貸すことはない。どこかの阿漕な胴元とは違う」

「そ、そうだった。済まん済まん。しかし、あの弘兵衛さんが、ああまで酷い形相になるとはな。正直、俺も驚いたよ。この前ひょっこり来てな。丁半について話していた。難しいものだと言ったんだが……。それに変な事を聞いてたな、皐月とツツジとか……」

「そうか。実は、俺が話したんだよ。シッカリした弘兵衛さんだ、多少きつい事でも聞かれたことにはと思い喋ったんだが」

源兵衛は、掻い摘んで先日の出来事を話した。

「そうだったのか。しかし源兵衛、その話は、その話だ。おめぇが言ったことは間違っちゃーいねぇ。ただ、荒んだ気持ちが博打に走らせたんだな」

「で、丶の字、どうする。このままで放っておくか」

「一端（いっぱし）の大人よ。こっちがトヤカク言う事じゃねぇ。気になるのはお勤めの方だが……」

「そうよ。大殿のお徒（かち）。他にも徒侍は居ると思うが」

「判った。伊銀の旦那にも聞いてみよう。源兵衛、良く伝えてくれた。礼を言う

Copyright© H.Mitani

ぜ」
「おう、しかし弘兵衛さんは良い人だしな。何とかしたいが……」
卯吉は、状況を伊銀に伝えることにした。
卯吉が伊銀の家に行くと伊銀が腕を組み、顔に皺を寄せて唸っていた。傍には奈美が、これまた暗い表情で座っている。
「旦那、どうしたんで……」
「卯吉、今、三太夫殿の所から帰ったばかりじゃ。奈美にも話したが困ったものだ」
「旦那、何のことだか、あっしにも……」
「おう、そうじゃな。弘兵衛の事だ」
「えっ！　私も弘兵衛さんの件でして。で、三太夫殿は何と……」
「弘兵衛の博打じゃ。勤めの方は、殿が外出できる状況ではないため支障はきたしていない。しかし入り浸りとはなあ」
「源兵衛が来てくれとのことで、賭場に行ってきたばかりでして……。しかし、三太夫様は、すでにお調べ済みとは、やはり大したものですね」
「何を感心しておる。あのお方はな、アー見えても遣る事は遣るお人だ。それに弘兵衛は罪を犯した訳ではない。お調べなどとゲンの悪い言葉を使うものではない」
「へぇ、失礼しやした。で、どういたしましょう」
「どうすると言われてもな。弘兵衛も大人だ。止めろと言ったところで、どうなるものでもあるまい」
「へぇ」
「ま、それとなく賭場を覗いてくれ。何か変わったことでも起こるようであれば知らせてくれ」
「へぇ、ようがす。そういたしやしょう」
奈美の暗い顔は、そのままであった。

二、三日後、卯吉は生駒屋に顔を出した。
弘兵衛は、同じ場所に座っていた。今日は源兵衛も場を見ている。源兵衛と目

Copyright© H.Mitani

が合った。渋い表情で弘兵衛の方に顎を向けた。弘兵衛は相変わらずであるらしい。十両ほどの札を積んでいる。弘兵衛さん、今日のところは、その辺で止めた方が、と言いたいが見ている以外にない。

次の場に総てを賭けるらしい。また半だ。出目は、ぞろ目の丁。同じ事の繰り返し。弘兵衛は肩を落とし、ただ一点を見つめている。卯吉は、呆れると言うよりも哀れみさえ感じてしまった。源兵衛も同じ事を感じているのであろうか顔を背けている。いけない、このままでは、いけない。

ふと見遣ると、今日の場には女が二人座っていた。一人は大年増風の太った女。着ている物は上等なもの。見るからにどこかの大店のご新造さんと言ったところか。しかし、片膝立てた格好、身のこなし、目付き表情などにはだらしなさが漂っている。金は有り余っている。閑もある。だが誰も構ってくれない。刺激を求めての賭場通いであろう。金はせびれるだろうが、一緒に居たくはない女だ。

もう一人は違った。糊の利いた浴衣姿。中肉中背。二十半ばの中年増というところか。衣紋をちょっと抜いているが、程よい抜き具合。ほのかな艶気が出ている。綺麗に結い上げた髪、スキッとした姿勢。多分、芸事でも教えているのだろう。

卯吉は見ていたが、この女は二つ三つの場をやり過ごして賭けている。賭ける金も大した事はない。軽く博打を楽しむような雰囲気である。場をやり過ごす時、その女の視線が弘兵衛の方に向けられているのに卯吉は気付いた。その女は弘兵衛の方をじっと見ている。

弘兵衛は、盆の一点を見つめているだけで、気付いてはいない。すでに金がないのであろうか、賭ける事も出来ないようだ。弘兵衛の隣の席が空いた。すると、その女は、すっと立ち上がり空いた席に座った。弘兵衛は席が空いたのも、女が隣に座った事にも全く気付いていない様子だ。腑抜け状態である。

女が声を掛けたようだ。弘兵衛は、ビクッと体を震わせ女を見たが、すぐに視線を元に戻した。全く関心を示していない。女が、また声を掛け……、いや今度は声を掛けただけではない。自分が持っている札を渡している。これは……、卯吉は、胸騒ぎがした。見ると三両ほどの札。弘兵衛は情けないことに卑屈な笑い顔を作って、その札を受け取った。卯吉は見てはいけないものを見た思いがした。弘兵衛さん、あんたはそこまで……。

Copyright© H.Mitani

札を受け取った弘兵衛の目は場に向けられていた。女は、札を渡すと席を立った。卯吉は、渡した札がどうなるかを見る事もなく席を立った女に興味があった。あの女、札がどうなるか判っているな。弘兵衛は、負けるに決まっている。それを知った上で札を、いや、金を貸したことになる。卯吉は、女の後を追うことにした。

賭場で起こった事など、どこ吹く風。女は、にこやかな表情を見せながら歩いている。下駄の音が心地良い。陽気な響きカランコロン。卯吉は、女の度胸の広さを感じた。どの位歩いただろうか、閑静な雰囲気を持つ界隈に入っていった。女は小体(こてい)な家に入った。

「喜代、帰ったよ」

「お帰りなさいまし。で、どうでした」

「えっ、何が」

「あら、ごめんなさい。気を廻しすぎましたようで」

「喜代も、結構若いわね。あたしは、あんたに何も言ったことはないよ」

「えぇ、そうですとも。喜代は、何も聞いておりませんよ」

「だったら、どうでしたなどと聞くのは変よ」

「変ですね。確かに変ですね。でも、この歳になっても女は女です。何か感じちゃうんですよ。姐さん、お気を付け遊ばせ」

「やな人。勝手に勘ぐるものではないよ。私は男には懲りてるんだから」

「あら、姐さん。私、男の話など一切していませんよ」

「喜代には敵わないわね」

卯吉の耳に、二人のこんな会話が入っていた。婆さんと一緒か。あの二人、血の繋がりはないな。卯吉は家の周りを見てみた。落ち着いた雰囲気の家が並んでいる。

こめかみに膏薬を貼った女が歩いてきた。卯吉は右手を上げ、こっちに来いと合図した。膏薬女は腰を振りながら、あら何ですかの様子。卯吉は、女の手を取り路地裏に誘った。

「済まねぇな。ちょっと教えてくれ」

「あら、お調べの筋の方？」

Copyright© H.Mitani

「決め付けねぇで欲しいな」
「なに言ってんのよ。その目付きを見れば、岡引って判るわよ」
「そうか。今から聞くことはお調べではない。ただ、ちょっと知りたいだけだ。話したくなければ話さなくてもいいぜ」
「何を勿体付けてるのよ。何が知りたいの」
「あの家の姐さんだが……」
「梅吉姐さんのことね。姐さん、何かしたの」
「いや、ただ気になってな」
「止めときなさい。姐さんは男嫌いで通ってるのよ。あんたじゃ無理ね」
「おいおい、そんなつもりじゃねぇよ。あの姐さんは男嫌いなのか」
「何だか大店に嫁いだんだってさ。でも亭主が女狂いで愛想をつかしたらしいのね。姐さんが三行半を書かせたらしいわ」
「そうか。結構、気が強いんだな」
「違うわよ。筋を通すのっ。筋が通らない事には絶対に首を縦に振らないの。女の鏡よ」
「女の鏡ね。ところで旦那は居るのか」
「そんなの居ません。三味線、小唄、端唄を教えているわ。勘違いした中年のお弟子さんが言い寄った事もあったようだけど、姐さん、軽くいなしたようよ」
「いや、ありがとよ。手間を取らせたな」
「ねぇ、姐さんに今の事伝えちゃうけど、良いのね」
「おいおい、それは拙いだろう。堪忍してくれ」
「そうなの。じゃあ……」
女は右手を出した。
「何だ、そりゃ」
「口止め料」
「えっ、そんなの取るのか」
「当たり前でしょう。ねぇ、口止め料」
「判ったよ」
卯吉は、薄ッぺらな財布を出し、中をあらためた。
「これでいいのか」

Copyright© H.Mitani

「あら、強請(ねだ)ったみたいで、気が引けるでけど、貰っておくわ」
これだから女は油断できねぇ。ヤダね。
卯吉は梅吉の身持ちの良さや近所の評判が結構良いことを知った。ふしだらな女じゃない。それに、いい女だ。何故、弘兵衛さんに……。

翌日も卯吉は賭場に行ってみた。あれっ、弘兵衛さんは来ていない。源兵衛の部屋に行った。
「源兵衛、今日は弘兵衛さん、来なかったのか」
「来たよ。来たけど場には入らなかった。腕組みして壁にもたれていた。卯吉、弘兵衛さんは、とっくに金を使い果たしているな。俺にも気付いたが、ほんのちょっと会釈しただけだったよ」
「そうか、場には入らなかったのか。お前に金を借りようとは思わなかったようだな」
「俺は、こう解釈した。あのご仁、まだ守るべきものは、ちゃんと持ってるとな」
「何だ、それは」
「お前にも判るだろう。金を借りて博打、打つようになったら人間、終わりって事よ。弘兵衛さんは、その一歩手前で止まった」
「だが、昨日女から借りたようだが……」
「おうおう、そこよそこよ。弘兵衛さん、その女を待っていたんだな。女が来ると、すっと立ち上がり、懐から……、ありゃ簪だな。簪を出して女に渡そうとしていたよ。結構、上物の簪のようだった」
「源兵衛、その女の名前は、梅吉ってんだが……」
「なんだ、なんだ、もう調べたのか。おめぇは、仕事が速(はえ)ぇや」
「梅吉は……　その簪、受け取ったのか」
「受け取らねぇよ。首を横に振ってな。それに要らない、要らないと手を振ってな。見ていたら弘兵衛さん、その手を取り、簪を押し込もうとしたよ。卯吉、その後が見ものだったぞ」
「源兵衛、ニヤニヤしてねぇで早く話せ！」
「その女、梅吉か……。梅吉がよう、弘兵衛さんの横っ面をピシャリだ。その後が良かったぜ。啖呵を切った」

Copyright© H.Mitani

「賭場で啖呵切るのはイカサマの時だけだが……」
「話を混ぜっ返すんじゃねぇよ。それに昔を思い出させるな」
「おう、済まねぇ。おい、早く続けろ」
「あたしゃ、こんな物、受け取れないよ。お母ちゃんの形見じゃないのかい。こう言うものは大切にしておくもんだ。返すんだったら金を持ってきな。お母ちゃんに恥ずかしいと思わないのかい。こうだぜっ！」
「おうおう、言うな、梅吉は」
「盆を囲んでいた連中もビックリだ。連中、このようなチャキチャキ女が大好きだ。いよう梅吉屋ッ！　とか掛け声が掛かってな。可哀想なのは弘兵衛さんよ。俯いちゃってよ、何にも言えねぇ」
「そりゃそうだ。梅吉の啖呵は筋が通ってら。で、どうした」
「男のあんたに恥じ掻かせたようだけど、あたしゃ他人の褌で相撲取るような人間は許せないんだよ。付いておいで、説教してあげるからっ、てな。振り向きざま、皆さん、お騒がせいたしましたなんて言いやがって、ニコッと笑い、腰を軽く横に振って挨拶したよ。その気風の良さと艶気には、ゾクッと来たね。ありゃ、いい女だ！」
「そうか。見たかったな。で、二人は何処に行ったんだ。それっきりか」
「馬鹿言うんじゃねぇよ。生駒屋源兵衛に手抜かりはござんせん。サブに後を付けさせている」
「お前も気が利くな。ところでサブは嫌がらなかったか」
「あいつは、おめぇの手助けと言うと喜んでやるよ。可愛い奴よ」
「そうだな、可愛い奴だ」
二人が話しているとサブが戻ってきた。
「帰りやした。あれ、親分も一緒でしたか」
「どうだった」
二人は同時に聞いた。
「えぇ、まさか待合に……　なんて変な勘繰りをしたんですが」
「艶気付きやがって。余計な事を考えるんじゃねぇよ。とは言っても男と女だ、待合か」
源兵衛、羨ましそうな顔で呟く。

Copyright© H.Mitani

「違いますよ。かと思ったけど二人は大川の方に歩いていくんです。シャキッとした姿勢の女と、三歩ほど後ろを背中丸めて付いて行く男。人生の悲哀を感じましたよ」
「何を判ったような事を言ってるんだ。話を続けろ」
「それだけですが……」
「それだけっ。ただ大川に向かったで終わりか」
「川っぷちで向き合い何か話していましたが、どうせ話は聞えませんし」
「当たり前だ。近づいたら気付かれる。サブ、内容は聞えなくても、どんな感じで話していたかくらいは見てきたんだろうな」
卯吉にしては優しい言い方。
「あっ、そうか。そういうことも話さなければ駄目なんですね。二人の姿勢は歩いている時と同じでした。女は人差し指で弘兵衛さんを指しながら、何かしきりに喋ってましたよ。確かにお説教をしているようでしたね」
「そうか、お説教ね。うーん」
二人とも唸りながら顔を見合わせた。サブは気になって仕方がない。
「何か言ってくださいよ。唸ってばかりいないで」
源兵衛が話しだした。
「卯吉、こりゃ、放っておいても良いようだな。弘兵衛さんは、もう賭場には来んだろう」
「そうだな。梅吉は、シッカリ者のようだ。まさか博打を止めさせるために金を貸したとも思えんが。いや判らんな。弘兵衛さんとは同い年か、ちょっと上かも知れんが、弘兵衛さんにとっても良いことかも知れんな」
「何が良いんですか」
「サブ、おめぇにもそのうち判る時が来る。シッカリもんの女は男にとっては神様みてぇなもんよ」
「さて、帰るとするか。サブ、ついでだ、伊銀の旦那にも、この事を伝えてくれ」
「合点、承知の介」
「何を言っているのだ。芝居小屋で覚えたな。ノンビリしてねぇで、さっさと伝えて来い」
サブは、卯吉に用事を頼まれると嬉しくて仕方がない。外に出ると卯吉はサブ

Copyright© H.Mitani

に言った。
「さあ、駄賃だ。受け取れ」
「親分、駄賃なんか要らねぇよ。くれるんだったら給金が貰いてぇ」
「何ッ！　給金だと。サブ、本気か」
「ま、親分、考えておいてくだせぇ」
一端（いっぱし）な口を利き、じゃあ、と言って走っていった。
伊銀は出掛けていた。話を聞いた奈美は、そうなの、そうなの、と繰り返し嬉しそうな顔をした。サブは奈美の顔をまともに見ることができない。眩しいのだ。奈美さんは、ますます綺麗になっていく。

稽古の後の綾と奈美の話題は弘兵衛の事ばかりだった。梅吉姐さんて格好良い。一度会ってみたいとか、弘兵衛さんは姉さん女房の方が似合うとか。もう、二人が一緒になるものと決めている。

あれから三月（みつき）ほどが経った。
お城では、まだまだ書類作りが忙しい。足の踏み場もないほど書類が散乱していた。一部の藩だが、九州の方では農民が騒いだりしている。家光も頭が痛い。こんな時には気晴らしに三太夫を呼ぶ。
「三太夫っ！　三太夫は居らんかっ！」
「へへぇ、三太夫めにございます」
「何だ、そのねじり鉢巻は。まるで蛸踊りだな」
「殿っ、気持ちを引き締めるには、これが一番でございます。殿も如何ですか」
「何を言うか。そんなものを頭に巻かんでも、気持ちは、いつも引き締まっておる」
「ところで……」
「弘兵衛の事だ。梅吉とは一緒に暮らしているのかっ！」
「これはまた、三太夫は一度も殿にお話したことはございません。誰がそのような事を。殿は、何でもご存知で……」
「天下の将軍たるもの、全国津々浦々、女子の腰巻の色まで知らぬことは無いわッ！」

Copyright© H.Mitani

あらま、大きく出たものだとは思ったが、三太夫、口には出さない。
「殿、例えが悪うございます。腰巻とは。せめて襦袢の色とか……」
どうもこの二人が話し出すと、変な方に行ってしまう。
「伊銀によりますと、どうもそうらしいとの事で詳しくは判っておりません」
「何だ、本人に会ってはいないのか。紀州から呼び寄せたのはおぬしであろうが。言ってみれば後見人。そのような無責任なことで良いのか。三太夫、一度行って来い」

話は、一月(ひとつき)ほど前に遡ります。
大川の川っぷち。
「さっきは、悪かったわね。ふふ男の面子、丸潰れ。ところであんた、名前はなんて言うの」
「……」
「ねぇ、名前くらい教えてよ」
「……ご、五谷弘兵衛」
「まぁ、情けない声っ！　もっと下っ腹に力を入れて、はっきり言いなさいよ。五谷……、三河五谷の出なのね」
「いや、拙者は江戸生まれでござる。何代か前は確かに三河五谷のようであるが」
「あ、そう。ところで、さっきの簪だけど、どうしたの」
「おぬしの言った通り、母の形見じゃ」
「あれまぁ、当て推っぽうだったんだけど。あたしが言った事、怒ってるんでしょう。いいわよ何言っても」
「いや、すべて、総てが、おぬしの言う通りじゃ。何故こうなってしまったのか、拙者自身、理解できないでいる。博打などに現を抜かすとはな。それに判らぬのは何故おぬしは拙者に金を貸したのだ。ご存知の通り拙者には返す当てがない」
「貸したものは、ちゃんと同じもので返していただきますよ。あんたが賭場に顔を見せ出した頃、あんた風呂上りのようなスッキリしたいい男だったわ。空ろな感じはしたけどね。それが坂道を転げ落ちるように荒(すさ)んだ様子になっていった。見ていられなかったわ。弱い人間て見ている者を情けない気持ちにさせる」
「それが金を貸した理由か」

Copyright© H.Mitani

「違うわ。あんたは博打に向いてない。あんな打ち方してたら幾ら金があっても駄目ね。全く博才ないわね。貸した訳はねぇ。教えるの止めようっと。自分で考えなさいよ」
「考えたさ。でも、判らない。ただ借りた金をスッた時はゾッとしたがな。金を借りてまで遣る事じゃない。とは言え、借りた事は事実だし、返す当てが無い事も事実。困った。実に困った」
「笑えるね。そこまでしなくちゃ博打を止められないなんてさ。本当にスッカラカンなのかえ」
「嘘偽りの無いスッカラカンだ。姐さんも、とんだ奴に金を貸したもんだ。おぅ、ところで、まだ名前を聞いてないな」
「あら、自分は聞いておいて失礼したね。あたしは梅吉。皆は梅吉姐さんなんて呼んでくれるけど……」
「梅吉姐さんか。とにかく礼を言う。賭場から足を洗う事が出来た」
「ねぇ、仕事は持ってるのかい。何処かの藩で働いてるとかさ」
「し、仕事か。仕事は持っている」
「じゃあ扶持の前借なんか出来ないのかい。上の人に頼んでみたらどうだい」
弘兵衛の頭に三太夫の顔が浮かんだ。その顔は怒っていた。急に寒気がしてきた。
「む、無理だ。それは無理だ」
「そうだねぇ。賭場に入り浸りだったんだからね。今ごろ名札は捨てられてるんじゃないかい」
「そ、そうかな」
三太夫の顔が大きくなる。あの爺(じじい)のことだ有り得る。馬鹿な事をしてしまった。後悔先に立たずとは良く言ったものである。
「困った人だねぇ。とにかく首が繋がっているかどうか確かめなさいよ。繋がっていれば、いずれ扶持が出るでしょうに。問題は、それまでの間ね。食べるものも無いんじゃないの」
「面目ない。一銭もないし米櫃もカラッポ。餓死するのを待つだけの男だ。情けない」
「身内はいないのかい」

Copyright© H.Mitani

「居ない。天涯孤独だ」
「家はあるのかい」
「ある。壁に穴が開いているボロ家がある」
「全くしょうがない人に金を貸したもんだね。あたしも、そろそろ年貢の納め時かもしれないね。判ったわ。当分、家にいればいいわ。但し変なこと考えたりしたら承知しないよっ！　いいわねッ！」
「済まない。そうしてくれると助かる。腹が減って堪らないのじゃ。何でもいいから喰わせてもらえないか」
「喰い意地だけはあるんだね。付いておいで」

帰り道、梅吉は一言も喋らなかった。弘兵衛も、ただ黙って付いていくだけ。
「喜代、帰ったよ」
「姐さん、お帰んなさいまし。あれま、まさかと思っていたけど、連れてきちゃったんですね。しかし汚い男だねぇ。溝鼠の方がまだマシだよ。姐さん、これどうしたんですか」
「仕方なかったんだよ。堪忍しておくれ。貸したものを返してもらうまでだよ。それまでは当分一緒だからね」
「エーッ！　こんな臭いのと一緒ですか」
「何か食べさせておやり」
「残り物しかありませんよ。猫にあげようと思ってたのに……」
弘兵衛は、無言のままだった。
喜代は飯と味噌汁、それに焼き冷ましのメザシを持ってきた。弘兵衛は、飯に味噌汁をぶっ掛けて喰った。旨い。メザシも旨い。
梅吉が聞いた。
「あんた、家に帰っても着替えはないんじゃないかい」
弘兵衛は、飯を頬張りながら頷く。
「困った人だね。喜代、古着屋で買ってきてくれるかい」
「姐さん、着物まで買ってやるんですか」
「ツケとくんだよ。後で、まとめて返してもらうよ」
「そうですよね。それなら私も納得する。じゃ、行ってきますわ」

Copyright© H.Mitani

弘兵衛は飯を喰い終わった。いや旨かったな。
「終わったかい。さあ、湯屋と床屋に行っておいで。これはツケとくよ。サッパリしてくるんだよ」
弘兵衛に金を渡した。

いやはや凄い二人だ。ポンポン、ポンポン。良くもまあ、ああ言葉が出てくるものだ。しかし奇妙なことになってきたな。金を借りた時は、しめたと思ったが。目が覚めたよ。待てよ、梅吉は、それを見越して金を貸したのか。まさか、そんな事が。弘兵衛は、まさか、まさかを繰り返しながら湯屋に行った。それに、三太夫の事が気になっていた。
サッパリした顔で家に戻った。
「ただ今、帰りました」
喜代が出てきた。
「どなたさんですか」
「こ、弘兵衛です」
「エーッ！　あの溝鼠かい。あれま、髭を剃るとイイ男だね。見違えたよ。さあ入んなさいよ」
先程と態度がガラッと変わった。
「姐さん、この人、結構イー男じゃない」
梅吉は弘兵衛を見ようともしないで言った。
「さあ、着替えなさいよ。その汚い着物は洗っとくから」
夜になった。
「あんたは、ここで寝ておくれ」
用意された部屋は玄関の隣の納戸。布団一枚分の広さしかない。
「夜中に変な気でも起こしたら承知しないよ。あたしが大声をあげれば近所の人たちが来るからね。袋叩きに合うよ。判ったね」
弘兵衛は頷くだけである。

卯吉は、弘兵衛が梅吉の家に居るだろうと思っていた。問題は起こすまいとは思うものの十日ほどが経っている。一応、訪ねてみる事にした。

Copyright© H.Mitani

「ごめんよ、誰か居るかい」
「う、卯吉ッ！」
出てきたのは弘兵衛だった。
「やはり此処でしたか。顔付きも元に戻ったようですね」
「良く此処が判ったな」
「何を言ってるのですか。とっくに判っていましたよ。で、金は返したんですか」
「何だ、そこまで知っているのか。まだ返していない。いや返せないのだ。ビタ一文持っていない。次の扶持米が出たら返せと言われている。もっとも扶持米がでればの話だが。登城しなくなって、すでに三月（みつき）程経っている。三太夫殿は何かあれば知らせると言っていたが。拙者、家には帰っていない。三太夫殿にとっては行方知らずのようなもの。今更、顔を出すのも何だし」
「では、このまま黙っているお積りですか」
「いや、そうも行かんし。馬鹿な事をしてしまったものじゃ。自分が情けない」
「梅吉とは、うまく行ってるんで……」
「うまく行くもクソもない。まるで居候のようなものじゃ。好きなことをしていろと言うが、町を歩くのも気が引ける。飯を食わせてもらって納戸で寝るだけの毎日よ。まるで人質のようなものだ」
「そうですか。じゃあ何もないんですか」
「卯吉、さっきから何を聞きたいのじゃ」
「いえね、男と女が同じ屋根の下ですから、まあ何と言うか……」
「馬鹿な事を言うものではない。梅吉は、身持ちの良い女。軽はずみな事はしない。それに拙者は、所詮ツツジじゃ。金を返すまでの間、寝泊りしているだけよ」
「ツツジねぇ。源兵衛の言葉が余程気になったようですね」
「その話も知っているのか。何だか女にも興味がなくなってな。拙者は、死ぬまで独り身よ」
「考えすぎですよ弘兵衛さん。世の中、何が起こるか判りません」
「もう良い。卯吉、伊銀や綾殿、ご隠居たちに宜しく伝えてくれ」
「三太夫様には伝えなくても良いのですか」
「いずれ進退を伺いに行く。気が重いが」
「また顔を出しますよ」

Copyright© H.Mitani

卯吉は出て行った。弘兵衛は畳に寝転びため息をついた。

その晩、酷い嵐が来た。雨漏りだけでなく壁板が剥がれた。

翌日、弘兵衛は家の修繕をした。久しぶりの仕事である。体を動かし何かを遣るのは楽しい。

そんな活きいきとした弘兵衛を、梅吉は、じっと見つめていた。

「あんたの刀を見たけど立派な刀だねぇ。どんな仕事してたんだい」

「大した仕事ではない。それに、刀は父親の形見だ」

「仕事するのが好きなんだね」

「まぁな。数ヶ月前から閑になってな。忙しいのには慣れているが、閑には慣れておらん。博打に走ったのも閑が原因。もう一つ訳があるのだが、ま、そっちの方はどうでも良いが」

「そうかい、そうだったのかい。もう一つの訳も知りたいけど。大工遣ってる時のあんた、結構、良かったよ。あんな活きいきしたあんた見たの初めてだよ」

梅吉の顔には、女の表情が出ていたが弘兵衛は気が付いていない。

梅吉の弟子は大勢居た。稽古は一日おき。三味線に小唄、端唄。年寄りから若い女、男。稽古は、結構厳しい。三味線を弾く手がおかしいと扇子でピシャリと遣る。稽古の間、弘兵衛は外に出ている。家にいると気が散ると梅吉が言う。

近所で変な噂が出そうになったが、喜代が一緒に暮らしているし、お喋りな喜代が何でも話すため噂は消えた。見栄えの良い弘兵衛は、お上さん連中の受けも良い。可哀想になどと同情する者もいる。だが、以前の弘兵衛とは違っていた。お上さん連中とも控えめに話すようになっていた。

弘兵衛は、三味線を習い出していた。筋は良い。五谷一族の血が流れているからかも知れぬ。弘兵衛に稽古を付ける時の梅吉は厳しいが、目には愛おしさが溢れていた。梅吉は弘兵衛を好きになっていた。

しかし、弘兵衛の頭には、常にツツジが咲いていた。

「梅吉、拙者が扶持を貰えなくなっていたらどうする。当分、金は返せない」

「そうなった時は、その時。ずうっと此処に居ればいいわ」

「えっ！　此処にか」

「どんな仕事でも良いじゃないか。せっせと稼いで金を貯めなよ。いずれ返せる

Copyright© H.Mitani

でしょうに」
「どんな仕事でもと言ってもな。棒振りでも良いのか。浅蜊、蜆っ！」
「立派な仕事だよ。それであんたが楽しく遣ってくれれば、あたしは嬉しいよ。あんたの活きいきしている姿なら、毎日でも見ていたいよ」
「梅吉、おぬし……」
「な、何だよ、目をおっぴろげちゃってさ。まったく鈍いんだから、やんなっちゃうよ。もう少し手が早い男だと思っていたのに」
弘兵衛は、皐月の盆栽を思い出していた。ひょっとして皐月に……。
その夜、二人は初めて床を一緒にした。
翌朝、弘兵衛は遅くまで寝ていた。
「さあ、いつまで寝ているつもりだいっ！　いい加減に起きたらどうなの」
「いや済まん。久しぶりだったので、ちょっと疲れた」
「馬鹿な事言ってんじゃないよ。何が久しぶりだ。こっちだって忘れていたよ。さぁ、起きてちょうだい。朝飯は抜きだよ。一緒に食べない時は抜くからね。喜代だって大変だよ。あんたに話があるんだけどいいかい。金を返すまでは此処に居てもいいけど自分の食い扶持くらいは自分で稼ぎなさいよ。あたしは、あんたを養うつもりなんて、これっぽっちも考えちゃいないからね。逆にあんたに養ってもらうつもりもない。もっとも女を養うだけの甲斐性があったとしての話だけどね。判ったかい」
これだから女は判らない。何時(なんとき)か前までは、あんなにしおらしかったくせに。朝になれば元に戻ってしまう。
「わ、判ったよ」
とは言ったものの、弘兵衛は腕組みをして考える。何をすれば稼げるのか見当がつかない。困った。本当に困った。
梅吉も喜代も、すでに弘兵衛を同居人と思っている。喜代などは姐さん良かったねなどと言っている。弘兵衛も満更ではない。女と暮らすのも良いもんだな。しかし、食い扶持。困った。このままでは、ただの紐。
三太夫はウキウキと城を後にした。まず、ご隠居を訪ねることに。弘兵衛の居場所は伊銀から聞いている。

Copyright© H.Mitani

「ご隠居は居るか」
「あら、三太夫！　久しぶりね。どうしたのよ、額に筋がついているわ」
「鉢巻の後がついたのじゃ。忙しいのじゃ。とにかく忙しい」
「じゃあ、今日は遊びに来たんじゃないんだ。じっちゃま、三太夫が来たわよ！」
「これはこれは、さあさあ、上がってください。ところで……」
「弘兵衛じゃ。殿が見て来いとおっしゃってな。こうして出かけてきた。ご隠居は状況を聞いているのか」
「まあ、薄っすらとは聞いております。綾は二人は夫婦になると言っておりますが」
「綾ちゃん、本当か」
「まだ梅吉姐さんにも会ってないし、弘兵衛さんと直接、話した訳でもないんだけど。勘よ、女の勘！」
「女の勘ね。ところで綾ちゃんは幾つになる」
「やぁね、女に歳を聞くもんじゃないわ。でも、もう立派な女よ。見れば判るでしょう。艶気もあるし」
「艶気ねぇ」
爺さん二人、顔を見合わせ微笑んでしまう。
「梅吉とやらは結構身持ちもよく、シッカリものと聞く。今から行って見ようと思っておる。弘兵衛が何を考えているかも知りたいしな」
「あら、私も一緒に行きたい。いいでしょう」
「そうじゃな。女の勘が当たっているかどうか……。一緒に行くか」
綾は、梅吉に会えるのが嬉しくて仕方がない。どんな女なんだろう。

庭は、綺麗に掃き清められていた。小さく古びてはいるが洒落た家だ。所々に手直しの後がある。六畳二間に四畳半一間、それに台所といったところか。
三太夫が声を掛ける。
「ごめん。どなたか居るかっ！」
声がしない。はて留守か。
「ごめん。どなたか居るかっ！」
「相やしばらく……」

Copyright© H.Mitani

久しぶりに聞く弘兵衛の声。元気そうな声だ。
弘兵衛、玄関に来るなり凍ってしまった。
「さ、さ、三太夫様ッ！　そ、そ、それに綾殿ッ！」
言うなり玄関にひれ伏した。余程驚いたのか、ひれ伏す時に頭を床にぶつけゴツンと音がした。そのまま頭を床に擦りつけ搾り出すような声で言った。
「此度は、此度は……この弘兵衛。不始末の限り、お、お許しくだされ。如何様な、如何様なご処分も、ご処分もお受けいたす所存」
まるで二度烏。
「弘兵衛、何はさて置き、上がっても良いか」
「ははあ、ど、どうぞこちらに」
弘兵衛は二人を六畳間に通した。部屋とは、住んでる人間の心境を表すもの。隅々まで掃除が行き届き、床の間には可愛い花が活けてある。こざっぱりした部屋だ。
「弘兵衛、元気そうだな。殿もお気を使われておる。どうしておるのか、とな」
「ははー」
弘兵衛、今度は畳に頭を擦り付けている。顔を上げられない。
「まぁまあ、そうシャッチョコ張らず、顔を上げたらどうだ。話にならん」
「ははー」
弘兵衛、ちょっと顔を上げた。
綾は、弘兵衛の変化に気付いていた。弘兵衛さん、落ち着いた感じになっている。きっと梅吉姐さんのお陰ね。早く姐さんに会いたいな。
「そなた、先程、不始末とか言っておったが、殿とか拙者に、何か不始末を仕出かしたのか」
「はは、登城もせず、居場所もお伝えしておりませんでした」
「登城については、拙者が遊んでおれと言ったため。居場所など、いちいち伝えなくとも調べればすぐ判る。不始末とは言えん。博打でかなり金を失ったそうだが、それとておぬし自身の問題。幕府の金を使い込んだというのであれば話は別だが……使い込んだのか」
「め、滅相もございません。いくら落ちぶれたとは言え、この弘兵衛、そ、そのような事を言われるとは、情けなく存じます」

Copyright© H.Mitani

「ほう、落ちぶれたのか。見たところ血色も良いし何処が落ちぶれたのだ」
「お、女に喰わせて貰っております」
「ほう、居候か。それは情けないのう」
「いや居候ではござらん。拙者の食い扶持は、自分で持つことになっております。ただ、今は持ち合わせがございません。従って、借金が溜まる一方で困っております」
「わ、はっはー。良いな。梅吉は余程のシッカリ者と見える。弘兵衛、肩身が狭いのであろう。扶持米の前払いをしてやっても良いぞ。殿も後一月ほどで外出できるようになる。さすれば仕事だぞ。それまでは遊んでいても良い。弘兵衛、おぬしは閑の使い方も知らんのか。少ない扶持を博打なんぞに使いおって。この愚か者が！」
「ははあー、痛み入っておりまする。三太夫様、ほ、本当に仕事を遣っても宜しいのですか。嬉しゅうございます。地獄で仏の気持ちでございまする。それに前借りも助かりまする」
てな話をしていると、玄関の方から、今帰ったよと声がした。
梅吉が帰ってきた。玄関に立派な草履と女物の草履。あらっ、お客様？　などと考えながら部屋に来た。
「お客様でしたか、これは失礼いたしました。梅吉でございます」
両手をつき挨拶をした。
「あらっ、お茶もお入れしてないなんて……。手伝いの者が出掛けておりますし、この人は、そこまで気が廻らない。今、お茶を入れますので……」
立とうとすると三太夫が口を開く。
「貴女(あんた)が梅吉姐さんか。拙者は、三太夫と申す。こちらは綾殿だ。宜しくな。茶は良い。弘兵衛との話も終わった。そろそろ暇(いとま)と思っていたところじゃ」
三太夫と綾は、しげしげと梅吉を見た後で顔を会わせた。
成る程なあ、成る程ね。口には出さないが二人の思いは同じであった。
「弘兵衛、三、四日経ったら顔を出すように。良いな。それから……梅吉姐さん、弘兵衛の事、末永く宜しくな」
す、末永く……。今度は弘兵衛、梅吉が顔を見合わせて目を丸くした。
帰りしな、二人はニヤニヤのし通しである。

Copyright© H.Mitani

「綾、梅吉はイイ女だな」
「姐さんはイイ女。女の私にも判るわ」
「弘兵衛は、果報者じゃ」
「弘兵衛は果報者」
「これ、人の言うことを真似てばかりいるのではないっ」
二人は声を上げ、笑いながら道を急いだ。

残された二人は、何か奥歯にものが挟まったような妙な気分でいた。頭にあるのは三太夫が言った末永くの言葉である。梅吉にも言葉が持つ意味は判る。しかし、何故あんな事を言ったのかが解せなかった。そうか、あの人は、あたしの方が二つほど歳上だし、こっちが三行半を叩き付けたとはいえ出戻りだってことをご存知ないんだ。勘違いしている。
「あ、あんた。あの三太夫ってお方は何者」
「拙者の上役じゃ」
「へぇ、あの人が……。で、どんな話をしてたの」
「一月ほどで殿の外出が始まる。仕事に戻れと仰ってくれた。それに、扶持の前借りも許してくださった。涙が出るほど嬉しいお言葉だった」
「殿の外出？　あんた徒侍なのかぃ」
「そうじゃ。梅吉、三太夫殿のお名前は竹林様だ」
「竹林？　さっき三太夫って……　竹林三太夫っ！　あんた、ちょっと待ってよ。竹林様と言えば、あの将軍様お傅（もりやく）役の竹林様かいッ！」
「そうだ」
「じゃあ、殿って家光様ッ！」
「家光様じゃ」
「エヘーッ！」
梅吉は、本当に腰を抜かし、両手を後ろにして仰け反ってしまった。目と口は、開きっぱなし。弘兵衛も思案顔。しばしそのままの状態が続いた。梅吉は頭が良い。総ての状況を把握した。
「あんた、扶持の前借りもできるし仕事にも戻れる。あたしに金を返して元に戻るんだね」

Copyright© H.Mitani

厳しい表情である。姿勢もシャキッとしている。覚悟は出来た。所詮一陣の風が吹いたようなもの。あたしも元に戻れば良い。

「で、何日、壁に穴の開いたボロ家に戻るんだいッ。どうせ戻るんだったら早い方がいいよ。長く居ると、こっちだって情が移っちゃう。あたしゃ、そういうの嫌いだよ」

「梅吉、拙者は此処にズーッと居たいのだが駄目なのか。三太夫殿も二人を認めてくれた。三太夫殿は、今日いろいろと話されたが、拙者が一番嬉しかった言葉は、末永くの一言じゃ。梅吉、此処に置いてはくれぬか。おぬしと一緒に居たいのだが」

梅吉は、グラグラと眩暈がした。気を失うのではないかと思えるほどの眩暈。周りの景色は消え、見えるのは弘兵衛だけ。

「あんた、何が言いたいの……」

眩暈なんかしてられない。何かが起ころうとしてしている。頭を振って気を取り戻した。

「さあ、男でしょうがっ！　廻りくどいこと言ってないで、はっきり言ってちょうだいッ！」

「そうポンポン言わんでくれ。拙者は夫婦になろうと言っているのだ。拙者では駄目か」

「夫婦……、あたしがあんたの女房……。あんた本気かい」

「おぬしが駄目といっても、拙者は既に決めている。なかなか言い出せなかったが、さっきの三太夫殿の言葉で決心がついた。梅吉っ！　こんなに晴れ々れとした気持ちになったのは初めてだ。スッキリした。何だか世の中が明るくなったようじゃっ！」

梅吉は、じっと弘兵衛を見つめている。その大きく開いた美しい目に涙が溜まっていった。そして溢れでた。ボロボロボロッ！　目も大きければ涙も大きい。梅吉が遣る事は何でもハッキリしている。中途半端がない。着物に涙が零れ落ちるが全く気にしない。

「おまえさん。あたしは、おまえさんの女房になるんだね」

梅吉は、あんたではなく、おまえさんと呼んだ。これが梅吉の答えだった。

何時戻ったのか、喜代が障子の影に居た。しきりに着物の袖で目頭を押さえて

Copyright© H.Mitani

いる。ついでに鼻水も拭いている。
弘兵衛は夢心地。弘兵衛にとって一世一代の事だった。そんな弘兵衛の気持ちなどそっちのけ。梅吉は現実に戻っている。
「おまえさん、夫婦になるに当たって、言っておきたいことがあるんだけど、いいね」
表情、口調まで元に戻っている。女は猫の目に例えられるが、よくもまあ、このようにコロコロと態度を変えられるものだ。その点、男は純情一途。弘兵衛、芝居などでは、ここで二人は手を取り合い、ヒシッと抱き合うはずなのに変だな……　などと戸惑っている。
「あたしは今まで通り稽古を続ける。この前も言ったことだけど夫婦になっても、互いの食い扶持は互いに持つようにするからね。おまえさんに養ってもらうなんてヤダよ。そんなことになったら気持ちに甘えが出ちゃう。芸事の腕も落ちちゃうよ。あたしが先に逝くんだったらイイけれど、おまえさんが先に逝ってごらん。あたしは路頭に迷うことになる。そんなの嫌だね。月々の賄いは、喜代に見てもらうよ。喜代は金に厳しいからね。それに、おまえさんにも家の用事をしてもらうからね。そうだね、庭の掃除、手入れはおまえさんに遣ってもらう。花や植木が好きなんだから、ちょいうどいいんじゃない。それに……」
弘兵衛は聞いているが、次から次へと良くもまあ、話が出てくるものだと感心している始末。どこかに台本でも用意しているのではと勘繰ってしまう。しかし、話の中身は望むところである。
「わ、判った」
弘兵衛、言われるままでは男の面目に関わると口を開く。
「梅吉、賄いの額は、どうするのじゃ。互いの実入り額で按分するのはどうじゃ。拙者の方が多くなると思うが、まぁ勘弁してやる」
「ほほほ、強がり言ってさ。まぁ、そんなところが可愛いんだけどね。おまえさん、あたしのお稽古は高いんだよ。高いので評判。でもお弟子さんは大勢来てくれる。あたしは稽古に手を抜かないからね。一端（いっぱし）になるまでキチンと遣る。皆、良く付いてくる。それが嬉しいんだけど……。話が横道に行っちゃったね。おまえさんは将軍様の警護役。でも徒侍だろう。お扶持の高なんて知れてるよ。あたしの方が実入りが多いと思うよ。後で喜代に月々幾ら位要るか調べさせるよ。あ

Copyright© H.Mitani

たしの方が多く出したら、おまえさんも気になるだろうから……　折半でいこうよ、ねぇ」

提案したのは良かったが、結果はギャフンである。言われてみれば徒侍の扶持などは大した額ではない。梅吉の弟子の中には大店の旦那、ご新造もいる。皆、身なりが良い。金のなさそうな弟子も居るが、そんな連中からは大して取ってないようだ。頷く以外にない。

「判った。半々にするか。梅吉、この辺で話し合いを終わらないか。もう堪らんよ」

「何言ってんだよ。一番、肝心なことが残ってるんだよ」

「まだあるのか……」

弘兵衛はゲンナリしてしまったが、一番肝心な事と言う。覚悟を決めて座り直した。

「おまえさん、女にとって妻という一文字は宝なんだよ。いいかい、あたしは一度、捨てたけど今度は違うよ。手に入れた以上、何があっても手放さないよっ！　いいねっ！」

まるで脅迫するような形相。弘兵衛は頷くだけ。しかし、心の中で呟いた。当たり前だ。拙者も、お前を手放さない。お前の居ない人生など考えられん。

拙者、皐月になれたんだんだろうか……。こんなイイ女房が、アー言うんだ。見ろッ！　拙者にも図太い茎があったんだ。

こうして江戸時代とは言え、独立採算制をとる奇妙な夫婦が出来上がった。

（四）白川夜船

伊銀が、腕組みをしてしかめっ面で歩いている。すれ違う者たちの挨拶にも気付かぬ様子だ。

この件に関しても奉行は、同心を使ってはならぬと言った。確かに同心たちは幾つもの訴えを抱えているが、その同心たちから報告を聞き、指示を出すのが与力の自分である。それだけでも忙しい。同心たちは、お手伝いをと言ってくれるが、奉行の命令には従わざるを得ない。忙しい中での捜査である。しくじりを起

Copyright© H.Mitani

しかねない。そうなれば伊藤家の恥になる。いや下手をすれば、お役御免である。
伊銀は、奉行の真意を計りかねていた。

「伊銀の旦那もついてねぇやな。半年で同じような事件が三件だ。聞きゃあ新婚だって言うじゃねぇか。たまたま南町の月番。ま、仕方ねぇな……」
「しかし、盗賊も大(でえ)したもんだぜ。大店狙いでゴッソリって話だ。しかも人を傷つけてねぇ。よっぽどな連中だぁね」
「俺たち貧乏人には関わりのねぇ話だ。この盗賊団、白川夜船って渾名が付いたらしいな。こりゃ見ものだぜ。南町と白川夜船の知恵比べだ」
ま、いつの時代にもこのような輩はいる。
瓦版も囃子たてる。
「さあさぁ、白川夜船だヨー！　今度の被害者は呉服問屋の波多野屋だ。持っていかれたヨー、ゴッソリだー！　千両箱が十三個。金目の掛け軸、焼き物、置物だぁ。波多野屋には何も残ってないよお。可哀想に商売道具の反物なんざぁ影も形もない有様だ。ついでにご新造の錦の腰巻まで持っていかれたよお。いやいや、これは冗談、冗談。さあさぁ、瓦版だ！　詳しく書いてあるよ。もっと知りたきゃ、買ってくれぇ！　誰も知らない事まで書いてあるよう！　さぁ、買ってくれぇ！　買ってくれ！」

伊銀は、苦々しげに瓦版の掛け声を横目に先を急いだ。皆は集まっているはず。卯吉が、どんな情報を持ってきていることやら。伊銀の家では卯吉、松造、仙吉が伊銀を待っていた。
「待たせたな。奉行が五月蝿いのじゃ。どうなっている、どうなっているのじゃとな。ここ数ヶ月、顔を見るとヤイノヤイノと堪らん。一言ぐらい、祝言、良かったなくらい言ってくれても損にはならんものを。アーは、なりたくないものじゃ」
三人は黙って聞いているが顔つきは暗い。
「ところで卯吉。どのような状況じゃ。話してくれ」
「へぇ、襲われたのが呉服問屋の波多野屋。前の二件と同じ手口です。その前が金物問屋緑青堂(ろくしょう)。一件めが米問屋伊東屋。この三軒の大店は、特別恨みを買う

Copyright© H.Mitani

ような節もありません。もっとも、さらに詳しく調べる必要はあると思いますが」
卯吉は息を継いで話を続けた。
「事件は三件とも雨の夜。店の者が寝静まっている間にゴッソリ持っていかれています。雨で消えかかっていますが、門の前には大八車の轍（わだち）らしきもの。大八車の数は、二、三台。部屋には盗賊の泥のついた草鞋の跡がクッキリ残っています。人数は十数名。店の者は、これだけの事が起こっているのにも関わらず、誰一人として気付いた者はおりません。まさに白川夜船……。大店ですから屋敷も広い。雨の夜中、周りの家の者も気付いていません。大八車が二、三台です。見たものがと思い聞き込みましたが、やはり雨の夜中、誰も見ていません。多分、バラバラに逃げたと思われます。半年前の事件の後、盗品を売りさばくはずと思い、古道具屋などにも触れを出していますが、それらしき物は出ていません。ひょっとすると江戸以外に持ち去っているとも思われます。しかし、あれだけの人数でありながら誰も目を覚まさないとは解せません。白川夜船とは、良くもつけた渾名……」
今回の手掛かりも今までと同じ。残していったのは足跡だけ。伊銀もイライラしている。卯吉が呟く。
「何故、店の者が気付かないのか……」
「卯吉っ！　それだけかっ！」
「へぇ、これだけで」
「店の者は、二、三十人。十数名の盗賊が物を運び出すのじゃぞっ！　物音はかなりのもの。誰も気付かぬなどと言うことがあろうはずがない。卯吉ッ！　こんな戯（たわ）けたことが起こったと申すのかっ！」
卯吉の顔色がサッと変わった。
「伊藤銀之助様！」
卯吉が、苗字名前で相手を呼んだ。しかも、様を付けて。今度は三人の顔色が変わった。伊銀は、しまったと思ったが後の祭り。卯吉がこのように相手を呼ぶのは、激怒した時に決まっていた。松造、仙吉は下を向いたままで事の成り行きを心配そうに伺っている。
「伊藤銀之助様、今、何とおっしゃいました。今一度、おっしゃっていただけませんか」

Copyright© H.Mitani

「……」
「さ、今一度」
謝って済むことではない。卯吉の言う通りにせざるを得ない。
「せ、拙者は、拙者は誰も気付かぬはずはないと……」
「へぇ。で、その後でございますが」
「このような戯けたことがあろうはずがない……」
「どうも変ですなあ。私が聞いた内容と多少、違うようですが。奉行所に勤める者、物事は正確にお願いしたいもので」
「判った。こんな戯けたことが起こったと申すのか、と言ってしまったようじゃ」
「確かにそうおっしゃいました。もっとも卯吉の一言が抜けていますが。私は、私情を挟まず在りのままを述べただけ。まずは、これが目明しの本分と心得ております。私が現場で寝込んでいたのであれば先程のお言葉に異存はございません」
皆、押し黙りモジモジしているだけ。誰がこの場を取り持ってくれるのだろう。少なくとも、ここの四人にはできない。気まずい空気が重く漂っているだけである。

そんな時、こちらは弘兵衛と梅吉。
弘兵衛が片肘を付いて寝転んでいる。今日は梅吉の稽古もない。梅吉は繕い物をしている。喜代は休みである。家には二人だけ。
良いものじゃなあ。こうして二人でノンビリとしているのも。これが幸せというものかのう。弘兵衛、まどろんでおります。
「梅吉、我々は夫婦になったのだな。なあ、梅吉」
「おまえさん、それがどうしたって言うんだい！」
きつい言い方である。
「い、いや別に何と言うことはないが……。梅吉っ！　もう少し優しそうに話したらどうなんだ」
「あら、失礼しました。こう言やぁいいのかえっ。そうだねぇ、二人は夫婦になったんだねぇ。あたしゃ、あんたとこうして二人でいる時が一番だよ。幸せな毎日。ねぇ、手でも握っておくれ」

Copyright© H.Mitani

弘兵衛が手を握ろうとすると、梅吉がピシャリッ！
「そんなに閑なら庭でも掃除しておくれっ！」
「これだものなあ。夜は、しおらしいくせに。昼間はこれだっ！　可愛いさも何もありゃしない。梅吉、何とかならんか」
「何とかって何さ。じゃあ、昼間も夜のようにしていれば良いのかい。それとも一日中、昼間のようにしていようか。どっちがイイんだい。えっ、おまえさん」
「そう杓子定規にならなくても良いではないか。まあ、何と言うか、中間があっても良いのではないか」
「馬鹿お言いでないよ。あたしゃ、その中間てのが大嫌いなんだからねっ！　さあ、グダグダしてないで掃除をしなさいよ」
弘兵衛、しぶしぶ庭にでて箒を持った。
しかし良くもまあ、あのようにポンポン言葉が出るものじゃ。考えてみれば拙者も武士の端くれ。昼間からベタベタするのは好まん。これで良いのじゃ。これで良い、などと苦し紛れに納得している。
弘兵衛は、皆に梅吉と夫婦になったことを知らせていない。知らせたのは家光と三太夫だけ。先日、久しぶりに登城して二人に会った。家光には自らの怠惰な日々を詫びた。家光も三太夫と同じ事を言った。幕府に迷惑は掛けていない。書類に目を通さなければならない。今少し時間が必要だ。梅吉とノンビリしていて良い。
弘兵衛は、皆を招いて祝言の宴を持ちたくて仕方がない。しかし、梅吉は、いちいちそんな事をしなくても、もう皆知ってるよと取り合わない。要するに弘兵衛は梅吉を自慢したくてウズウズしているのだ。何かと言うと梅吉を外に連れ出そうとする。梅吉は弘兵衛の魂胆を判っているが、そんな事、照れくさいと思っている。弘兵衛には用事もないのに歩いたって何になるのさと言うのみである。
弘兵衛は、庭を掃きながら口実を考えた。そうか、稽古稽古と部屋に閉じ篭っていては体に悪い。これだな。
「梅吉っ！」
庭から声を掛けた。
「何さ、今、手が離せないんだから……」
「まあ、針を置いて聞きなさい。おまえは近頃、体を動かしていない。稽古が休

Copyright© H.Mitani

みというと、そのように繕い物だ。閉じこもっていては体に良い訳がない。今日は天気も良い。体を動かすのには絶好な日和。どうじゃ、散歩にでも出掛けてみては……」

「あら、いい事に気が付いたねえ。そう言われればそうだね。たまには体を動かした方がいいかも知れないね。ちょっと待っておくれ。身支度するから」

弘兵衛、急にニコニコしだしたが、素直すぎる梅吉が、ちょっと気になる。

「待たせたね。さあ、行こうか」

梅吉は、浴衣姿。衣紋をちょっと抜き、団扇を片手に下駄をつっかけた。弘兵衛も、そわそわと外に出た。

通りに出ると梅吉は、団扇で煽ぎながら下駄をシャカシャカからげ、腰を左右にちょっと動かしながら調子よく歩き出した。実に小粋な早歩き。いや、早すぎる歩き方。弘兵衛が望んだのは、そぞろ歩き。早歩きの梅吉に追い付こうと歩き出す。徒侍は歩くのも速い。しかし、今は仕事ではない。どうしても梅吉の二、三歩後を歩くことになる。傍から見れば、どこかの姐さんの後ろに付いて歩く、用心棒のような有様。どうも、どこかが違う。これでは梅吉を見せびらかす事にはならない。

「う、梅吉っ！　ちょっと待ってくれ。おいっ！　止まってくれぬか」

「あら、どうしたの。顔付きが変よ。さっきまでニコニコしていたくせに」

「あのなあ、散歩だぞっ！　そうシャカシャカ急ぎ歩きでは散歩ではない。もう少しゆっくりと歩いたらどうだ」

「体を動かせって言ったのは、おまえさん、あんただよ。あたしは運動のつもりだからね。デレデレ歩いたんじゃ、何の役にも立たないじゃないか。これでも遅いくらいだよ」

「それはそうだが。それにな、拙者は武士。しかも、おまえの亭主だ。おまえの後ろを歩いていては男の面子が立たん。拙者の後ろを歩いたらどうだ。夫唱婦随という言葉もあるではないか。三歩後ろ、いや、二歩、一歩、いやいやいや、たとえ半歩でもよい。拙者の後ろを歩くことは出来んのか」

「ヤダネ！　あたしは人様の後ろに付いて歩くなんて、真っ平ご免。そんなに言うんなら、おまえさんが、あたしの前を歩けばいいんじゃないのかい。いいわよ、半歩でも一歩でも三歩でも」

Copyright© H.Mitani

弘兵衛、言われてみればその通り。なんじゃ拙者が前を歩けば良いのか。何故、今まで気付かなかったのか。
「そうだな。そういたそう。では行くか」
一の二の三ー！　弘兵衛が梅吉のちょっと右前に位置し歩き出した。驚いた事に梅吉は、先程よりも早い歩き方をした。これには弘兵衛もビックリ。横目でチラチラと梅吉を見遣りながら一所懸命歩く。まるで駆けっこのような有様である。すれ違う者ちも目を見張ってこの二人をを見つめる始末。中には頑張れよ！などと掛け声をかける者もいる。何とも奇妙な夫婦である。互いに意地の張りっこ。負けられない。三町ほど歩いた頃、さすがに二人とも息が上がってきた。
「ねぇ、おまえさんっ！　いつまでこんな馬鹿々々しい事、続けるんだいっ！ねぇ、おまえさんたらっ！」
梅吉の言葉で弘兵衛、ズッコケてしまった。
「何だと！」
と言って急に立ち止まり、振り返えったが勢い余ってスッテンどうと転んでしまい、いやと言うほど膝小僧を擦り剥いてしまった。
「痛てー！」
「何、遣ってんだろうね、この人は！　さあ、起きなさいよっ！」
梅吉が手を差し伸べた。その手を掴んで弘兵衛は立ち上がった。
「馬鹿々々しいとは、どう言う事だっ！　もとはと言えば、おまえが早歩きしたせいではないか。お陰でこの通り……あぁ、血だらけだ」
「あれまあ、血が流れてるよ、おまえさん。痛いかい？」
「当たり前だろう。おうイテー！」
「しょうがないねぇ」
梅吉は、懐紙を出して拭いてあげた。衣紋から覗く背中は汗ばんでいる。
二人は通りの真ん中で向き合った。梅吉の額や頬、ちょっと覗いた胸には微かに汗が流れている。火照った体からは、えもいわれぬ女の艶気が……。汗ばんだ梅吉の目が弘兵衛を見つめている。弘兵衛は、天にも昇った気持ちになった。呆けた顔の見本のような顔付き。さすがに梅吉も呆れてしまう。
「おまえさん、そのデレデレした顔、何とかならないのかぇ。皆がニヤニヤ笑っ

Copyright© H.Mitani

て見ているよ。みっともないじゃないか。キリッとしておくれ。武士の端くれなんだろうっ！」
梅吉が弘兵衛の腰を突っついた。弘兵衛、夢から覚めたような顔。
「いや、そうであった。拙者は武士。おまえの亭主じゃ。往来の真中であった。周りの者に示しが付かん。で、梅吉、散歩はどうする」
「どうするたって……　折角、こうして二人で外に出たんじゃないか。もう少し歩いてみたいわ」
「そ、そうか。拙者の膝は、もう何ともない」

梅吉は、弘兵衛の半歩後ろに付き、そぞろ歩きを始めた。団扇でゆったりと煽ぎながら、ちょっと腰を振って歩いている。この腰の振り方が何とも男心を不安にさせる。弘兵衛もなかなか見栄えの良い男。艶気たっぷりの梅吉との二人歩きは注目を集める。
「おまえさん、こうして歩くのもイイもんだねぇ。まるで、ちゃんとした夫婦のように見えるじゃないかぇ」
「……のように見えるのではなく、ちゃんとした夫婦ではないか。な、たまには拙者の言うことも聞くべきだと思わんか」
「ふふ、すぐその気になるんだから。ま、そこが可愛いのかも知れないけどね」
などと戯言を言いながら歩いている。
ふと見ると遠くの方からサブが腕組みをしながら歩いてきた。通り過ぎようというのに二人に気付く様子もない。弘兵衛、よせば良いのに声を掛けてしまった。
「サブっ！　おい、サブっ！」
「あれ、弘兵衛さん。梅吉姐さんも一緒ですか。珍しいですね」
「何を言うか。別に珍しくなどない。ところで何処に行くのだ」
「そうそう、それを忘れてた。弘兵衛さんの所に行く途中でした。ちょうど良かった。弘兵衛さん、伊銀の旦那が来てくれって言ってます」
「なに伊銀が。そうか白川夜船だな。サブ、そうであろう」
「えぇ、皆、雁首揃えて唸ってます」
サブは、近頃卯吉と一緒にいることの方が多くなっている。
「そうであろう、そうであろう。やはり拙者が居ないとな、話が進まんだろう」

Copyright© H.Mitani

弘兵衛、梅吉をチラチラ見ながら鼻をピクつかせ、自慢気に話す。
「何だか、猫の手も借りたいくらいだと言ってましたが……」
「猫の手だとっ！　何と言うことを」
「冗談ですよ、冗談。一緒に来てもらえますか」
「うぅん、今日は梅吉と一緒に居るはずだったが、仕方ないな」
「おまえさん、行くのかい。今日は一日中、一緒と言ったのはおまえさんだよ。あたしを一人にするのかい」
梅吉、弘兵衛の肩に両手を置き、右足をちょっと上げて流し目で話す。駄々をこねているのだ。弘兵衛は、またニヤケ顔になった。
「そ、そうであった。サブ、そう言うことだ。伊銀には明日にでも顔を出すと伝えてくれ。済まんな」
サブ、どうも変だなと思っていると、梅吉が弘兵衛の尻を叩くのを見た。
「何、言ってんのさっ！　さぁ、行っといで。人の冗談を、すぐに真に受けちゃうんだから、この人はっ！」
弘兵衛、頭を掻きながら、
「サブ、行くか」
二人の後ろ姿を見遣りながら梅吉姐さん一人ごち。
『ふふ、おまえさんっ、一所懸命遣んなさいよ。おまえさんが活き々きと動き回るのを見ると、こっちまで嬉しくなる。好きだよっ！　おまえさん。ふふ、イイもんだね、夫婦って。今晩は鰻でも奮発しちゃおうかしら……』

♪　なんて言いながら、下駄をからげてウキウキと、団扇片手にイソイソと、腰を振り々り調子良く、ちょっと早めの足取りで、江戸の通りを歩いてく。ニコニコ微笑む顔からは、幸の一文字揺らいでる。通りすがりの男たち、嫌がおうにも気になって、歩く姿を見つめてる。お調子者も中に居て、姐さん、姐さん、どうしたの。よっぽど良い事あったのかい。よせば良いのに声掛ける。チラッと目をやる梅吉姐さん。ふふふと笑って言い返す。あんたになんか教えるもんかい。あたしゃこれから湯屋行って、亭主の帰りを待つんだよ。あんたも、たまには湯屋行って、少しはサッパリしなさいよ、それじゃあ、犬も寄り付かない。これまた厳しいお言葉で、あんたの亭主が羨ましい。ああ肖りたい肖りたい。いくら言

Copyright© H.Mitani

っても無駄なこと、あたしゃ亭主に惚(ほ)の字だよ。それじゃあ、これでさようなら。
♪
梅吉、腰をプイッと振って家へと急ぐ。

弘兵衛は、伊銀の屋敷に着いた。奈美が玄関の草履などを整えていた。挨拶もそこそこに伊銀の部屋に向かう。サブは、奈美を手伝った。
部屋に入った弘兵衛は、どんよりとした空気を感じた。皆、押し黙っている。弘兵衛が来たと言うのに声を掛ける者もいない。松造に小声で聞いた。
「どうなってるんだ、これは」
「弘兵衛さん、卯吉親分が、伊藤銀之助様って呼んだんです」
「本当か」
「えぇ、ずっとこのままの状態です。困っちゃいますよ」
「そうか……」
弘兵衛も卯吉のことは聞いている。こりゃ参ったなと押し黙ってしまう。なす術を思いつかない。そこにサブが入ってきた。
「いやあ、梅吉姐さんには参っちゃいましたよ。艶っぽいったらありゃしない。弘兵衛さんの肩に手を置いて、おまえさん行くのかえ、なんて言うんですから。ひょっとして弘兵衛さん、来ないんじゃないかなんて思っちゃいましたよ。それに……」
サブは、次から次へとべラべラ喋った。さすがに皆も五月蝿と思ってると、奈美が顔を出した。
「三郎兵衛(さぶろべえ)さん、あんた良く喋るのね。男は黙ってって言うでしょう」
「済んません。ついお調子に乗って……」
「サブ、奈美さんの言う通りだ。男は一言、二言、肝心なことだけを言えば、それでイイんだよ」
卯吉が口を開いた。皆、ホッとする。これで大丈夫だ。
「へぇ、判りやした」
「そうじゃな。卯吉。済まなかった」
「さあ、伊銀の旦那、弘兵衛さんも来てくれた。話を進めやしょう」

Copyright© H.Mitani

仙吉が先程の話を掻い摘んで話した。弘兵衛が気になる点をまとめた。
「雨の夜、目を覚ますものがいない。盗品は江戸では売られていない。大八車、二、三台を使っている。盗賊は十数名」
卯吉が話を続けた。
「今までに起こった大掛かりな盗みと比べた場合、目を覚ます者がいない点が異なります。そのためでしょうか、傷つけられた者もいない。それに三件とも、必ず雨の日に発生しています。十数名の盗賊が、いつも一緒に居るとは考えられません。数日前に雨の目を予測し誰かが連絡をとる役目を果たしているはず。大八車は、いちいち集めたりしてないでしょう。何処かに隠していると思います。しかし、三台の大八車です。狭い所に隠すのは無理。しかも余り市中から遠い所では仕事が遣りにくい。江戸市中のはずです」
弘兵衛が言った。
「半年の間に三件。おしなべれば二月に一度か。事を起こす前に一箇所に集める。事が終われば別々の所に隠す」
松造が口を挟んだ。
「事は、辺り近所、皆が寝静まる丑三ツを挟んで行われたと思われます。とすると明け六ツまでには、大八車や盗品を隠さなければなりません。辺りが明るくなり町人が動き出しますので目立ってしまいます」
「成る程。しかし朝早い仕事もある。安全を考えれば、七ツ半までには隠さなければならないだろう。波多野屋から一時半の距離か。歩きであれば三里。雨の夜、地面はぬかるんでいる。しかも金品を積んでいる。いくら屈強な者でも重い大八車を引いて歩ける距離は、せいぜい一里半が限度。とは言え、既に事件から三日が経った。今から捜査しても、もう遅い。すでに賊は身を隠しただろう」
伊銀は苦虫を噛み潰したような表情で話した。いくつもの事件を抱えているとはいえ、後手に廻ってしまった。
弘兵衛は、奉行所の人間ではない。気楽に事件を捉えることができる。
「三つとも同じように事を進めている。つまり四つ目も同じはず。次に何処が狙われるかは判らんが、事が起こった段階で現場から一里半の範囲を人手を掛けて捜せば良いのではないか。この盗賊は、人を殺める事はないだろう。奉行は五月蝿いだろうが、うっちゃっておけば良い。そこでじゃ、次の事件を予測する上で、

Copyright© H.Mitani

他の不信な点について吟味した方が良かろうと思うが……」
「弘兵衛、おぬしの言うことは判る。しかしな、理由は聞かないで欲しいが波多野屋と奉行のつながりは強いのじゃ。波多野屋が奉行に五月蝿いらしい。その五月蝿さが拙者に廻ってくる。堪らんのじゃ」
「伊銀。波多野屋は奉行に賂(まいない)でも渡しているのか」
「だから理由は聞くなと申しているであろうが。拙者は知らんことだ」
伊銀は、腕組みをしたまま唸っている。

次の事件が起こるまでに準備をし、次の事件で形(かた)をつける。悪い考えではない。しかし事件が起きなければ、結局、お蔵入りになり南町の汚点になってしまう。それに奉行や波多野屋が許すまい。では、この事件を必死になり捜査しているように見せかけて次の準備を進めるか。伊銀は、そうせざるを得ないように思えてきた。
相変わらずスッキリしないまま時間だけが過ぎていった。
珍しく仙吉が口を開いた。
「弘兵衛さんが言うように、雨の日、眠ったままについて話した方が良いように……」
皆、気を取り戻そうと頭を振る。
「雨の日については私に考えがあります」
仙吉が続ける。
「一味には、漁師がいる筈です。しかも年季を積んだ漁師が。風の動き、雲の流れ具合、空気の重さ湿気、潮の色合い、それに勘です。二、三日先の天候を驚くほどぴたりと当てます。雨が降る振らないだけでなく、大雨かどうかまで当てます。江戸前の漁師のなかで年季を積んだ漁師は数人です。必ずその中に一味に加わっている者がいると思います」
「仙吉、心当たりがあるのか」
伊銀は、どんな手掛かりでも欲しい。仙吉の顔を見ると何やら自信あり気である。
「いえ、それ程のものではありませんが、漁師を何人か知っています。奴らにそれとなく聞くことはできます」

Copyright© H.Mitani

「よし、漁師については仙吉に任せよう。しかし、天気をそうピタリと当てるものかの……」
「あら、猫が顔を擦ったら雨が振るって言いますよ」
奈美も部屋の隅に座っている。
「奈美、混ぜっ返すものではない」
伊銀は奈美をたしなめたつもりだったのだが、サブがむきになって言った。
「動物は、天候を当てますよ。大水が出る前になると鼠が外に出てくるって言いますから。これ、本当です」
「そうよねぇ。三郎兵衛さんのいう通り」
「奈美さん、その三郎兵衛って堪忍してください。サブって呼んでくださいよ」
「でもサブさんて呼びにくいわ」
「だから、サブでイイんです」
こんな遣り取りも眠気を誘う。
弘兵衛は、梅吉との早歩きで疲れ気味。コックリしそうで必死に太腿を抓っている。他の者は、先程の伊藤銀之助様でのダンマリで神経を使い果たしている。皆の頭は、多少朦朧としてきていた。
眠気覚ましは喋るに限る。
「ところで、各々方、拙者は眠気が出て……　いや違う。拙者は話を進めた方がよいと思う。何故、店の者が盗賊に気付かなかったか、眠ったままだったのか。これについて如何考えるおつもりじゃ」
弘兵衛が真面目そうな顔で訊いた。
「それよ。誰ぞが幻術でも使ったのではないか」
現実的な伊銀が妙なことを言いだした。誰も後を継がない。庶民はともかく奉行所に関係するものたちは幻術など信じていない。奈美も困ったことを言い出したものだと呆れ顔になった。

玄関で声がした。
「奈美さあん！　居ますかあ！　綾でーす」
「あら綾さんだわ。はあい！　今、行きます」
皆の朦朧顔が、ちょっと生気を取り戻した。

Copyright© H.Mitani

「じっちゃまがねぇ、庭で採れた茗荷を奈美さんにって。これお澄ましに入れると香りが良いのよね。アレッ、お客様、大勢来ているようね。じゃあ、私は帰ろうかしら」
「弘兵衛さんと卯吉さん達よ。皆、クタクタ」
「例の白川夜船ね」
「そう。ねぇ、綾さんも入ってよ。皆、もう頭が動いてないの」
「イーのかしら。私が入っても」
「銀之助さんは、いろんな人の話を聞いて捜査の手立てなどを決めるんだって。綾さんも入ってよ」
「面白そうね。弘兵衛さん、どう？」
「どう、って？」
「ニヤケてない」
「ふふ、梅吉さんにぞっこんみたいね。でも捜査の話の時はちゃんとしてるわよ」
二人が部屋に入ってきた。確かに皆、疲れきった顔をしている。綾を見て挨拶をするが覇気がない。
綾が聞いていると店の者が眠ったままだったのは何故かと話し合っている。思わず言ってしまう。
「そんなの簡単よ！」
皆、エッと顔を向ける。
「眠り薬に決まってるじゃないっ！」
言ってしまった後で心配になった。眠り薬について典膳から聞いた事はあったが詳しくは判らない。
「綾さん、あっしもそうかなと思っていたんですが……」
卯吉が言った。伊銀は、確かに簡単な事だったと頭を叩いた。
「三叉草（さんさぐさ）を煮詰めれば、眠り薬はできると聞いたことがある。かなり時間は掛かるらしいが」
卯吉が続けた。
「だが綾さん。どうやって二、三十人に飲ませたかが、今一はっきりしないんで」
「それも簡単よ。ご飯よ、ご飯。ご飯は、店の人全員が食べるわ」
伊銀、新婚ボケかとまた頭を叩く。

Copyright© H.Mitani

「ウォッホン」
伊銀が咳払いをした。
「綾さん、面目ない。多分、おっしゃる通りであろうと思う。どうも、今日は皆頭が動いておらんようじゃ。今日は、これでお開きにしたと思うが」
普段であれば卯吉は続けようと言う。しかし、この日は違った。何かほっとしたような顔で言った。
「旦那、そうしましょう。明日にでも、また集まりましょう」
久しぶりに伊藤銀之助様などと言ってしまった手前、意地になり、しかめっ面を続けたが疲れた。
「いや卯吉、明後日（みょうごにち）にいたそう。明日は皆に調べてもらいたいことがある。まず漁師の件は仙吉に頼む。サブも手伝ってくれ。三叉草については……」
「はいっ！　私が調べるわっ」
綾が手を挙げた。
「では綾殿に頼むか。情報だけで良い。どのようにすれば手に入るか、誰でも眠り薬を作れるか、そんな所を調べて欲しい。次に、松造。聞き込みで良い。波多野屋と他の二件の周囲で大八車を見掛けた者はいないか」
「あっしは、三件の大店に何かつながりがないか調べやしょうか」
卯吉が言った。
「いや、それは拙者が調べる。卯吉には被害に合った店で事件後に居なくなった者がいないか調べてくれ。賄（まかな）いの女が絡んでいるかも知れぬ」
「へぇ、判りやした」
「では明後日（あさって）……」
「おいおい伊銀。拙者は何を調べれば良いのじゃ」
「弘兵衛は、好きにしてくれ」
「それはないだろう。何かさせろ」
「では、この三件の事件に関し全体を見直して欲しい。金品が目当てであるとは思うが、人を傷つけない事も含め余りにも手口が綺麗過ぎる。確かに襲われた大店にとっての被害は甚大だが、どうも、妙な匂いするのじゃ」
「妙な匂い？　何じゃ、それは」
「まだ判らん。勘だ。拙者の勘」

Copyright© H.Mitani

卯吉は、伊銀の言葉を聞き大きく頷いている。そう、何か妙な匂いがする。
綾は、捜査に参加するのは初めてであった。眠り薬と言ったはいいが、どんなものか、皆目、見当が付かない。伊銀は、三叉草と言っていたが、そんな草木は聞いたことがない。思わず手を挙げてしまったが、小石川薬園の主幹に聞けば、何かが判るのではと思ったからだ。
お城に行った。門番とも顔馴染みになっている。それに、出入りは自由との三太夫のお墨付きも貰っている。小石川薬園は、南園の方が規模が大きく、主幹は此処に居る。南園に足を運んだ。

「珍さん居ますか」
「おやおや誰かと思えば、綾さん。今日は一人かい」
珍玄斎（ちんげんさい）の先祖は大陸からの渡来人であった。玄斎は、既に帰化している。周りがいくら和名を勧めても頑（かたくな）に、珍の苗字を守っている。泥鰌髭を長く伸ばしているが、すでに全くの日本人である。
「そうなの。ねぇ珍さん、教えてもらいたい事があるんだけど……」
「何でも聞いてくれ。知ってる事は何でも教えるよ」
「三叉草って知ってる」
「三叉草か。また珍しい草を聞くんだね。あの草は扱いを間違えると大変だよ」
「珍さん知ってるんだ」
「ここにも植えてあるよ。さあ、来てごらん」
珍は綾を水草が植えてある池の側に連れて行った。池には、小川が流れ込んでいる。珍は、砂地に砂利が敷き詰めてある所に座り込んだ。
「綾さん、これが三叉草だよ。見た目は山葵に似てるだろう。間違って摩り下ろして食べたりしたら事だよ」
「どうなっちゃうの」
「意識が朦朧としてくるんだ。死ぬことはないけれどね」
「これで眠り薬、出来るのかしら」
「丁寧に煮詰めれば出来る。とろ火で常にかき混ぜながら煮詰める。ちょっとでも手を抜くと焦げついちゃう」
「私でも作れるかしら」

Copyright© H.Mitani

「二、三度失敗するかも知れんが出来ない事はない。さてと、今度は私の方が教えて貰いたい。何故、こんな事を熱心に訊くんだい」
「伊銀さんの手伝いなの」
「伊銀？　あぁ、南町の与力だ。いつも眠そうな顔をしている。事件絡みかい」
「そうなの。ねぇどんな所に生えてるの？」
「砂地で川の岸辺。つまり浜辺に流れ込む川の出口に多く生えている。眠り薬は、漁師が良く作ると聞いたことがある。夜釣りのために昼間、寝ておかなくてはならないからね」
「本当！」
「何か、役に立ったかな」
「陳さん、大助かりよっ！　でも、その髭、似合わないわっ！　昼寝でもしていたら、私、切っちゃうから」
「大丈夫、大丈夫。珍玄斎は、いつもシャキッとしてる。昼寝などしない。この髭は大切にしてるからね。綾さんにも触らせないよ。さあ、行きなさい。伊銀が喜ぶよ」
「珍さん、ありがとう」

松造は、空しい一日を送っていた。全く情報が掴めないのだ。大八車は何処にでもある。何しろ物を運ぶには、まず大八車である。改めて大八車を意識すると被害にあった店の周りにも、往来にもゴロゴロしているように感じてしまう。無駄な一日にしたくない。この思いが思わぬ情報をもたらしてくれた。雨の日に重いものを乗せ大八車を引くと、木で出来た車輪の部分が水を含み、壊れやすくなると言う話を聞いたのだ。車輪はいくつかの木を組み合わせて作る。水を含むと膨らみ具合が異なるため脆くなるらしい。車屋に行ってみることにした。

卯吉は、事件後三軒とも消えた者がいないことを知っていた。しかし、飯に眠り薬を入れたとの話には納得がいった。飯炊き女が絡んでいる。この読みは当たっているだろう。とすれば事件が起こる数ヶ月前に、一味に関係する者が店に奉公しだしたはず。または古くからの奉公人を一味に加えたか。とりあえず口入れ屋を廻ることにした。

Copyright© H.Mitani

何人かの名前を手に入れた。しかし店の者は全員、眠っていた。自ら眠り薬入りの飯を食べたのか。いや違う。狸寝入りだろう。他の者が寝入った後、賊を手引きしたと考えられる。三軒と言うことは、少なくとも三人は居るはずだ。

卯吉は、緑青堂から順にカマを掛けることにした。自分一人では手が足りない。手下は、それぞれ調べを受け持っている。仕方なく源兵衛に頼む事にした。

世の中は落ち着き、手慰みで博打を遣る者が増えている。源兵衛の賭場は儲かっている。卯吉の頼みに快く応じ、余り目付きの悪くない者を三、四人貸してくれた。

カマを掛けるといっても簡単であった。勝手口から顔を出し、いつもは懐に入れたままの十手を右手に持ち、パンパンと左の掌に打ちつけながら、台所辺りを歩いたり覗いたりするだけで良い。飯炊き女の中には、あら親分、お調べですかなどと気軽に声を掛けるものもいた。ん、まあ、そんなところだ。意味ありげにニヤついてみせる。さあて狢（むじな）は、穴から出てくるかな。後は源兵衛の手下に任せれば良い。

伊銀は、三軒の大店に何かつながりがないかを調べたが、仕事上の関係は見付けられなかった。無尽、道楽……。三人の主人の道楽は違っていた。一人は女遊び、他は俳句に端唄。端唄……？　波多野屋の道楽が端唄であった。何か手掛かりが聞けるかも知れない。伊銀は、梅吉の家に向かった。

佐吉とサブはツイていなかった。空読みの名人と言われる漁師が三人いたが、その中の一人、佐吉の知り合いの漁師は数ヶ月前に天寿を全うしていた。他の一人は年を取り耳も目も利かなくなっていた。もう一人は、三人の中では一番元気だというが今は漁師を辞め廻船問屋で船頭を遣っていると言う。丁度、北の方に米を運んでいる最中。いつ江戸に戻るかは判らないと言う。佐吉は、この男に会ったことはない。

漁師の何人かに空を読むのに長けた者はいるかと聞いてみた。やはり先程の知り合い三人の名前が挙がるだけ。今、現役でいるのは、正造だけだと言う。他にいないかと聞くと、皆、自分だと言う。これでは絞り込むことなど出来ない。しかし、正造には会わなければならない。いつ帰ってくることやら……。

Copyright© H.Mitani

弘兵衛は、昨晩から事件のことで頭の中は一杯だった。帰ると機嫌の良い梅吉が、鰻だよっ！　と威勢の良い声で迎えてくれた。ねぇ、おまえさん、美味しいかい、ねぇ、美味しいかいと擦り寄ってくる。弘兵衛は物事に夢中になると他のことが目に入らない。う、うん、旨いなと空返事。

梅吉は当初、そのような弘兵衛にイライラした。この人、あたしに気がないのかしらと疑ったほどだ。だが、今は違う。また始まった。仕方ないと弘兵衛に合わせている。こんな日は会話もないが、夜になると弘兵衛は目一杯、挑んでくる。これで辻褄は合うことになる。変なところがあるね、この人は、などと思いながらも夜を考えると体の芯が火照ってくる。やだよ、あたしったら。そう呟きながら頬をポーっと赤らめた。弘兵衛は、梅吉の変化にも気付かずに鰻をムシャムシャ喰っていた。

翌朝も弘兵衛は、腕を組み唸っていた。

綺麗過ぎる、妙な匂い……。伊銀と卯吉はそう感じたらしい。言われてみれば綺麗すぎるのかとも思うが、まだピンとこない。やはり与力と目明し、事件に関する鋭い感性のようなものを持っているのか。しかし綺麗過ぎるとは、匂いとは、どういう事なのか。

伊銀の奴、全体を見直して欲しいなどとぬかしおった。全体を取り仕切るのは伊銀の役目ではないか。いやいやそんなことはどうでも良い。今日は梅吉の稽古がある日だが始まるのは夕方から。喜代は井戸端で洗濯をしている。梅吉は弘兵衛に替わり庭の掃除。部屋の真中には腕組みをした弘兵衛がいる。静かな時間が過ぎていった。

弘兵衛は、事件のあらましを幾度となく思い返していた。

金目当てであれば最初の盗みでタップリと稼いだはず。十数人だったとしても、その金だけで、それこそ十年や二十年は喰っていける。それに盗品を売った形跡もないと言う。金目当てだけで、二件も三件も盗みを働く必要はない。では恨みか。恨みであれば主人を殺害、または傷付けるはず。卯吉によれば恨みを買うような阿漕な商売はしていないと言う。波多野屋は、お上に呉服を売り込むために賂をばら撒いたという。しかし大した金ではない。伊東屋も真面目に米問屋を営んでいるらしい。緑青堂などは、小売はしないが自分の店が卸した金物が壊れたりした時、無料で鋳掛をしていると言う。緑青堂は一生物、との噂が立つほど

Copyright© H.Mitani

で、むしろ評判が良い。
しかも三軒とも事件後、同業者が手助けをし営みも元に戻りつつあると言う。
何なのだ、これは……。
待てよ資金を集め謀反でも起こそうと……。可能性はある。豊臣方の残党が、まだ各地に散らばっている。幕府に盾突こうと言うのか。いやいや、これも違う。もしそうであれば江戸市中を混乱させるはずだ。幕府に対する庶民の反感を煽った方が事を起こし易い。庶民は白川夜船などと渾名をつけ楽しんでいる。
楽しんでいる……。一件めで既に莫大な金品をせしめている。でありながら二件、三件と続ける。まさか、奴らは盗むこと自体を楽しんでいるのか……。拙者が一味に加わっていたとしよう。普段は真っ当な仕事をしている。ある者が企てる。そして雨の日を予測し、眠り薬を作る。手分けして大八車を用意する。飯に薬を混ぜる。押し込む。皆、寝ている。面白いように金品を奪える。蔵の鍵は？大した問題ではないだろう。錠前屋を一味に加えれば事は済むことだ。人が造った錠前を開ける。錠前屋にとっては楽しくて仕方がないことかも知れん。事が終れば庶民が噂する。白川夜船、白川夜船……。拙者は知らん顔で噂するもの達の横を通り過ぎる。そして、ほくそ笑む。はたして南町は拙者を捕まえる事はできるのか……。知恵比べ。なるほど楽しめる。奴らめ遊びのつもりか。
読めたぞ。であれば、これからも人を殺めることはないだろう。そして、奴らは必ず第四の店を襲う。
梅吉と喜代は、一点を凝視し、さっきから一人でブツブツ喋っている弘兵衛が気になっていた。喜代は確実に気味悪がっている。梅吉の方をチラチラ、チラチラ見ている。梅吉は、まさかとは思うものの、余りにも一つの事に夢中になる弘兵衛だ。度を越えて思い詰めているのではなどと心配していた。
その時、急に大声をあげて弘兵衛が笑い出した。二人はビクッと顔を見合わせた。喜代は洗濯物を放り出し、梅吉の所に駆け寄った。梅吉の手から箒が滑り落ちた。
「姐さん、あたし気が触れた人と住むのは嫌ですよ。姐さん、あの人、何とかしてくださいよ」
「そんなこと言われたって、あたしだって気味悪いよ。急にどうしたんだろうね」
「最初に会った時から変なところがあると思ってたけど、やっぱり狂ってたんで

Copyright© H.Mitani

すよ。あの人は姐さんの亭主なんだから責任取ってくださいよ」
「そんな責任取れって言われても。二人で別の所に住もうか」
「そんなの嫌ですよ。誰かに頼んで、あの人をどっかに連れてってもらえばイイんですよ」
「誰に頼むのよ」
弘兵衛は、まだ大声で笑っている。
玄関の方で声がした。
「たのもう、たのもう！」
男の声だ。ほっとした表情で二人一緒に玄関の方に走った。伊銀だ。
「伊銀の旦那。本当に良いところに来てくれました。ちょっと来てくださいよ」
二人は、伊銀の手を取り庭へと引っ張っていった。弘兵衛は、まだ笑っている。
「見てくださいっ！　あの人、頭、おかしくなっちゃったんです。折角、夫婦になれたと思ったのに……」
梅吉は、泣き出しそうな顔。喜代などは弘兵衛を睨みつけている。
「姐さんも姐さんだ。あんな気が触れた男に騙されるなんて……」
伊銀は、この二人がなぜギャアギャア言っているのか理解できないでいる。
「何が起こったと言うのだ」
喜代がまくし立てた。
「旦那、あの人をちゃんと見てくださいよっ！　独り言を言ってかと思ったら、今度は一人で馬鹿笑い。狂っていますよ、あの人」
「梅吉、喜代。弘兵衛は何時もあんなもんだ。別に、変わった所などない。普段通りだがな」
二人は落ち着きはらった伊銀を不思議そうに見た。
「旦那っ、あの人、いつもあんな調子なんですか……」
「そうだが」
「へぇっ！　そうだったんですか」
二人一緒に声をあげた。
庭が騒がしいので弘兵衛は気が散ってしまった。
「おいっ！　五月蝿いぞっ！　おう伊銀か。丁度良い上がってくれ」
「弘兵衛、この二人がなあ、おぬしのことを気……」

Copyright© H.Mitani

伊銀が話そうとした途端、二人は思いっきり伊銀の尻を叩いた。
「痛てて！　何をするのじゃ」
「旦那、さっきのこと話したら承知しませんからね。ちょっと勘違いしただけなんだから。いいわね！」
「何じゃ、さっきは涙ぐんでいたくせに。女は、これだから始末に負えん」
伊銀は、尻を摩りながら部屋に上がった。
「伊銀！　三軒に匹敵するほどの大店は、江戸に何軒くらいある」
「急に言われても良くは判らん。何故だ」
「良いか伊銀。奴らは必ず四軒めを狙う。勘定奉行の所で冥加金収税帖を見てみたい。大店の屋号を調べたいのじゃ」
伊銀は、梅吉に波多野屋が稽古に来ているかどうか聞いた。残念な事に今は来ていないという。余り筋が良い方ではなく、梅吉の厳しい稽古に付いていけなくなったらしい。

翌日、弘兵衛は三太夫に会いに行った。事情を話し勘定奉行を管轄する老中に引き合わせてもらった。勘定奉行は、快く弘兵衛の申し出を受けた。奉行としても、これ以上被害者が出ては収税に影響し困るのだ。弘兵衛は収税帖から何軒かの屋号、住所を書き写した。

伊銀宅に皆が集まった。
「皆、ご苦労だった。調べた内容を聞かせてもらえるか。いや、まず拙者から話そう。三軒の繋がりは掴めなかった。つまり商（あきない）だけでなく、道楽などにおいても三人は関連がなかった。賊が三軒を選んだ理由は別のところにありそうだが理由については判っていない。面目ないが大した手掛かりは見つけられなかった。仙吉、サブ、どうであった」
仙吉が概略を話した。確実に天候を読めるのは廻船問屋に職を変えた正造であるが会えなかった。北から戻ったら必ず会う必要があると報告した。
松造は、車屋で聞いた内容を話した。二件目の事件が起こった日から数日後に二台の大八車を注文した者がいたと言う。この男は商人（あきんど）のような風体だった。幾ら掛かっても良いから車輪の外側に鉄の箍（たが）を付けてくれと言い、気前良く前金で

Copyright© H.Mitani

払った。しかも祝儀までくれた。しかし、取りにきた二人は真っ黒に日焼けし、ガッシリとした体格だったと言う。鉄の箍を付けた大八車などほとんどない。理由を聞くと石ころの多い所で使うと言ったそうだ。車屋は鍛冶屋と組み車輪を作ったが、丈夫だし高く売れそうなので、これからも作っていくと喜んでいたらしい。

綾も三叉草について話した。漁師が使うことを話した段階で、皆は意味ありげに頷いた。漁師が絡んでいるのは確実なようだ。仙吉は、ますます正造のことが気になっていた。残っているのは卯吉と弘兵衛。弘兵衛は卯吉に先に報告するように促した。卯吉の話は、こうだった。

事件後、店を去ったものはいない。口入れ屋の話では、半年ほど前に伊東屋と波多野屋に中年増の女を一人づつ入れた。時期は、ほぼ同じ。二人とも似たような境遇を語った。亭主が死んでしまったため働きたい。子供はいないので住み込みでなければ困る。卯吉は、それとなく店で二人を見たが日に焼けガッシリしたよく笑う女だ。

卯吉は、捜査の手が伸びていることが判ってしまうが、カマを掛けたと話した。とにかく手掛かりが欲しい。飯炊き女は滅多に出歩かない。出て行く者がいたら後を付けるよう源兵衛の手下に頼んだ。動きがあれば報告に来るはずと皆に伝えたが、まだ、報告はない。

伊銀が言った。

「正造、飯炊き女、鉄の箍を持つ大八車、漁師……。少しづつだが絞れてきたようだな。弘兵衛、おぬしの番だ。全体を見直してくれと頼んだが、梅吉や喜代に気が触れたと勘違いされるほど夢中になったようだが、何か考えついたのか」

弘兵衛、何やらニヤニヤしながら膝をちょっと前に進めた。自信あり気な態度。勿体ぶって懐から半紙を取り出し皆の前に広げた。屋号や商、場所が羅列してある。皆、一斉に覗き込んだ。

ゴチンッ！　勢い余って頭をぶつけ合ってしまった。綾と奈美は難を免れた。伊銀も一緒になりゴチン。他の者は顔をしかめ頭を摩っているが、伊銀は平気な顔。この男、余程の石頭と見える。

全部で五軒だ。

Copyright© H.Mitani

・西邑屋（にしむら）　酒問屋（菖蒲町）
・二階楼　遊郭（新吉原）
・丹羽（にわ）屋　両替商（五郎兵衛町）
・仁木　料亭（神楽坂）
・新田（にった）屋　味噌・醤油卸問屋（木下町）

総て名の通った大店ばかりである。覗き込んだ連中、今度は一斉に姿勢を戻し腕組みをした。何も皆が同じ動作をしなくとも良いものを……。

綾が口を開いた。

「弘兵衛さん、まさか次に狙われる店（たな）は、この中にあるなんて言いだすんじゃないでしょうね」

「実はそうなんだ。次はこの中の一軒が狙われる」

皆、口には出さないが、そんな、まさかの表情をして互いに顔を見合わせ頷き合っている。今日は、皆、無言で同じ所作をする。あの卯吉ですら同じ。奈美が素っ頓狂な声を上げた。

「やだあ、全部、頭に〝に〟が付く店じゃないっ！」

「如何にも。さすが与力の妻。良いところに気が付いた。亭主の方は気付かなかったようだが……」

伊銀、弘兵衛の奴、また余計な事を言いおってと渋い顔をした。

「これらの店は例の三軒と同じか、または、それ以上の大店。勘定奉行所の冥加金収税帖から抜き出した店だ。拙者の考えを話そう。良いか、素直に聞いて欲しい。あくまで一つの仮定に基づいている話じゃ。最後までチャチを入れずにな」

弘兵衛は自分の考えを総て話した。

遊びで盗みを遣っている。楽しんでいる。人は殺めない。楽しみとは続けたいもの。必ず四軒めを襲う。こちらも遊び心で考えないと奴らの企てを見破る事は出来ない。拙者も楽しむことにした。何故、あの三軒を選んだのか……。必ず理由があるはず。半紙に一軒めから屋号を書いてみた。

遊び心……　気が付いた。イロハの順になっている。笑ってしまった。大声でな。

であれば次は「ニ」に決まっている。

Copyright© H.Mitani

皆、呆気に取られた顔。遊びで盗み？　盗んだ金品は、そのまま何処かに隠してある？

しばし沈黙が続いた。皆、しきりに頭を振っている。仲が良いのか同じ所作。頭を切り替えているようだ。遊び心、遊び心。弘兵衛一人がニヤニヤと皆を見ていた。伊銀と目が合った。もっとも伊銀の極細の目。多分、目が合ったのだろう。伊銀が、ニヤッと笑った。弘兵衛め！　任せてよかった。しかし遊びであれほどの盗みを遣るとはどんな奴らだろう。

その時、玄関で声がした。はあいと返事をしながら奈美が席を立った。二人の男を連れてきた。サブが声を上げた。

「あ、兄(あに)さん達！　で、どうでしたっ！」

伊銀が咳払いをして言った。

「サブ、そう事を急くな。生駒屋の者か。ご苦労だった。して何か判ったか」

「へぇ、丶の字の頼み、気ぃ入れて遣りやした。あっしは緑青堂を見張りましたが、女が出てきやした。日に焼けた頑丈そうな女。わき目も振らずに一直線。小半時ほど歩き町医者の家に入っていきやした。看板は河童針灸院で。しばらくすると、もう一人、日に焼けた女が同じ家に入っていきやす。あれっと思っていると、この捨吉にばったり」

「いや、あっしも驚きましたよ。波多野屋を見張っていたら同じように女が出てきまして、付けましたら町医者へ。そこで兄いに出っくわしました」

「町医者か……。河童針灸院とは、ふざけた名前だな。場所は」

「へぇ、紅町でっ」

「紅町だな。判った。で、女たちはどうした？」

「えぇ、今度は二人一緒に辺りをキョロキョロしながら歩き出しやしたが、一人は緑青堂に戻りやした」

「あっしの方も波多野屋に戻りました」

「そうか、河童に後を付けられないようにと言い含まれたな。ご苦労だった」

伊銀は、奈美に駄賃を渡すように言った。

町医者と女二人は判った。女は漁師の女房だろう。

松造は医者をフン縛りましょうと言ったが、伊銀は、どうせ河童を捕らえても証拠がない。知らぬ存ぜぬで終わるだろうと思った。

Copyright© H.Mitani

「さてと、どうするか。まず河童の張り込みだが、誰か遣ってくれぬか」
サブが手を挙げた。伊銀は卯吉に大丈夫かと目で聞いた。卯吉は遣らせてみましょうと小声で言った。
「もう一人付けましょう。河童の所に患者を装った一味が来るはずです。松造、遣ってくれ」
「次に河童に接触して見たい。ここに居る者はどう見ても胡散臭い者ばかりだ。どうするかな」
「胡散臭いはないだろう。該当するのはおぬしと卯吉ぐらいだ」
「弘兵衛さん。あっしだって自分ではそれほどではないと思ってますがね」
「伊銀っ！　喜代にしよう。要するに、どんな野郎かを調べるだけだ。喜代なら針灸にちょうどピッタリだし……。今夜、喜代に話してみよう」
「弘兵衛、この五軒だが今少し絞れないか。拙者は二階楼と仁木は外して良いと思うが、どうだ」
「おぬしと同じように考えている。遊郭と料亭だ。雨が降ろうが何が降ろうが夜中まで騒いでいる所だ」
綾が聞いた。
「弘兵衛さん。じゃあ、何でこの二軒も書いたの？」
「まあ、何と言うか、しっかり調べている事を皆に知って貰いたくてな。ははは、子供地味ていると言われれば、それまでだが」
「子供地味てるわ。私ねぇ、梅吉さんは弘兵衛さんのそう言うところが気に入ったと思うの」
「そうね。弘兵衛さんて、ちょっと子供地味てるところがあるわね。梅吉さんは、多分、誰かが側にいてやらないと駄目だと思たのよ、きっと。弘兵衛さんは姉さん女房の方が良いと思っていたけど、結局そうなったわね」
綾と奈美はしたり顔で話している。弘兵衛は馬鹿を言うものではないと喉まで出掛かったが、さらに何を言われるか判ったものではない。思いとどまった。二人を無視し伊銀が続けた。
「三軒の中で可能性が高い店は何処だろうか。どうだ誰か意見はないか」
「弘兵衛さんは遊び心と言いましたが、私でしたら西邑屋を襲いたいですね」

Copyright© H.Mitani

仙吉の意見だ。
「何故だ」
「とにかく屋敷が広い。造り酒屋ほどではないにしても、広い敷地内を勝手に動き廻れます。面白いと思いますが」
松造が言った。
「だったら新田屋でも良い事になる。あっしは丹羽屋だと思います。今までは問屋を襲っています。両替商は、多少毛色が違います」
「丹羽屋の屋敷はそれほど広くない。そんなチマチマした店なんて面白くないですよっ！」
「広さなんて関係ないはずだ。丹羽屋に決まっている」
「そんな事はない」
松造と仙吉が言い争いを始めた。
「こらっ！　いい加減にしろっ！　伊銀の旦那。二人が言っている事はあながち無視できませんが、結局、この三軒と予測するのであれば三軒とも張り込む必要がありますな」
「伊銀、拙者もそう思う。賊は十数人であることは確か。事前に一人一人を探し出すのは無理であろう。四軒目を襲うのを待ち一網打尽にする以外にないのではないか。問題は如何にして、何日襲うかを知るかだ。さらに何処を襲うかを。さもないと常に三軒を張り込んでいなければならないことになる。これは面倒であるだけでなく奴らに気付かれる恐れがある」
「松造とサブの働きが重要になってくる。河童のところに来た者の中で一味らしき者、この判断が難しいが、それらしき者が来たら後を付け居場所を掴んでいく。十数名だ、何人かは引っ掛かると思いやす」
卯吉の言葉を受け、伊銀が言った。
「地道に一味を捜し出し、聞き込みや張り込みで動きを知る以外になさそうだな」
「今までは二月おきに襲っているが今度は判らん。伊銀、急いだ方が良いな。拙者は正造の存在が気になっている。正造が働いている廻船問屋に手を廻し、正造が何日戻るか、おおよそでも構わん、掴んでおいた方が良い」
「弘兵衛の言う通りだ。仙吉、正造に関してはおまえに任せる。一味が動き出す

Copyright© H.Mitani

のは正造が戻ってきた後であろう。仙吉、抜かるなよ」
仙吉、ブルッと身震いをした。大きな仕事だ。正造の動きが鍵だ。
「へぇ、遣らせていただきやす。命に掛けても正造をひっ捕らえてみせます」
「おいおい、そこまで息張らんでも良い。何日帰ってくるかを探るだけだ。帰ってきたら大至急知らせてくれ。一人でどうこうしようと思ってはいかん。良いな」
「へへぇ」
卯吉が聞いた。
「旦那、この三軒は如何いたしやしょうか」
「ううん、張り込みは必要じゃな。町方に声を掛け見張る事にする。三軒には知らせない方が良いな。余計な動きをされては奴らに感ずかれてしまう。その時が来たら人手が要る。奉行には大雑把に話しておく」
「伊銀っ！　何だ、その大雑把とは！　いくら遊び心とは言っても大雑把は酷いのではないか」
「弘兵衛、違うのだ。奉行は思慮が足りん。いや、いかん。余計な事を言ってしまった。あのな、ここだけの話だが、奉行は短気なのだ。すぐ動こうとする。な、判るだろう。この事件は、ジックリ腰を落ちつけて掛からねばならぬ。大雑把で良いのだ」
「思慮が足りん奉行か。名を馳せた南町。思慮足らずの奉行。チグハグだな」
「これっ！　言うな。口を滑らせてしまっただけだ。どうも、拙者、余計な事を口に出すようになってしまったらしい。気を付けねばならん」
「大丈夫よ、私が付いててあげるから」
奈美が口を挟んだ。伊銀は真っ赤になり俯いてしまった。こちらの夫婦も女房の方が強いのか。場に笑いが起きた。
「皆に言っておくが、街中を歩く時には例の大八車に気を付けてくれ。普段は使わんと思うが注意しておいた方が良い」
今日は、この辺でお開きであろうか。その時、綾が言った。
「弘兵衛さん。私、ちょっと気になるんだけど、本当に、イロハニ、の順かしら。この歌は、色は匂えど、でしょ。ハ、は、ワって声に出すけど」
そう言われれば弘兵衛も自信がない。サブが話し出した。
「綾さん、その通りだけど歌は歌。イロハは、イロハですよ。別もんです。それ

Copyright© H.Mitani

に、歌では、ワは我が世、のワとして出てきます。イロハ歌留多のように五十文字の並びでは、イロハです。大丈夫ですよ」
皆、目を開いてサブの顔を凝視した。自信有り気な口調。どうしたんだサブは。
「アレーッ！　やだな、そんな顔で見ないで下さいよ。当たり前の事を言っただけなのに。実は、俺の親は町人のクセに三郎兵衛なんて妙チキリンな名前付けたでしょう。小さい時から文字に興味、持っちゃったんですよ。今は、この名前、気に入ってますが」
皆、フムフムと頷く。同じ動作。今日は変な日だ。皆、同じ所作を取る。

弘兵衛は家に帰ると早速、喜代を呼び事情を話した。喜代も梅吉も先ほどの件がある。弘兵衛に強く言えない。
「そりゃ、針灸に行くのは別にどうって事はありませんよ。でも、その河童を調べろって言われても、わたしゃ、ただの手伝い女。そんな大層なこと勤まりませんよ。もう年寄りなんだし」
さっきの元気は何処に行ったのか、急に体を丸めゴホン、ゴホンと咳き込む。わざとらしいったらない。
「そうか残念だな。河童はイイ男らしいがなぁ。まあ良いか。別の者に頼むか」
「いえね、弘兵衛さんのたっての頼みと言うのであれば、私だってお役に立ちたい思っていますからねぇ。ちょうど腰が痛みますから、針か灸でも遣ってもらいましょうか」
河童が若いのか年寄りなのかイイ男かどうか弘兵衛は知らない。喜代は、まだまだ色気はタップリ。急にイソイソしだす始末。
「明日にでも行ってきますよ」
弘兵衛、ちょっと気が重い。ま、いいか。イイ男かどうかの判断は人によって違う。

仙吉は、廻船問屋に行った。沖仲仕などがたむろし、何となく物騒な雰囲気である。正直、気後れする。店に入る口実はない。沖仲仕と話す以外にない。
「いやあ、良い天気だ。船はどうかな」
「おめぇ馬鹿言うんじゃねぇよ。そんな事、奥が聞いたら袋叩きだ。風がねぇん

Copyright© H.Mitani

だ。船は動かねぇよ。一日遅れれば、その分損するだよ」
「そうか。俺たちには良い天気でも、船には良くないんだ。世の中は、難しいな」
「そうよ。船が着かなきゃ、俺っちらだってお飯(まんま)の食い上げだあね」
「そうか。大変なんだ。今は、どの船を待ってるんだい」
「北からの帰り船だよ。この分じゃ、まだ四、五日は無理だあね」
「いや、おめぇの勘は頼りになんねぇよ。帆を張った時も海は凪いでた。行きも日数が掛かったはずだ。とすりゃあ、おめぇ、帰りも凪だ。十日は遅れるだで」
もう一人の沖仲仕が言った。十日か……。
「いくら空読みの正造が船頭やってるって言ったってよう、風を起こすことは出来ねぇよ。ま、神頼みだな」
「空読みって何なんです。聞いたことがないな」
「そりゃ、おめぇみてぇな遊び人には関係ねぇ話だ。天気を当てるんだよ。雨とか風とかを当てるんだよ。乗ってるもんは助かる。風が吹く前に帆を張りゃあいいんだ。風が吹き出したらすぐに船は走り出す」
「正造って人は凄いな」
「おう、凄(すげ)ぇ奴よ。給金も凄ぇや。俺たちの何十倍も貰ってらあ」
正造は金に困っていない。戻って、すぐに事を仕掛けるとは思えないが良い手掛かりだ。
「兄さんたち。俺は今日、丁半で少し儲けたんだが、面白い話を聞かせてもらった。これで、一杯遣ってくれ」
仙吉は、なけなしの金を渡した。
「おうおう、済まねぇな。若(わけ)ぇのに気が利かあ。ありがとよ」

喜代が箪笥から一番良い着物を出し、着替えている所を梅吉が覗いた。
「喜代、何処に行くの？」
「姐さん、何言ってるんですか。河童の所ですよ。余り気が進まないけど仕方ないでしょう。姐さんの亭主の頼みだから」
「でも喜代。そんなに着飾ってどうするの。針と灸だよ。向こうじゃ肌蹴(はだけ)なきゃなんないんだよ。普段着がイイんだよ、普段着が。そんな格好じゃ不思議がられるよ。何しに来たのかってね」

Copyright© H.Mitani

「でも……　普段着じゃ、つまらないよ」
「何が」
「だって河童は、イイ男だって言ってたじゃないですか」
「喜代、あの人は河童を見てないよ。それに張り込んでいた連中だって見てないよ。イイ男だなんて、あの人の口から出任せに決まってるじゃないか」
「エッ！　見てないんですかっ！　チキショウめ騙されたっ！　姐さん、あたしや行くの嫌だよ」
「何言ってるのさ。さあ、普段着で行っといで」
「まったくう。あの男、帰ってきたら承知しないよっ！」
喜代、渋々、出かけていった。

小汚いちっぽけな家だと思っていたがとんでもない。立派なたたずまい。門には五尺ほどの看板が掛かっていた。河童針灸院。
「あれまあ、驚いたね。凄い家だよ」
玄関には、きちんと受付がいる。若い女が台帖を開いて名前を訊いた。待合室に通された。五人ほどが待っている。皆、女だ。若いのもいる。治療を終わった者が出てきた。皆、上気した顔付き。腕が良いのだろうか。
喜代の番になった。治療室に入った。白い作務衣を着た者が三人、横になった患者に針やら灸を据えている。患者は、四人。喜代は真中に横になった。作務衣を着た女が言った。
「先生、初めての患者です」
先生と呼ばれた男が部屋に入ってきた。喜代は頭を上げて男を見た。あれまあ、イイ男っ！　まだ三十前後の締まった体付き。何と言っても顔が良い。面長、キリッとした目。喜代をじっと見た。
「痛いところでもありますか」
うっとりするような澄んだ声。喜代は年甲斐もなくポーッとしてしまった。
「どうですか、具合が悪い所はどこですか」
「えっ！　えぇ、腰が、腰が痛いものですから……」
「腰ですね。襦袢になってもらえますか」
「でも、先生。恥ずかしい……」

Copyright© H.Mitani

まったく困った喜代である。針灸院に来たくせに襦袢姿になるのを恥ずかしがっている。

「治療ができませんよ。さ、待っている患者もいます。急いで」

灸を据えられている患者たちは呆れ顔で喜代を見ている。やっと襦袢姿になった。河童が襦袢の上から摩ってる。喜代は夢心地。

「判りました。今日は灸を据えましょう」

河童は側に居る女に何やら告げた。女は喜代の襦袢を肩の方から下げ、腰の辺りに何かを置いている。艾(もぐさ)だ。喜代は灸を経験した事がない。何やら不吉な予感。女は、じっとしてろと言う。部屋に入った時に他の患者を見たが、皆、煙が出ているのに平気な顔をしていた。あたしも平気だろう、と思った途端、全身に熱さを感じた。

「ひゃあ、熱(あつ)いっ！」

大声を上げた。隣の部屋から先生が飛び込んできた。

「灸は、患部を熱することにより血の巡りを良くするものです。ゆったりとした気持ちで居なければ良くなりません。熱いのは当たり前。大声は出さないように」

死ぬ思いで治療が終わった。料金はさほど高くない。退(ひ)きもきらずに患者が来ている。喜代、やっと冷静になり考えた。こりゃ儲かってるわ。なにしろ先生がイイ男。患者は、女ばかり。河童先生、毎日女に囲まれてるんだ。

話を聞いた弘兵衛、女ばかりか……。ちょっと羨ましそうに言った。

「言った通りイイ男だっただろう。喜代、良かったな」

だが、そう毎日、女ばかりじゃ逆にうんざりするだろう。拙者だったら何かスカッとした事が遣りたくなる。成る程な。河童の所に一味の男が来ては目立つ。連絡などは女が遣っているな。

綾と奈美は久しぶりに道場で稽古をした。汗を拭き二人で道場を出た。ぺちゃくちゃ話しながら二人の分かれ道に着いた。

「じゃあ、また明日、お宅にお邪魔するわ。皆も集まるんでしょう」

「えぇ。あらっ！　綾さん、あれ見てっ！」

綾もビックリした。例の大八車だ。

Copyright© H.Mitani

「ねぇ、どうする」
「どうするって決まってます。後を付けるんです」
「大丈夫？」
「私は与力の妻です。これしきの事、どうって事ありません。ここで逃げては名折れになります」
「まあ、立派っ！　付けましょう」
若い商人風の男が尻っぱしょりをして一人で引いている。急いでいるようだが動きは速くない。荷物を乗せていないからといって、そう早く引くことは出来ない。何しろ男八人の代わりになるとの事で、元々は代八車と言われていたものだ。二人は余裕を持って後を付けることができた。小半時も経っただろうか、郊外に近い人気のない所に来た。これからは注意深く付けなければならない。二人が身を引き締めた頃、大きな寺が見えてきた。大八車が広い境内に入っていった。これ以上付けるのは危険だ。
「大きなお寺ね。でもボロボロ。住職も居ないような感じね」
「見てよ、りっぱな石碑。名前が刻んであるわ。えぇと鷹野山観弁寺って読める。ねぇ、そろそろ帰った方が良いわ」
「一所懸命付けたけど、どう思う、一味かしら」
「一味に決まってます。与力の妻の勘には間違えはありません」
「まあ、すっかり伊銀さんの奥様ね」
「当たり前です」
二人は顔を見合わせニコっと笑った。絶対に、これはお手柄よッ。

翌日、伊銀の屋敷。皆が集まっている。
「そうか、正造は十日ほどで帰ってくるか。仙吉、良く遣った。奴らは正造が帰って来てから動き出すと思われる。仙吉、張り込みを続けてくれ。観弁寺。だだぴろい荒れ寺と言うことは、何かと一味にとっては使い勝手が良い事になる。奈美、済まぬが絵図を持ってきてくれぬか」
伊銀は観弁寺を中心に円を描いた。
「成る程。さあ、見てみろ。この円は、だいたい一里半。例の三軒もこの円の中に入る。弘兵衛が言う西邑は菖蒲町、ここだな。丹羽は五郎兵衛町、新田は木下

Copyright© H.Mitani

町。丹羽と西邑は入るな。だが、新田は外れる。しかも二里以上離れている。弘兵衛、卯吉、丹羽か西邑と考えて良いのではないか」
二人は頷く。
「いや良く遣った。二人に褒美を遣りたいくらいだ」
「あら、ちょっと待って！　遣りたいぐらいって何もご褒美はないの」
綾が膨れっ面で言った。奈美は下を向いている。私は与力の妻。ご褒美が欲しいなんて言えません。そんな感じである。
「まあ、その－褒美だが、別に何も用意できないのじゃ。奉行所には余裕がない。拙者の懐も……」
「イイのよっ！　今のは冗談。弘兵衛さん、河童の方は、どうだったの」
「患者は女ばかり。退きも切らずに患者が来ているらしい。それに真面目に仕事を遣る男のようだ。しかしな、拙者にも経験があるが、女に囲まれイイ子ぶっているのは結構しんどいもの。パーっと何かを遣りたくなるものじゃ。パーとなっ！　世間に隠れての盗みなど、もって来いじゃ」
「まあ、女に囲まれてたんですか。弘兵衛さぁん」
奈美が、やたらと言葉を伸ばして言った。
「そ、そうじゃ。紀州での話じゃがな」
しかし、誰も信じない。
「正造も凪続きの船旅。イライラも溜まっている。盗みの準備は正造が戻ってすぐに始めるはずだ。実行するのは、その数日後の雨の日だな。雨の日など我々では予測できんが……。まあ良い。天気の良い日が何日続くか判らんが、注意を怠らないようにすれば何とかなるだろう」
「旦那、例の二人の飯炊き女ですが、このままで……」
「しょっ引けば奴らは中止するだろう。泳がせておく以外にない」
「伊銀、今一人、一味が判れば良いがなぁ」
弘兵衛が言った。
「弘兵衛さん、あっしは口入れ屋に当たるつもりです。西邑、丹羽。何ヶ月か前に誰か入れた者がいないか。あっしの勘ですがね、必ず居ると思いますよ」
伊銀は、やっと奉行に詳細を話した。事が起これば南町だけでなく北町にも応

Copyright© H.Mitani

援を頼まなければならない。このような事は滅多にない。案の定、奉行は顔をしかめた。
「なにも北なんぞに手を借りる事はない。南だけで充分じゃ。伊銀、ニ軒のうち何処に押し入るか絞れ。良いな、北町には頼まん」
まったく了見が狭い。これで取り逃がしたりしたらどうするのだ。南だ北だなどと言っている場合ではない。しかし上司の命令、従わざるを得ない。人手が要るようであれば生駒屋にでも頼むか……。

弘兵衛、伊銀とも近頃、ヤットーを遣っていない。二人連れ立って松井道場に行った。今のうちに体をほぐしておいた方が良い。奈美は師範代として元服前の若い連中を扱いていた。二人は、しばし竹刀を交え汗を流した。道場の隅に座り奈美の稽古を眺めたが、結構、きつい指導だ。半べそをかきながら竹刀を振っている者もいる。
伊銀が立ち上がり、奈美に何かを言った。奈美が休憩と言った。道場の中央に伊銀と奈美が立った。夫婦で一本、遣ろうと言うことらしい。なんと木刀を持っている。型どおりの挨拶をして、二人が向き合った。正眼の構え。二人とも動かない。奈美が、たまに掛け声を掛ける。甲高いドキッとするような声。さすがだ。掛け声の重要さを奈美は知っている。普通の者であれば、あの掛け声で怯んでしまう。弘兵衛は感心しきりであった。一方、伊銀の掛け声は低い太いもの。腹の底から搾り出すような声である。まるで体が浮いてしまうのではと錯覚するほどの掛け声。しかし、二人は動かない。掛け声の掛け合いである。気付くと二人とも汗びっしょりになっている。他の門弟たちは、それこそ固唾を呑んで見ている。掛け声を聞くたびに、ほとんどの者が体をピクッ、ピクッと動かしている。
四半時ほど経ったか、二人は木刀を下げた。正座し挨拶。終わった。
「遣るな、おぬし達」
「おう、実はな、奈美と対峙したのは初めてなんじゃ。恐れ入った。凄い女を女房にしてしまったよ」
「生半可な奴であれば、奈美殿の掛け声だけでチビッてしまうな」
「奈美の掛け声は男と違い、脳味噌に直接響く。下手すると眩暈が起こるほど。大したものじゃ」

Copyright© H.Mitani

伊銀、満更でもない様子。二人が話していると汗を拭いた奈美が来た。相変わらず上気した顔が美しい。
「ふふ、たまには良いわね」
河童を見張っていた松造とサブが玄関に来た。伊銀、弘兵衛が玄関に行った。
「伊銀の旦那。料亭鶯の女将ですが匂いますね。鶯は河童の所から歩きで小半時。あの近辺にも腕の良い針灸院はありますからね。しかも張っていただけで都合三回も来ています。針灸ですよ……」
「松造、サブ。よく遣った。一味と考えても良いようだな」
弘兵衛が聞いた。
「その女将は、どんな感じの女だった」
サブは身を乗り出すようにして答えた。
「いやあ、もうピチピチとした体付きで元気一杯って感じでした。俺は、あぁ言うはちきれんばかりの女っていいなあ」
「そうか、元気一杯か」
「しかも、いい女なんですよ。付いて行きたくなるような女でしたよ」
松造は滅多に女について話すことはない。余程のイイ女。しかも元気一杯の女将。
「そうか、元気が有り余っている感じだな。盗みでも遣って発散しようと言う訳だな。本当に良く遣った。今一人と思っていたが料亭の女将か。これで襲う日が判る」
「エッ！　何故ですか？」
松造とサブ、同時に声を上げた。
「雨の日など、こちらが予測する必要はなくなったわ。ワッハッハー」
急に弘兵衛、大声で笑い出した。梅吉と喜代が気味悪がったのも頷ける。門弟たちも不信がっている。
「料亭は夜が勝負。しかも女将が居なければ料亭は歯が抜けたようになる。伊銀、鶯は休みを取るはずじゃ。襲う日にな。料亭は急に休む事は出来ん。数日前に知らせなければ客が怒る。客商売とは、そういうもの」
「成る程。よしっ、サブは引き続き河童じゃ。松造は鶯。抜かるなよ」
「がってんだっ！」

Copyright© H.Mitani

二人は伊銀の家に向かった。家に着くと程なくして卯吉が来た。
「旦那、遣りましたよ。丹羽屋ですな。三ヶ月前に入れてます。口入れ屋への口上も同じでした。ほぼ間違えないでしょう」
「そうか丹羽屋か。よし丹羽屋を中心に考えよう。念の為、西邑も眼中に入れておくがな。卯吉、料亭鶯の女将が絡んでいるようだ。弘兵衛によれば盗みの数日前に、休みを贔屓に知らせるはずとのことだ。さて捕り物の準備に入ろうか」
伊銀は大きく伸びをした。
「弘兵衛、卯吉。今一度、重要な点を整理してみよう。弘兵衛、済まんが書き留めてくれるか」
・襲う日は正造が戻った後、正造が雨の日を読み決める
・その日とは、鶯が休みを取る日
・四軒めは丹羽屋と思われる
・人手の手配は丹羽屋を中心とする。西邑にも手の者を配置する
・当初の考えと異なり、大八車は、勘弁寺、一箇所と思われる
・襲った後の集合場所も勘弁寺と思われる
・盗品は勘弁寺に集められていると考えられるが、一味を捕らえた後で調べる
・新たな一味の探索は気が付かれる可能性があるため無理をしない
・一味、十数名全員が一箇所に集まった段階で一網打尽とする手立てを考える

「さてと一網打尽の手立てだが……」
「旦那、張り込むにしても大勢が隠れる場所を見つけなければなりません。これは、あっしが捜しやしょう。問題は雨です。雨の夜……」
「奴らは龕灯（がんとう）を使うだろう。もともと強盗提灯と言われている。我々も用意しよう。それに捕り方の道具立ても大掛かりになるな。何しろ十数名だ」
「ドンチャン騒ぎになるでしょうね。怪我人も多く出る」
「卯吉。まぁ、これが我々の仕事よ。心して掛かれば怪我人も少なくて済む」
弘兵衛、さっきから二人の話をニヤニヤしながら聞いている。
「先程から何を大袈裟な事を申しておるのじゃ」
二人はムカッとして弘兵衛を睨んだ。
「何だとっ！　大袈裟だとっ！　弘兵衛、聞き捨てならんことを申すな。拙者、

Copyright© H.Mitani

普段は滅多に怒らんが時と場合による。今一度申してみよ」
「そう怒るな。拙者の読みはこうじゃ。良いか、奴らは遊びで遣っているのだ。死に物狂いではない。多分、刃物も持っていないと思うがな」
顔を見合わせた二人、キョトンとした雰囲気で、しばし沈黙。
「では準備は要らんと言うのか」
「いやいや、そうは申しておらん。拙者の読みが外れた時には大事(おおごと)じゃ。手抜かりなく準備する事は肝要だが、おぬしらはちと大袈裟すぎる。奴らは白川夜船とか渾名され楽しんでおるのだ。一味が屋敷に入った段階で、パーっと灯りでも点け、思いっきり驚かせてやれば良い。奴ら、それで終わりよ。ニヤニヤ笑って大人しくお縄になる」
そう言われてみれば、そのようにも思える。しかし、伊銀は一通りの道具立てをすることにした。
「伊銀、灯りだが……　普通の龕灯では面白くない。でかい龕灯を五、六個作り、同時に照らせば奴らはビックリするぞ。どうだ拙者に任せてはみては」
「こ、弘兵衛、そんなものを作る金など出ないぞ」
「だから、金の工面も含め任せろてみろよ」
「ま、金を出さないで良いのなら構わぬが……」
「よっしゃ！　楽しくなってきたぞ」
どうも伊銀と卯吉は楽しむ気にはなれない。
龕灯とは鉄板などで釣り鐘状の枠を作り、その中に自由に回転する蝋燭立てと反射鏡を取り付けたもの。どのような方向に向けても蝋燭は垂直になるため火は消えない。しかも前方だけ照らし、相手からは自分の姿は見えない。
弘兵衛は、普通の龕灯に比べ三倍くらいのものを作る気でいた。佐吉に頼めば喜んで引き受けるだろう。金の算段は伊東屋、緑青堂、波多野屋を巻き込むことに決めている。白川夜船を捕らえると言えば金は出す。材料、職人は、金物問屋と緑青堂に手配させる。
佐吉の所に行き事情を話した。佐吉は忙しい最中だったが、弘兵衛の説明が終わると同時に話し出した。
「弘兵衛さん、一言いっておきますがね、今度の捕り物に声を掛けてくれなかったら今後一切、手伝わないつもりでしたよ。私だけじゃないですか加わっていな

Copyright© H.Mitani

かったのは。私から乗り込むのも大人気ないと思いじっとしていましたがね」
「ま、そう言うな。結局、このように頭を下げに来たのだから」
説明を聞きながら佐吉の頭の中には、すでに図面が出来上がっていた。
構造は普通の龕灯と同じだが、多少重くなるため取っ手を釣り鐘の枠に二つ付ける。つまり両手で持つようにする。灯りは蝋燭ではなく油にする。灯心を太くし灯りを強くする。上に向けることはないだろうが、念の為、灯心の上に傘を付け雨を防ぐようにする。
佐吉は図面を認(したた)め、弘兵衛と共に緑青堂に行った。話を聞き、図面を見た緑青堂の主人は、一も二もなく職人の所に案内してくれた。

総ての準備は整った。卯吉は丹羽屋の周りを調べ、身を隠せる場所を捜した。さらに、少し離れた所に町方連中が待機できる場所も見つけていた。こうなると不謹慎ながら、その日が早く来て欲しいと思ってしまう。

仙吉から連絡が入った。正造が戻ったと言う。仙吉は正造をチラッと見たが、眉間に皺を寄せイライラした表情。周りに当り散らしていたと言う。
後は、松造からの連絡待ちだ。鶯が何日休みを取るか。

捕物に絡む者は通常の生活に戻っていた。サブも河童の見張りを終わり生駒屋に戻っている。弘兵衛は相変わらず梅吉にやり込められている。喜代は、あの日以来体の不調を訴えるようになった。仮病である事は明白、川童の所に行きたくて仕方がないのだ。しかし、梅吉は取り合わない。
綾は珍のところで薬草の勉強をしている。本人が言うように珍玄斎はシャキッとして昼寝などしない。あの泥鰌髭は安泰だ。

正造が戻って五日ほど経つが、鶯が休みを取る気配はなかった。伊銀、弘兵衛、卯吉は一日おきくらいに集まっているが、次第に焦りが出てきていた。
「動きがないな。一昨日は雨だったが連中はじっとしていた。弘兵衛、一味は本当
に遣るのだろうな。昨日も今日も良い天気じゃ。当分、雨など降る様子もない」

Copyright© H.Mitani

「……」
「弘兵衛さん、疑う訳ではないのですが、河童と女将をひっ捕らえて泥を吐かせた方が良いのでは。それに観弁寺にも踏み込んだ方が……」
伊銀も卯吉も歯切れの悪い話し方をする。
「動く。奴らは必ず動く。これだけの条件が揃っているのだ。正造のイライラは募っているはず」
三人とも腕組みをしたまま時間だけが経っていった。
奈美が部屋に来た。
「皆さん、お待ちかねの人が来ましたよ」
松造が青ざめた顔で入ってきた。余程、神経を使って見張っていたようだ。
「張り紙が出ました。三日後に休むとの事です。いよいよですかね」
弘兵衛が笑い出した。
「さあ、連中が動くぞ」

伊銀は、自分が指揮をとると言い張る奉行に手こずっていた。余計な事をされては総てがオジャンである。卯吉が言った。
「丹羽屋に押し込むと、もう伝えたのですか」
「いや、伝えていない。それを言えば西邑に人手を廻す必要などないと言うに決まっているからな。すぐに費えを減らそうとする」
「でしたら奉行には、西邑の方を仕切ってもらえば良いのでは……」
「おうおう、そうであった」

奉行は意気揚々と三日後に控えた捕り物に興奮していた。人手を西邑に廻せと言う。等分でと言っても、西邑は丹羽に比べ敷地が広いではないかと注文をつける。最後には拙者の言うことが聞けぬのか、の調子で人手をとってしまった。大型龕灯については話していない。伊銀は弘兵衛の読みに賭ける以外になかった。

カンカン照りの日が続いている。
鶯が休みを取る日、つまり、押し込むと思われる日が来た。朝から良い天気。こんなに良い天気なのに雨など降るのだろうか。伊銀宅に皆が集まっていた。段

Copyright© H.Mitani

取りは既に決まっている。
卯吉、松造、仙吉、サブが丹羽屋の近くに潜み、一味が丹羽に入り込むのを待っていた。見張りが居た場合、多分一人であろうが三人でふん縛る。その後、サブが近くで待機している伊銀たちに知らせる。屋敷の塀に梯子を掛け、大型龕灯を持った町方を配置する。龕灯は五個作ってある。伊銀の合図で龕灯を屋敷内に向ける。
弘兵衛の読みは、こうだった。
一味は大八車を屋敷内に入れる。雨の夜とはいえ、表に出しておくのは危険だ。奴らが気を緩めるのは、あらかた金品を大八車に積み終えようとする頃であろう。その時を見計らって龕灯を向ける。後はお縄にするだけ。奴らは抵抗しないはずだ。店の者、町方、いずれを傷つけても、それは強盗になってしまう。綺麗ではない。遊び心を貫くはず。

既に暮六ツ。太陽は西の空に沈んだ。しかし、空はまだ明るく良い天気だ。全く雨など降る様子はない。現場に行く時刻は亥の刻としている。皆は奈美が作った夕飯を食べたが、空が気になり、味も何も判らない状態。美味しいでもなければお代わりでもない。
奈美は心を込めて作った。不満だったが仕方がない。奈美が夕食を片付け始めた。時刻は五ツ頃。何としたことか、奈美は廊下で茶碗を落としてしまった。
ガッチャーンッ！
皆、ビクッとして奈美を見た。済みませんと言った途端、
ピカーッ！　ガラガラッ！　ピシャーンッ！
近所に雷が落ちた。ザ、ザーッ！　雨だっ。大粒の雨。激しい夕立。この時刻に振り出した夕立は長引く。皆は正造の読みに舌を巻いた。
「本当に振り出したな。これは続くぞ。連中、遣るな」
一同、身を引き締めた。亥の刻まで少し間がある。皆、縁側に行き、雨を眺めている。ピカーッ！　ガラガラッ！　雷と雨が、これほど心地良いものとは……。思いは皆同じであった。

待機する場所には町方も揃っていた。蓑などを付けているが役には立ってはい

Copyright© H.Mitani

ない。皆、ずぶ濡れ。伊銀の周りに皆が集まった。伊銀は声を出さないで一同を見遣った。一人一人が頷いた。卯吉達は丹羽屋の近くに身を潜めている。さてと、後は卯吉からの知らせを待つだけだ。伊銀は一人ごちした。

一方、西邑の方は奉行近藤又佐衛門の元、大勢の町方が屋敷を取り巻いていた。蟻の入り込む隙間もないほどである。警護であれば、これで良いだろうが、今回は目的が違う。何とも遣り切れない近藤である。

既に丑の刻に入っているはずだが、卯吉からの連絡はない。一番辛い時間である。ただ待つ以外にない。町方はこのような事には慣れているのか静かに待機している。堪らないのは弘兵衛であった。先程から貧乏揺すりのし通しである。しきりに伊銀を見る。伊銀とてイライラは募っている。しかし、場を取り仕切る者として、泰然自若とした姿勢が必要。家紋の付いた被り物から雨が滴り落ちる。腕組みをして、じいっとしている。

「伊銀、良くもそうやってじっとしていられるな」

「では何をすれば良いのじゃ。歌でも唄うか。太鼓でも持ってくれば良かったのか。思いは同じじゃ。拙者も、おぬしのように貧乏揺すりがしてみたいわっ。しかし、拙者には役目、立場がある」

「おうそうかそうか。真面目で良い。仕事に励め。良いな」

伊銀はむかついていた。この男、閑になると何を仕出かすか判らん。人をオチョクリおって。後で覚えていろ、ギャフンと言わせてやる。弘兵衛は落ち着きなく町方の着物を直してやったり、大型龕灯の油を調べたりしている。

大型龕灯を実戦で使うのは初めてのこと。試してはいるが、もしもの事があってはと佐吉も控えている。

「弘兵衛さん。触らないで下さいよ。壊れたりしたら大変ですよ」

「何を言うか。発案者は拙者だ。言わば生みの親。親が子供の面倒を見て何処がいかんのだ」

さすがに伊銀が傍に来た。弘兵衛の頭を指揮棒でピシャリ。

「痛っ！　何をするかっ！」

「静かにせいっ！　気付かれたら元も子もないわ。事の次第を梅吉に喋るぞ。落

Copyright© H.Mitani

ち着きのない子供じゃと」
急に弘兵衛、大人しくなった。

こちらは卯吉。防火用水桶の後ろに身を潜め、既に一時半が経つ。こちらも辛い仕事。松造、仙吉は経験があるが、卯吉はサブの事が気掛かりだった。サブは、サブでいい加減我慢の限界近くまで来ていた。しかし、これが勤まらなければ卯吉の手下にはしてもらえない。必死で眠さ、雨、蚊の痒みに堪えている。

来たッ！　丑の刻半（なかば）、黒装束に身をかためた一団が、路地を曲がって現われた。雨の音に掻き消され、物音一つ聞えない。

大八車は二台。人数は暗くて良くは判らぬが確かに十人は超えている。門の前に来た。一人が、小さく門を三つ叩いた。すると中から門が開いた。ゆっくりと静かに。一味は、サ、サーと屋敷内に入っていった。後に残ったのは一人だけ。見張りであろう。門を閉め、門柱の影に身を潜めた。

卯吉は用意していた小さな石ころを松造、仙吉、サブが潜む場所に投げた。三人が用心深く卯吉の所に集まった。目で門柱を指す。卯吉は小声で言った。

「松造は門柱の向こう側に行け。時間はある。屋敷の裏側を通って行け。仙吉は門柱のこちら側。サブは俺と一緒にここに居ろ。松造が向こう側に着いたら、俺とサブが見張りに近づく。奴がこっちに気付いたら松造が飛び付け。仙吉もすぐに飛び付け。イイかっ、まず口を塞ぐんだ。良いなっ！　声を出されては拙い。すぐに当て身を喰らわせろ。いくぞっ！」

松造、仙吉が身を屈めてその場を去った。

松造が門柱の向こう側に着いた。卯吉とサブが立ち上がり、身を屈めて静かに見張りの者に近づき、サッと立ち上がった。不意をつかれた見張りが、呼子のようなものを口に……。だが、松造が後ろから組み付き、口を塞いだ。当て身は卯吉が。呆気なく見張りは身を崩した。サブが猿轡を掛け、仙吉が腕を縛った。松造が、変な顔をしながら自分の手を見ている。

「何を遣ってるんだ。ボケーっとして」

「親分、こいつ女ですぜ。さっき組み付いたら胸がでかく柔らかかった。もう一度、触りてぇ」

Copyright© H.Mitani

「馬鹿野郎っ！　何言ってんだ、こんな時に。おめぇじゃ駄目だ。仙吉、サブ、こいつを担いで旦那に知らせろ。いいな時間はあるんだ。急く事はない」
「へっ！」
二人は、その場を離れた。
「親分、あれは鶯の女将ですな。プーンと品のイイ化粧の匂いがしやした」
「そうか。細かい所に気が付くのはイイ事だがオメーが話すと、助平ったらしいな。色気付きやがって」
卯吉は、松造めイイ目見やがって、役割分担を間違えたなと一人悔しがる。屋敷からは物音一つ聞えない。
知らせを受けた伊銀たち。さっと持ち場を離れ現場に行った。皆、手馴れたもの。こちらも物音一つ立てないで動く。
卯吉が始めやしょうと小声で言った。松造は、まだ手を眺めている。伊銀が、どうしたのだと卯吉に聞いた。卯吉は、旦那あいつ今夜は使えませんと言う。理由を聞きたかったが、今はそれどころではない。
早速、梯子や大型龕灯の方に目を向けた。庭に面した場所、五箇所に梯子を立てた。龕灯には、既に火が点けられている。ものすごい明かりだ。龕灯を持った町方が龕灯の向きに注意しながら慎重に梯子を登った。その後に、もう一人が登り龕灯を持つ者を支える。
伊銀も梯子に……そして中の様子を見た。雨は、ザーザー降っている。真っ暗な中に、奴らの龕灯の光があっちこちに動いている。確かに十人以上は居そうだ。大八車には一人づつが付き、取っ手を押さえている。
蔵は開けられていた。中から二人掛りで千両箱を運んでいる。その足元を龕灯で照らす者がいる。決して水平以上には龕灯を向けない。外に光が漏れないようにしているのだ。良く訓練されている。龕灯を持っているのは、多分女だろう。部屋からも物品が運び出されている。見ると寝巻き姿の女が指図をしている。飯炊き女だろう。屋敷を隈なく知っているはずだ。一味は実に手際が良い。動きは、何か踊りを踊っているような調子だ。
ふと見ると弘兵衛が隣の梯子に乗って中を見ている。実に嬉しそうな表情だ。伊銀は弘兵衛の読みには一目置いている。変な奴だ。鋭い時はやたらと鋭い。しかし、普段は、そんな雰囲気など全くない。弘兵衛がこっちを見た。顎で庭の方

Copyright© H.Mitani

を指した。
大八車には金品が積み込まれている。かなりの量だ。大きな油紙であろうか、大八車を覆っている。準備の良い連中である。既に小半時が過ぎている。そろそろ終わるのであろうか、連中が周りを見渡している。小柄な者が……　男であろうか指を立て庭を指している。寝巻き姿の女が奥に入っていった。どうやら終わったらしい。何人かが大八車の覆いを縛り始めた。他の者は何やら話し合っている。動きは止まっていた。
伊銀が房の付いた指揮棒を上げた。
大型龕灯が庭に向けられた。庭は昼間のような明るさに包まれた。一味は、ギョッとした表情で龕灯を見た。ある者は目を押さえている。暗闇に突然の光である。賊も捕り手も無言であった。
「南町奉行所与力、伊藤銀之助だ！　神妙にいたせっ！」
伊銀の低く太い声が響いた。一味は光に慣れたのだろうか、静かに伊銀の方を見た。先程の小柄な男が前に出た。振り返って一味に何か言ったようだ。十数名の賊は覆面を取った。静かな行動だ。慌てる者は一人もいない。まるで、予めこのような場を想定していたような行動である。男が声を出した。
「鎌伊銀。四軒めで捕らえたか。まぁ見事（みごと）と言えるかも知れんな。おぬし一人の読みではあるまい。しかし、おぬしの手柄じゃ。さあ、大人しくお縄といくか。なあ、ご一同」
一味は雨の中、地べたに座り込んだ。伊銀が合図をすると町方が庭に入った。伊銀たちも梯子から降りて庭に入った。
「縄は要らんだろう。なあ、ご老人」
「わっ、はっはーっ！　よう言うわ。きつく縛られるのはご免じゃが、やはりお縄にならねば事は終了せん」
町方が縄を掛けた。伊銀、弘兵衛、卯吉は顔を見合わせて頷き合った。しかし、伊銀は自分自身にとって重要な事を忘れていた。
松造たちが部屋の中から出てきた。
「全く目を覚ましません。このままで良いでしょうか」
「構わん。盗まれた物は総てこの大八車にある。朝になれば気付くであろう。門

Copyright© H.Mitani

だけは閉めておけよ。別の盗賊に盗まれでもしたら事だ」
寝巻き姿の女を含め総勢十三名。一味を連れて南町奉行所に戻った。一味を牢にぶち込み、皆は一段落の思いであった。
伊銀は、この時になって初めて思い出した。
「いかん！　奉行を忘れていた」
どちらかに賊が来た場合、互いに連絡を取り合う手筈であったのだ。伊銀は、すっかり近藤のことを忘れていた。既に七ツ、三時（みとき）ほどが経っている。
この事が後に騒動を起こすことになる。
伊銀は雨の中、西邑屋に向け馬を飛ばした。

近藤らは、まだ見張っていた。ほとんどの者が寒さのため体を震わせていた。
伊銀は、近藤に報告した。
「奉行！　一味は丹羽にッ！　既に、ひっ捕らえ、奉行所牢内にぶち込んであります。連絡が遅れてしまいました。誠に、誠に申し訳なく思っております」
聞いた近藤。
「ばっ、馬鹿者っ！　何を言っておるのじゃ。こ、この大馬鹿者がっ！」

取調べは伊銀が担当した。近藤は顔も見せない。町方奉行所を管轄する老中宛に書をしたためている。勿論、伊銀の不始末についての報告書である。
一味は取調べに対し、何でもスラスラと答えた。頭領は小柄なあの男であった。浪人学者で寺子屋を遣っていた。神崎虎之進。既に五十六歳だが矍鑠（かくしゃく）としたもの。一味は総勢十六名。神埼以下、正造、それに漁師仲間が三名。漁師の女房どもが四名。商人が三名。その中の一人が錠前屋。河童も居る。観弁寺住職。鶯の女将と板前の亭主。皆、大人しく調べを受けた。内容は、ほぼ弘兵衛が読んだ通りであった。

世の中は平穏になった。これでは面白くない。何か遣らかそう。企てたのは神崎であった。寺で住職と呑んでいるうちに話が進んでいったと言う。この二人は河童の親父と幼友達。数年前、親父の葬式で顔を合わせ、意気投合したらしい。鶯で三人が呑みながら企てを練っているのを女将が聞きつけ、仲間になったらし

Copyright© H.Mitani

い。亭主は女将の言いなり。必要なのは空読みと眠り薬。正造に話をつけたのは女将だった。正造が漁師だった頃、魚などを入れていたのが縁だった。漁師連中は金が目的だったが、次第に楽しむようになったらしい。盗んだものは観弁寺に手付かずのまま置いてあると言う。もっとも、漁師には十五両づつ渡したらしい。百五両が消えた事になる。

観弁寺には奉行所の者が行き、金、盗品の一覧を作った。盗まれたものは、既に伊東屋、緑青堂、波多野屋から報告を受けている。両方の一覧を比べてみるとピタリと一致した。普通であれば盗まれた物を多く報告するものだが、この三軒とも正直である。

観弁寺で盗品の引渡しが行われた。三軒の主人は大八車を持ってきていた。順繰りに一覧に基づき引き渡される。実に鮮やかに事が進む。最後に百五両が足りなくなる。三軒は顔を見合わせ、自分たちの一覧から三十五両づつを引いた。奉行所のものが不信がると、ほとんどが手付かずで戻ってきた。此れしきの金でとやかく言いたくないと言う。波多野屋などは、雨だったのに反物には全くシミも付いていない。丁寧に扱ったのだろうと感心している。緑青堂も凹みや傷が付いていないのを確かめ、ニコニコ笑っている。連中は物を大切にすると、これまた感心している始末。伊東屋も同じ。お宝と大事にしていた掛け軸などは、キチンと虫干しされているとありがたがっている。つまり、一覧から三十五両づつが消されたことにより、盗品は総て戻った事になる。

伊銀も立ち会ったが、主人たちが総て戻ったと言う以上、被害はなかったことになってしまう。人も傷つけていない。被害は畳が汚れたくらいである。誠に奇妙な事になった。店の主人たちは無かった事にしてくれなどと言い出し始めた。言い草が振るっている。自分たちが油断したことが原因。今回の事件は、強盗に対する注意を怠るなとの戒めにもなる、言わば犯罪防止に役立つことである。誉めても良い事だなどとぬかす。庶民は楽しんだ。芝居であれば金を払わなければならないが、これは無料。庶民の鬱憤を晴らした薬のようなもの。暗に咎めるなと言っている。伊銀は困ってしまった。犯罪である事は確か。しかし、言い草にも賛成出来ない事はない。果たして奉行は、どのような裁断を下す事やら……。

三人が咎めるなと言う裏には、白川夜船に襲われた店との噂が広まり、客が後

Copyright© H.Mitani

を絶たず、以前にも増して儲かったためであった。宣伝効果は抜群。笑いが止まらないとは、こう言うことを言うのかも知れない。

波多野屋は、近藤に言い寄った。連中に咎を与えたら承知しませんよ。近藤は、すでに伊銀から取り調べ内容の報告書を受け取っていた。報告書には、伊銀の意見も添えてある。被害は無くとも罪は罪。軽いものであっても処罰は与えるべき。その通りであった。報告書を受け取ると同時に、伊銀には謹慎を言い渡している。当夜の連絡不手際に対するものである。伊銀は、覚悟はしていたものの憂鬱な毎日を送っていた。明らかに自分の不手際。申し開き出きるものではない。

近藤の悩みは大きかった。処罰すれば波多野屋が何を言い出すか判ったものではないし、今までの賂の件などを老中に言うかも知れない。処罰を与えなければ、奉行として失格である。どちらに転んでも事態は悪くなる。眠れない夜が続いた。出した結論は辞職であった。

近藤は、老中に会った。捕り物の最中、長く大雨の中に居た。これが元で体調を崩した。回復には時間が掛かるため、勤めを真っ当できない。老中は、辞表を受け取る以外になかった。

南町奉行が空席のまま、何日かが経った。事件の決着も付いていない。

老中が集まり南町奉行を決めようとしていた。しかし、該当者が居ない。皆が頭を抱えていると三太夫が入ってきた。

「何を悩んでいるのじゃ。どうせ大した問題ではなかろうに。拙者に言ってみろ。即解決じゃ」

老中連中は無視をしようと思ったが一言だけいった。

「南町じゃ」

「なんと、近藤の後釜か。誰でも勤まるのではないか。与力、同心連中が優秀じゃからな。いっそ与力から選んでも良いのではないか」

となれば伊銀になる。老中連中にとり、真面目で融通が利かない伊銀は煙たい存在である。しかし、致し方ない。三太夫は何やらほくそ笑んでいる。

伊銀の家に老中の使者が来た。伊銀は、近藤が辞職した事を知らない。裃姿になり覚悟を決めていた。お家取り潰し。鉄之助の顔がちらつく。伊藤家は拙者で終わりか。折角、奈美と所帯を持てたと言うのに。

伊銀は、居間で平伏していた。使者が声を出した。

Copyright© H.Mitani

「伊藤銀之助、表を上げい。ご公儀からのお達しじゃ。神妙に聞けぃ。本日より伊藤銀之助を南町奉行に取り立てる。ありがたくお受けし勤めに励め。さらに伊藤家が子々孫々に至るまで奉行として勤めを全うするよう心得よっ！」

「へへぇっ！」

伊銀の頭の中に入っているのはお家取り潰しの事だけである。使者の言葉は耳に入っていない。使者の身分は高くはない。知らせを伝え終わると下座に移り、歓談するのが普通である。今回も下座に移り、ニコニコと伊銀に語りかけた。

「伊藤殿、良かったな。目出度し目出度しじゃ」

伊銀は、キョトンとした顔で使者を見た。目出度い？　こやつ何を言っているのだ。

「相済まぬ事とは存ずるが、今一度、お沙汰を申してはくれまいか。お家取り潰しにしては、お沙汰の内容が長すぎるように存ずるが……」

今度は、使者がキョトンとした。この男、これで奉行が勤まるのだろうか。首を傾げながら書状を渡した。　伊銀は、渡された書状を読んだ。極細の目を、おっ広げ、叫び声を上げた。

ウッ、ギャーっ！

使者は、この場にいては何が起こるか判らんと、即、席を立ち、では宜しゅうの一言で帰ってしまった。驚いたのは奈美である。まさか取り潰しのお沙汰を聞き、腹でも切ったのではと飛んできた。伊銀は、アワワ、アワワと書状を指差した。

奈美は書状を読んだが、あら家の亭主、お奉行様になるんだ。あ、そう。これだけであった。女とは、度胸が座っているのか、理解できてないのか判らない事がある。

こうして南町奉行、伊藤銀之助が誕生した。

白川夜船の連中には、一年間の江戸払いの刑。十六人が江戸を離れる時には、庶民が盛大な見送りをした。

「一年経ったら戻って来い。待ってるぞう！」

大声で見送る連中の中に喜代がいた。河童を見ると手を振り、後を必死で追い

Copyright© H.Mitani

掛け出した。

「先生っ！　我慢できないくらい腰が痛いんだよう、何とかしておくれぇー！」

嘘を付けっ！　腰が痛くて、そんなに早く走れるものかっ！

（了）

Copyright© H.Mitani

譚綴

与力伊藤銀之助

『伊銀捕物帖』

二〇〇五年二月十六日（改）

編集・発行者　エムツー・プラデオ
三谷　弘

禁無断転載・複写

M²PlaDeO
Planning & Design Office
Copyright©Mitani2005

Copyright© H.Mitani